

355
84

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

始





日用
文字便覽

大正
8. 1. 17
購小



序

近時、青年學生の手に成れる作文や、世間一般に行はれて居る日用文や、その他、廣告引札類の文章を見ると、餘りに此の道具しらべが疎かにされて居るのに驚くのである。敢て大きく文章とは言はない、せめて漢字の字畫の誤や、字義の間違や、假名遣の亂雜やに、今少し注意を拂つて、疵の無いやうにして貰ひたいのである。併し多種多様の知識技能を習得せねばならぬ現代にあつては、専門家以外、文字に多くの苦勞をする暇は無い。そこで、本書には、其の實際的方面の大要を纏めて、日用の便に供することにした。

大正六年十二月

編者識す

凡例

- 一本叢書は、國民教育に根柢を置き、學校科外に於ける無上の良教科書、青少年に對する絶好の良友たらしめんとして發行したものである。
- 一本叢書は、有益にして趣味ある材料をあらゆる方面に採り、内容の精選充實に努め、知らず識らずの裡に智能を啓發し、徳器を成就し、堅實善美なる性情を涵養せしめんことを期した。
- 一本叢書は、讀者の自學自習に適せしむべく、其の行文を平易簡明にし、又概ね繪畫をも挿入することにした。
- 本書、日用文字便覽は高井運吉氏の執筆されたものである。

日用文字便覽

目次

同訓異字便覽

『ア』の部

- (あゐ) 嗚呼、於戲、嗟、吁、噫、嘻、唉、惡……………一
- (あか) 赤、紅、丹、朱、緋、赭、殷……………二
- (あがなふ) 購、贖……………二
- (あきらか) 明、昭、灼、熙……………三
- (あく) 飽、厭、饜、飮……………三

目次

- (あく) 擧、揚、扛、昂、稱、颯……………三
- (あざむく) 欺、瞞、謾、詒、誕、誑……………四
- (あし) 惡、凶、醜、慝……………五
- (あした) 旦、晨、朝……………五
- (あだ) 仇、讎、寇……………五
- (あたかも) 宛、恰……………六
- (あたたかし) 暖、溫、暄、煖、煦……………六
- (あたる) 中、當、直、方、丁、抵……………六
- (あづかる) 預、與、干、關……………七
- (あつし) 暑、熱……………七
- (あつし) 厚、篤、敦、惇、渥、腴……………八
- (あつむ) 集、聚、纂、輯、輳、萃、鍾、擯、叢、醜……………八

(一)

(あと) 跡、迹、蹟、踪、蹤、趾、址、墟、轍、軌、痕、後……………九

(あな) 穴、孔、坎、坑、竅……………一〇

(あなどる) 侮、慢、易……………一〇

(あばく) 發、訐……………一一

(あはれむ) 憐、憫、哀、矜、恤……………一一

(あふ) 遇、逢、遭、值、會、合、晤……………一一

(あぶら) 脂、膏、油……………一二

(あふる) 炙、炮、烘、焙……………一二

(あへて) 敢、肯……………一三

(あまねく) 周、普、徧、遍、洽、浹……………一三

(あまる) 餘、剩、贏、衍、羨……………一三

(あや) 文、斐、絢……………一四

(あやふし) 危、殆……………一四

(あやまる) 過、愆、誤、謬、錯、訛……………一五

(あらし) 荒、粗、暴……………一五

(あらたむ) 改、革、校、更……………一六

(あらはる) 見、現、著、顯、彰、露、表、旌、形……………一六

(あり) 有、在……………一七

『イ』の部

(いかる) 怒、忿、愠、恚、憤、瞋……………一七

(いく) 生、活……………一八

(いこふ) 息、憩、休……………一八

(いさぎよし) 潔、屑……………一八

(いさを) 功、勳、績……………一八

(いそがし) 忙、鬧、忽、冗……………一九

(いだく) 抱、懷、擁……………一九

(いたむ) 悼、痛、傷、疼、戚……………一九

(いたたく) 戴、頂……………二〇

(いたす) 致、輸……………二〇

(いたる) 至、到、詣、造、格、抵、戾、傳……………二〇

(いと) 糸、絲……………二一

(いとま) 暇、遑……………二一

(いづくんぞ) 焉、安、惡、烏……………二二

(いつはる) 僞、詐、佯、陽、譎、詭……………二二

(いぬ) 犬、狗、龙……………二三

(いのる) 祈、禱、讓……………二三

(いはふ) 祝、賀……………二三

(いはんや) 況、矧……………二四

(いふ) 言、曰、云、謂、道……………二四

(いへ) 家、宅、舍、屋……………二五

(いほり) 庵、廬……………二五

(いましむ) 戒、誠、警、箴……………二五

(いむ) 忌、諱……………二六

(いやし) 賤、卑、陋、鄙……………二六

(いゆ) 癒、愈、瘳、痊……………二七

(いよいよ) 愈、彌……………二七

(いる) 入、納、内、容……………二七

『ウ』の部

(う) 得、獲……………二八

(うう) 植、樹、種、栽、藝……………二八
 (うう) 餒、饑、饑、飢、餓……………二九
 (うかがふ) 伺、視、窺、候……………二九
 (うがつ) 穿、鑿……………二九
 (うかぶ) 浮、汎、泛……………二九
 (うく) 受、享、饗、承、稟……………三〇
 (うごく) 動、搖、撼、蕩、盪……………三〇
 (うしなふ) 失、喪、亡……………三一
 (うす) 白、確……………三一
 (うすし) 薄、淡、菲……………三一
 (うたふ) 歌、謠、謳……………三二
 (うち) 内、中、裏……………三二
 (うつ) 討、伐、擊、打、拍、撲、搏……………三二

毆

毆……………三三
 (うつくし) 美、麗……………三三
 (うつす) 移、遷、徙、映、寫……………三四
 (うつたふ) 訴、訟……………三四
 (うづむ) 埋、瘞、填……………三五
 (うばふ) 奪、篡、褫……………三五
 (うまし) 甘、旨、美……………三五
 (うらむ) 怨恨、憾……………三五
 (うらやむ) 羨、艷……………三六
 (うる) 賣、售、沽、賈……………三六
 (うるほす) 濕、潤、沾、濡、滯……………三六
 (うれふ) 憂、患、愁、恤、閔、憫、愍……………三七

【エ】の部

(ゑがく) 畫、繪、描……………三八
 (えらぶ) 選、擇、簡、譔、撰……………三八

【オ】の部

(をか) 岡、丘、阜、陵、阜……………三九
 (をかす) 侵、犯、冒、干……………四〇
 (おく) 置、措、舍、擱……………四〇
 (おくる) 送、贈、餽、遺、貽、賄、賻……………四一
 (おくる) 遅、後……………四二
 (おこたる) 怠、惰、懈、慢……………四二
 (おこる) 起、興、作……………四二
 (おごる) 驕、奢、傲、倨、侈、泰……………四三
 (をさむ) 修、治、理、收、納、斂、藏……………四三
 御、馭……………四三

(をしふ) 教、誨、訓……………四四
 (をしむ) 惜、吝、嗇、愛、慳……………四五
 (おす) 推、壓、擠、捺、押……………四五
 (おそし) 遅、晚、晏……………四六
 (おそる) 恐、懼、畏、怖、怕、惶、怯……………四六
 (おつ) 落、墮、墜、零、隕……………四七
 (をどる) 踊、跳、躍……………四八
 (おどろく) 驚、駭、愕……………四八
 (をはる) 終、畢、卒、訖、竟、了……………四八
 (おふ) 追、逐……………四九
 (おぶ) 帶、佩……………四九
 (おほし) 多、衆……………四九
 (おほふ) 覆、蔽、蓋、掩、庇……………四九

(おほむね) 概率……………五〇
 (おもふ) 思想、懷憶、念……………五〇
 (おもむく) 赴、趣……………五一
 (おもんばかり) 慮、臆……………五一
 (およぶ) 及、逮、迨……………五一
 (をる) 居、處……………五一
 (おろか) 愚、癡、魯、戇、駭、蠢……………五二
 (おろそか) 疎、疏、粗……………五二

『カ』の部

(かうばし) 芳香、馨、馥……………五二
 (かうむる) 被、蒙、冠……………五三
 (かかぐ) 揭、褰、挑……………五三
 (かかはる) 拘、係、關……………五四
 (かすか) 微、幽、杳……………五八
 (かすむ) 掠、略、抄……………五九
 (かせ) 風、颯、颯、嵐……………五九
 (かぞふ) 數、算……………五九
 (かたし) 堅、固、硬、牢、鞏、確……………五九
 (かたじけなし) 忝、辱……………六〇
 (かたち) 形、容、貌、狀、態、象……………六〇
 (かたよる) 偏、僻……………六一
 (かたる) 語、談、譚、話……………六一
 (かたはら) 傍、側……………六一
 (かつ) 勝、克、捷、贏、戡……………六二
 (かつて) 嘗、曾……………六二
 (かなし) 悲、哀……………六三

(かがみ) 鏡、鑑……………五四
 (かき) 垣、牆、籬、藩、堵……………五四
 (かく) 懸、掛、挂、繫、係、系、羅……………五四
 (かく) 搔、抓、爬……………五五
 (かく) 欠、缺、闕、虧……………五五
 (かくる) 隱、匿、竄、潛、藏、韜……………五六
 (かげ) 景、影、陰、蔭……………五七
 (かご) 籠、籃……………五七
 (かさ) 笠、傘……………五七
 (かさね) 重、申、累……………五七
 (かざる) 飾、文……………五八
 (かす) 粕、糟、滓……………五八
 (かす) 貸、假……………五八

換

(かなふ) 適、稱、協、叶、愜、副……………六三
 (かぬ) 兼、攝、該、包……………六三
 (かね) 鐘、鉦……………六四
 (かは) 川、河……………六四
 (かは) 皮、革、韋……………六四
 (かはる) 變、化、渝、易、更、代、替……………六四
 (かふ) 買、沽、酤、市……………六六
 (かふ) 飼、牧、豢……………六六
 (かへつて) 卻、反……………六六
 (かへりみる) 顧、省、眷……………六七
 (かへる) 歸、還、反、返、復、回、旋……………六七
 (かまびすし) 喧、嘩、聒、聒、囂、囂……………六八

(かむ) 嚙、嚼、咀、噬、齧、齧、咬……………六八
 (からし) 辛、鹹、辣、苛……………六九
 (かり) 獵、狩、田……………六九
 (かる) 借、假……………六九
 (かる) 刈、芟……………七〇
 (かる) 枯、機、涸、嘎……………七〇
 (かわく) 乾、燥、渴……………七〇
 (かんがふ) 考、稽、勘、按……………七〇

『キ』の部

(き) 木、樹……………七一
 (きく) 聞、聽……………七一
 (きざし) 兆、萌……………七一
 (かぎむ) 彫、刻……………七一

(きし) 岸、涯……………七二
 (きしる) 軋、轢……………七二
 (きず) 創、傷、疵、癢、瑕……………七二
 (きぬ) 絹、帛……………七三
 (きはむ) 極、窮、究、谷……………七三
 (きびし) 嚴、緊……………七三
 (きり) 桐、梧……………七四
 (きる) 切、斬、伐、斫、翦、剪、截、鑽……………七四
 (きる) 著、被……………七四

『ク』の部

(くだく) 碎、摧……………七五
 (くだる) 下、降……………七五

『コ』の部

(けす) 消、銷……………八〇
 (けづる) 削、刪……………八〇
 (こ) 子、兒……………八一
 (こけ) 苔、蘚……………八一
 (こころむ) 試、嘗、驗……………八一
 (こころよし) 快、慊……………八一
 (こたふ) 答、對、應……………八一
 (ことごとく) 悉、盡、畢、殫、咸……………八二
 (ことに) 殊、特、異……………八二
 (このむ) 好、喜、樂……………八三
 (こひねがふ) 冀、希、庶、幾……………八三
 (こふ) 請、乞、丐……………八三

『ケ』の部

(けがる) 汗、汚、穢、漬、褻……………八〇

(こぼす) 溢、零……………八四
 (こほり) 氷、冰、凍……………八四
 (こも) 菰、薦……………八四
 (こゆ) 越、超、踰、逾……………八四
 (これ) 此、是、之、斯、茲、維、惟、諸、旃……………八五
 (ころ) 頃、比……………八六
 (ころす) 殺、誅、戮、弑……………八六

『サ』の部
 (さいはひ) 福、幸……………八六
 (さかづき) 杯、盃、盞、觴、爵、卮……………八七
 (さかひ) 境、界、疆……………八七
 (さからふ) 忤、逆……………八七

(さかり) 盛、隆、熾、昌、壯……………八七
 (さき) 前、先、往、曩、嚮、向……………八八
 (さく) 裂、割、剖、劈、擘……………八八
 (さぐる) 探、搜、索、摸……………八九
 (さけぶ) 號、叫……………八九
 (ささぐ) 奉、捧、擎……………八九
 (さしはさむ) 挾、夾、插……………八九
 (さす) 刺、指、螫……………九〇
 (さだむ) 定、奠……………九〇
 (さとし) 聰、敏……………九〇
 (さとる) 覺、悟、喻、曉、了……………九〇
 (さむ) 覺、醒、寤、褪、冷……………九一
 (さらす) 晒、曝……………九一

『シ』の部

(さらふ) 溲、擻……………九二
 (さる) 去、距、違……………九二
 (さわぐ) 騒、譟、噪、躁……………九二
 (さを) 竿、棹、篙……………九二

『シ』の部
 (しかり) 然、爾……………九三
 (しかる) 叱、呵……………九三
 (しきりに) 頻、荐、連、切、累……………九三
 (しく) 布、敷、播、鋪……………九三
 (しげし) 繁、蕃、茂、稠、滋……………九四
 (したがふ) 順、從、隨、循、徇、殉、遵、率、遜……………九五
 (しづかに) 靜、閑、徐、謐、寂、寞……………九五

『ス』の部

(しづむ) 寥、闕……………九六
 (しぬ) 死、崩、殞、薨、卒、沒、歿、夭、殀……………九六
 (しばしば) 屢、數、亟……………九八
 (しばらく) 暫、姑、且、須臾、頃刻……………九八
 (しふ) 強、誣、罔……………九八
 (しぼむ) 萎、凋……………九九
 (しりぞく) 退、斥、屏、卻、黜……………九九
 (しる) 知、識……………一〇〇
 (しるし) 證、徵、驗、兆……………一〇〇
 (しろし) 白、素、皓……………一〇〇

(すくなし) 少、寡、鮮、尠 …… 一〇一
(すくふ) 救、拯、濟、援 …… 一〇一
(すすぐ) 漱、雪、澣 …… 一〇二
(すすむ) 進、前、漸、晉、薦、羞、勸、
獎 …… 一〇二
(すつ) 棄、弄、拵、捨、舍、捐、委、釋、
遺 …… 一〇三
(すでに) 既、已、業 …… 一〇三
(すなはち) 則、即、乃、便、輒、迺 …… 一〇四
(すふ) 吸、吮 …… 一〇五
(すべて) 總、凡、都、渾 …… 一〇五
(すみやか) 速、亟 …… 一〇五
(すむ) 住、棲、栖 …… 一〇五

(すむ) 清、澄、濟 …… 一〇六

『セ』の部

(せまる) 逼、薄、迫 …… 一〇六
(せむ) 攻、責、譴、讓、數 …… 一〇六

『ソ』の部

(そこなふ) 傷、殘、害、賊、損 …… 一〇七
(そしる) 非、誹、謗、訕、訾、詆、譏、
刺、毀、誚 …… 一〇七
(そそぐ) 注、瀉、澆、洒、沃、澆、灌、
漑 …… 一〇八
(そなふ) 具、備、供 …… 一〇九
(その) 其、厥 …… 一〇九
(そふ) 添、副、沿、傍、貳 …… 一〇〇

(そむく) 叛、畔、背、倍、反、乖、負 …… 一一〇

『タ』の部

(たかし) 高、崇、隆、喬 …… 一一一
(たがひに) 互、遞、迭 …… 一一一
(たがふ) 違、差、爽、升 …… 一一一
(たから) 寶、財 …… 一一二
(たき) 瀑、瀧 …… 一一二
(たくはふ) 蓄、貯、儲 …… 一一二
(たくみ) 巧、工 …… 一一二
(たけなは) 闌、酣 …… 一一三
(たすく) 助、輔、弼、扶、翼、佐、佑、
祐、援、贊、裨、資 …… 一一三
(ただ) 唯、惟、止、但、徒、雷、只、

第 …… 一一四

(たたかふ) 戰、鬪、格 …… 一一五

(たたく) 叩、敲 …… 一一五

(ただす) 正、規、繩、糾、匡、格、質、
董、訂 …… 一一五

(たちまち) 忽、乍、倏 …… 一一六

(たつ) 起、立、建、豎、植、樹 …… 一一六

(たつ) 斷、絕、截、裁 …… 一一七

(たづぬ) 尋、訪、討、原 …… 一一七

(たて) 豎、縱 …… 一一七

(たとひ) 縱、縱令、假令、假使 …… 一一八

(たとへ) 譬、喻、例 …… 一一八

(たに) 谷、谿、溪、澗、壑 …… 一一八

(たのしむ) 樂、娛、嬉 …… 一二八
 (たのむ) 頼、負、憑、怙、恃 …… 一二九
 (たふ) 堪、耐、任、勝 …… 一二九
 (たふとぶ) 貴、尊、上、尙 …… 一二〇
 (たふる) 仆、倒、顛、僵、踣、斃、瘞 …… 一二〇
 (たま) 珠、玉、璧、球 …… 一二一
 (たまたま) 適、偶、會 …… 一二一
 (たまふ) 賜、錫、給 …… 一二一
 (たもつ) 保、有 …… 一二一
 (たる) 垂、低、妥 …… 一二二
 (たれ) 誰、孰 …… 一二二

『チ』の部

(ちかし) 近、邇、庶 …… 一二三

(ちかひ) 誓、盟、矢 …… 一二三
 (ちまた) 街、巷、衢 …… 一二三
 (ちり) 塵、埃 …… 一二三

『ツ』の部

(つかさどる) 掌、主、司 …… 一二三
 (つかふ) 仕、事、使 …… 一二三
 (つく) 著、就、付、附、即、粘 …… 一二四
 (つく) 衝、突、撞、擣、搗、春 …… 一二四
 (つぐ) 次、亞 …… 一二五
 (つぐ) 續、繼、嗣、接、襲、尋、紹 …… 一二五
 (つぐ) 告、誥、訊、詔、諭 …… 一二六
 (つくす) 盡、竭、殫、悉、殲、罄 …… 一二六
 (つくる) 作、造、製、爲 …… 一二七

(つち) 土、地、壤 …… 一二七

(つつしむ) 謹、慎、恭、敬、肅 …… 一二七

(つつみ) 堤、防、塘 …… 一二八

(つつむ) 包、裹、韜、蓋 …… 一二八

(つとむ) 務、勤、勉、勗、力、努、孜、

懋 …… 一二八

(つねに) 常、恆、每 …… 一二九

(つひに) 遂、竟、卒、訖、畢、終 …… 一二九

(つひゆ) 潰、糞、弊 …… 一三〇

(つぶさに) 具、備 …… 一三〇

(つまびらか) 詳、審 …… 一三一

(つよし) 強、勁、毅 …… 一三一

(つらなる) 連、聯、羅、列、陳、綿 …… 一三一

(つゑ) 杖、筇、策、鞭 …… 一三二

『ト』の部

(とがむ) 咎、尤 …… 一三二
 (とき) 時、秋、辰 …… 一三三
 (とく) 解、釋 …… 一三三
 (とぐ) 砥、研、磨、浙 …… 一三三
 (ところ) 處、所、攸 …… 一三三
 (とし) 歲、年、稔 …… 一三四
 (とし) 疾、銳、敏、利 …… 一三四
 (とづ) 閉、鎖、杜、絨 …… 一三四
 (ととのふ) 調、整、齊 …… 一三五
 (とどむ) 止、留、駐、停、過、逗 …… 一三五
 (となふ) 唱、徇、稱 …… 一三五

(とふ) 問、詢、訪、訊……………一三六
 (とほる) 通、透、徹、融……………一三六
 (とも) 友、朋……………一三六
 (ともしび) 燈、燭……………一三六
 (ともに) 俱、偕、共……………一三七
 (とらふ) 捕、捉、囚……………一三七
 (とりこ) 俘、虜、擒……………一三七
 (とる) 取、執、秉、操、把、採、撮、
 資……………一三七

『ナ』の部

(ながし) 長、永、脩……………一三八
 (なかだち) 媒、介……………一三八
 (なく) 鳴、啼、泣、哭……………一三八

(なげうつ) 抛、擲……………一三九

(なげく) 嘆、歎、慨……………一三九
 (なし) 無、无、莫、亡、罔、蔑、靡、微……………一三九
 (なす) 爲、作、成、就、做、濟……………一四〇
 (なほ) 猶、尙、由、仍……………一四一
 (なみ) 波、浪、濤、漣、瀾……………一四一
 (なやむ) 惱、悞、艱……………一四一
 (ならふ) 習、效、倣、倣……………一四二
 (ならぶ) 竝、併、駢、比、雙、排……………一四二
 (なる) 馴、狎、慣、褻……………一四二

『ニ』の部

(にぎはす) 賑、贍、賙……………一四三
 (にぐ) 逃、遁、亡、脫、北……………一四三

(にくむ) 惡、憎、疾……………一四三
 (にじ) 虹、霓、蜺……………一四四
 (になふ) 荷、擔……………一四四
 (にはか) 俄、驟、遽、暴、卒……………一四四
 (にらむ) 睨、睚、盼、睽……………一四五
 (にる) 似、肖……………一四五
 (にる) 煎、煮、烹……………一四五

『ヌ』の部

(ぬく) 拔、抽、挺、擢、脫……………一四六
 (ぬすむ) 盜、偷、竊……………一四六
 (ぬる) 塗、槩……………一四七

『ネ』の部

(ねぎらふ) 犒、勞……………一四七

(ねたむ) 妒、妬、嫉、媚……………一四七

『ノ』の部

(ねむる) 眠、睡、寢、寢、寐……………一四七
 (のがる) (にぐ)を見よ……………一四八
 (のこる) 殘、遺、貽、剩……………一四八
 (のぞむ) 望、臨、澄、莅、蒞……………一四八
 (のど) 咽、喉……………一四九
 (ののしる) 罵、詈……………一四九
 (のぶ) 伸、延、舒、展、申、信、暢、
 紆……………一四九

(のぶ) 述、宣、陳、演……………一五〇
 (のぼる) 升、昇、陞、登、上、騰、躋、
 陟……………一五〇

(のむ) 呑、飲、咽、嚙……………一五一
 (のり) 則、法、範……………一五一
 (のる) 乘、騎、駕……………一五二

『ハ』の部

(はか) 慕、墳、塋、冢、塚……………一五二
 (はかる) 計、謀、圖、量、度、權、測、
 揣、忖、商、揆、略、策、籌、
 算、料、校、議、畫、程、銓、
 衡、詢……………一五二
 (はく) 吐、噴、嘔、咯……………一五五
 (はこ) 箱、匣……………一五五
 (はじめ) 始、初、創、首、甫、牒、
 肇……………一五六

(はしる) 走、奔、趨……………一五六
 (はす) 馳、騫、驅、騁、驟……………一五七
 (はた) 旗、旌、旆、幟、纛……………一五七
 (はだ) 肌、膚……………一五八
 (はづ) 恥、羞、慙、慚、愧、忤、辱、忝、
 赧、忸、泥……………一五八
 (はな) 花、華……………一五九
 (はなつ) 放、縱、發……………一五九
 (はなはだ) 甚、酷、太、絕、孔、痛……………一五九
 (はばかり) 憚、難……………一六〇
 (はやし) 早、蚤、夙、疾、速……………一六〇
 (はらふ) 掃、拂、攘、祓……………一六〇
 (はり) 針、鍼、砭……………一六一

『ヒ』の部

(はる) 張、貼、脹、腫……………一六一
 (はるか) 遙、遐、杳、曩……………一六一

『ヒ』の部

(ひきゐる) 率、帥、將……………一六二
 (ひく) 引、牽、挽、輓、曳、延、惹、彈、
 援……………一六二
 (ひくし) 低、卑、矮……………一六三
 (ひげ) 鬚、髭、髯……………一六三
 (ひさぐ) 販、鬻……………一六三
 (ひそかに) 竊、陰、私、潛、密、祕、
 間……………一六三
 (ひたす) 浸、漸、漬、涵、蘸……………一六四
 (ひとし) 齊、均、等……………一六四

『フ』の部

(ひとり) 獨、孤、特……………一六四
 (ひねる) 撚、捻……………一六五
 (ひま) 隙、間、罅……………一六五
 (ひらく) 開、闢、闢、啓、發、拓、披……………一六五
 (ひるがへる) 飄、翻、翻……………一六六
 (ひろし) 廣、博、寬、闊、弘、宏、
 汎……………一六六
 (ひろふ) 拾、掇、撫……………一六七
 (ふ) 歷、經、閱……………一六七
 (ふくむ) 含、銜、哺……………一六七
 (ふくろ) 袋、囊、橐……………一六八
 (ふさ) 房、總……………一六八

(ふさぐ) 塞、杜、壅、窒……………一六八
 (ふす) 臥、伏、俯、偃……………一六八
 (ふせぐ) 防、禦、拒、扞……………一六九
 (ぶた) 豕、豚、彘、豬……………一六九
 (ふたつ) 二、貳、兩、再……………一六九
 (ふね) 舟、船、舶、艇、舫、艦……………一七〇
 (ふむ) 履、踐、蹈、踏、躡、蹂、躪……………一七〇
 (ふるし) 古、故、舊、陳……………一七一
 (ふるふ) 奮、震、振、揮、顛……………一七一

『へ』の部

(へだつ) 隔、間、障、阻……………一七二
 (へる) 減、耗……………一七二

『水』の部

(まかす) 任、信、委……………一七六
 (まがふ) 擬、紛……………一七六
 (まがる) 曲、枉……………一七六
 (まこと) 誠、信、實、真、諒、良、允……………一七七
 (まさ) 正、方、當、將、且、鼎……………一七七
 (まさる) 優、勝、愈、賢……………一七八
 (まじる) 交、雜、參、混、淆、錯……………一七八
 (ます) 増、益、滋……………一七九
 (また) 又、亦、復、也……………一七九
 (まつ) 待、俟、候、遲、須……………一七九
 (まつたし) 全、完……………一八〇
 (まつる) 祭、祀、祠……………一八〇
 (まもる) 守、衛、護……………一八〇

(ほこる) 誇、矜、伐……………一七二
 (ほしいまま) 縱、橫、放、肆、恣、
 擅……………一七三

擅

(ほそし) 細、織……………一七三
 (ほとんど) 殆、幾……………一七四
 (ほとり) 邊、畔、側、瀕……………一七四
 (ほのほ) 炎、焰……………一七四
 (ほぼ) 略、粗……………一七四
 (ほむ) 褒、譽、美、賞、頌……………一七五
 (ほゆ) 吠、吼、咆、哮……………一七五
 (ほり) 堀、濠……………一七五
 (ほろぶ) 滅、亡、喪、泯……………一七五

『マ』の部

(まれ) 稀、希、罕、少……………一八〇
 (まろし) 圓、團、丸……………一八一
 (まをす) 申、白、稟、啓、奏……………一八一

『ミ』の部

(み) 身、躬……………一八二
 (みがく) 磨、研……………一八二
 (みこと) 詔、敕……………一八二
 (みだりに) 妄、濫、漫、猥……………一八二
 (みだる) 亂、擾、紊、紛……………一八三
 (みち) 道、路、途、徑……………一八三
 (みつ) 滿、充、實、盈……………一八三
 (みづから) 自、親、躬……………一八四
 (みな) 皆、咸、僉……………一八四

(みる) 見、視、觀、看、覽、瞻、觀、覩、
賭、相、瞰、覷、
一八四

『ム』の部

(むかふ) 向、迎、邀、對、
一八五
(むくゆ) 報、酬、
一八六
(むさぼる) 貧、婪、
一八六
(むしろ) 蓆、筵、
一八六
(むすぶ) 結、締、掬、
一八六
(むち) 策、鞭、笞、撻、箠、
一八七
(むなし) 空、虛、曠、
一八七
(むら) 村、邑、
一八七

『メ』の部

(め) 目、眼、
一八七

(めぐる) 繞、遶、環、巡、周、旋、運、
回、廻、循、匝、
一八八

『モ』の部

(もつとも) 最、尤、
一八八
(もてあそぶ) 玩、翫、弄、
一八九
(もと) 本、原、元、固、舊、素、故、
一八九
(もとむ) 求、索、干、需、要、徼、邀、
覓、覓、
一九〇
(もとる) 恃、戻、拂、復、很、
一九一
(もの) 者、物、
一九一
(もる) 漏、洩、泄、
一九一

『ヤ』の部

(や) 矢、箭、
一九二

(やく) 燒、焚、燎、灼、煨、
一九二

(やしなふ) 養、鞠、畜、
一九二

(やす) 瘦、瘠、羸、
一九二

(やすし) 安、寧、康、泰、綏、易、
一九三

(やなぎ) 楊、柳、
一九三

(やはらか) 柔、軟、
一九三

(やぶる) 破、敗、壞、傷、敝、弊、
一九四

(やむ) 疾、病、痼、痼、疾、
一九四

(やむ) 止、已、罷、歇、息、輟、休、
一九五

(やや) 稍、較、差、良、寢、動、
一九六

『ユ』の部

(ゆく) 行、往、逝、征、徂、之、如、
適、
一九六

(ゆたか) 豐、饒、裕、寬、優、胖、
一九七

(ゆづる) 讓、遜、禪、
一九八

(ゆるし) 緩、寬、
一九八

(ゆるす) 許、赦、釋、宥、恕、允、免、
聽、縱、容、
一九八

(よく) 能、克、善、
一九九

(よし) 善、良、好、美、佳、嘉、淑、
吉、
二〇〇

(よそほふ) 粧、妝、裝、
二〇〇

(より) 自、從、由、於、
二〇一

(よる) 因、由、依、據、賴、仍、憑、凭、
倚、寄、緣、
二〇一

(よろこぶ) 喜、悅、說、歡、懽、欣、怡、懽、慶……………二〇二

『ワ』の部

(わ) 環、輪……………二〇三
(わかし) 少、弱、壯、若、夭、嫩……………二〇三
(わかつ) 分、別、判、頌、班、訣……………二〇四
(わく) 涌、湧、沸……………二〇五
(わざはひ) 禍、災、殃、厄……………二〇五
(わする) 忘、遺……………二〇五
(わたる) 渡、涉、濟、互、瀾、竟、徑……………二〇五
(わづか) 僅、纔、才、財、裁……………二〇六
(わらふ) 笑、嗤、哂……………二〇六
(われ) 我、吾、余、予……………二〇七

類字便覽

(二四)

(あ) 藹、埃、握、壓、暗……………二〇八
(い) 易、移、貽、倚、意、遺、威、惟、偉、委、溢、陰、隱、印、因……………二〇八
(う) 于、云……………二〇九
(え) 榮、穎、釋、液、煙、延、垣……………二〇九
(お) 鳴、歐、億……………二一〇
(か) 何、苛、伽、暇、果、科、瓜、貨、戈、戒、偕、概、崖、晦、懷、潰、快、格、赫、確、客、閣、滑、活、桿、感、幹、勘、刊、汗、緘、灌、管、款、環、換、歡……………二一〇

(き) 己、幾、季、記、祇、疑、宜、技、祈、基、揮、休、朽、汲、笈、詰、據、虛、舉、据、狂、響、協、供、挾、曉、胸、疆、囚、競、矯、菌、勤、欣、斤、錦、袞……………二二二

(く) 苦、句、具、偶、屈、掘、郡……………二二四

(け) 挂、經、揭、警、卿、擊、檄、藥、傑、血、堅、建、券、儉、嚴……………二二五

(こ) 狐、湖、袴、互、午、護、攻、苟、候、抗、衡、構、興、狎、硬、稿、盲、遑、獄、穀、忽、懇、昆……………二二六

(さ) 差、瑣、坐、采、栽、催、齊、濟、債、作、柵、斬、讒……………二二七

(し) 史、子、矢、仕、使、斯、姿、刺、紫、師、嗤、施、治、侍、識、軸、漆、炙、借、瀉、若、酒、須、儒、拾、修、集、衆、州、什、從、縱、淑、暑、緒、徐、商、招、梢、宵、涉、鐘、橋、詳、蕭、礁、攝、城、贖、潤、俊、循、侵……………二二八

(す) 推、彗、遂、衰、嵩……………二二九

(せ) 性、清、制、穿、脊、積、籍、隻、折、切、選、繕、冉、潛、專、宣、錢……………二三一

(そ) 祖、蘇、聰、操、爽、壯、側、俗、損……………二三二

(た) 檜、朶、第、代、苔、戴、泰、態、堆、澤、濁、擔、探、旦、但、段、端、彈……………二三三

暖、壇……………二二三

(ち) 知、稚、竺、注、著、儲、帳、凋、佻、
釣、超、徵、頂、飭、珍、陳……………二三四

(つ) 墜……………二三五

(て) 低、堤、緝、狄、荻、敵、擢、哲、椽、
傳、點、顛……………二三五

(と) 怒、藤、刀、到、膽、滔、桃、悼、董、
讀、吞……………二二六

(ね) 燃……………二二七

(の) 腦、納、濃、囊……………二二七

(は) 派、俳、輩、廢、倍、敗、棧、伯、薄、
飯、般、盤……………二二七

(ひ) 彼、婢、批、緋、靡、弼、評、標、苗、

描、秒、貧……………二三八

(ふ) 普、福、復、佛、粉、噴、蚊、奮……………二二九

(へ) 弊、陛、閉、袂、辟、偏、辨……………二二九

(ほ) 捕、母、慕、胞、傲、豐、峰、崩、忘、
防、傍、牧、僕、沒、奔……………二三〇

(ま) 麻、磨、埋、末、抹、漫……………二三一

(み) 味、密、妙、眠……………二三一

(め) 明、鳴、滅、免……………二三一

(も) 模、盲、孟、網、紋……………二三一

(や) 厄……………二三一

(ゆ) 諭、與、遊……………二三一

(よ) 與、伴、揚、俑、容、搖、幼、拗、杳、
抑……………二三一

(ら) 雷、洛、辣、藍、濫、闌、辮……………二二三

(り) 罹、離、陸、掠、溜、流、笠、慮、輻、
涼、梁、凌、料、僚、寥、獵、倫、
隣……………二三四

(れ) 豊、例、隸、礫、歷、練、連……………二三五

(ろ) 盧、濾、耶、浪、老、樓、祿……………二三五

(わ) 椀、彎……………二三六

國語假名遣便覽

一 いゐひの區別……………二三七

二 うふの區別……………二三八

三 ゑえへの區別……………二三九

四 をおほふの區別……………二四〇

五 わはの區別……………二四二

六 ぢじの區別……………二四三

七 すづの區別……………二四四

字音假名遣便覽

イと發音するもの……………二四六

エと發音するもの……………二四六

オと發音するもの……………二四六

オーと發音するもの……………二四七

カと發音するもの……………二四七

ガと發音するもの……………二四八

キユーと發音するもの……………二四八

ギユーと發音するもの……………二四八

キョーと發音するもの……………二四八
 ギョーと發音するもの……………二四九
 コーと發音するもの……………二四九
 ゴーと發音するもの……………二四九
 ジと發音するもの……………二五〇
 シューと發音するもの……………二五一
 ジューと發音するもの……………二五一
 ショーと發音するもの……………二五一
 ジョーと發音するもの……………二五一
 ズと發音するもの……………二五二
 リーと發音するもの……………二五二
 ゴーと發音するもの……………二五二
 チューと發音するもの……………二五三

チョーと發音するもの……………二五二
 トーと發音するもの……………二五二
 ドーと發音するもの……………二五三
 ニューと發音するもの……………二五四
 ニョーと發音するもの……………二五四
 ノーと發音するもの……………二五四
 ヒョーと發音するもの……………二五四
 ビョーと發音するもの……………二五四
 ホーと發音するもの……………二五五
 ポーと發音するもの……………二五五
 ミョーと發音するもの……………二五五
 モーと發音するもの……………二五五
 ユーと發音するもの……………二五六

送假名便覽

ョーと發音するもの……………二五六
 リューと發音するもの……………二五六
 リョーと發音するもの……………二五六
 ローと發音するもの……………二五七

(ア)……………二五八 (イ)……………二五九
 (ウ)……………二六〇 (オ)……………二六一
 (カ)……………二六二 (キ)……………二六三
 (ク)……………二六三 (コ)……………二六四
 (サ)……………二六五 (シ)……………二六五
 (ス)……………二六六 (セ)……………二六六
 (ソ)……………二六六 (タ)……………二六七

(チ)……………二六八 (ツ)……………二六八
 (テ)……………二六九 (ト)……………二六九
 (ナ)……………二六九 (ニ)……………二七〇
 (ヌ)……………二七〇 (ネ)……………二七一
 (ノ)……………二七一 (ハ)……………二七一
 (ヒ)……………二七二 (フ)……………二七三
 (ヘ)……………二七三 (ホ)……………二七三
 (マ)……………二七三 (ミ)……………二七四
 (ム)……………二七四 (メ)……………二七四
 (モ)……………二七五 (ヤ)……………二七五
 (ユ)……………二七六 (ヨ)……………二七六
 (ワ)……………二七七 (ヰ)……………二七七
 (ヱ)……………二七七 (ヲ)……………二七七

國字便覽

四畫……………二七八五畫……………二七八
 六畫……………二七八七畫……………二七八
 八畫……………二七八九畫……………二七九
 十畫……………二七九十一畫……………二七九
 十二畫……………二八〇十三畫……………二八〇
 十四畫……………二八一十五畫……………二八一
 十六畫……………二八二十七畫……………二八二
 十八畫……………二八二十九畫……………二八三
 廿畫……………二八三廿一畫……………二八三
 廿二畫……………二八三廿三畫……………二八四
 廿四畫……………二八四廿六畫……………二八四

廿六畫……………二九七

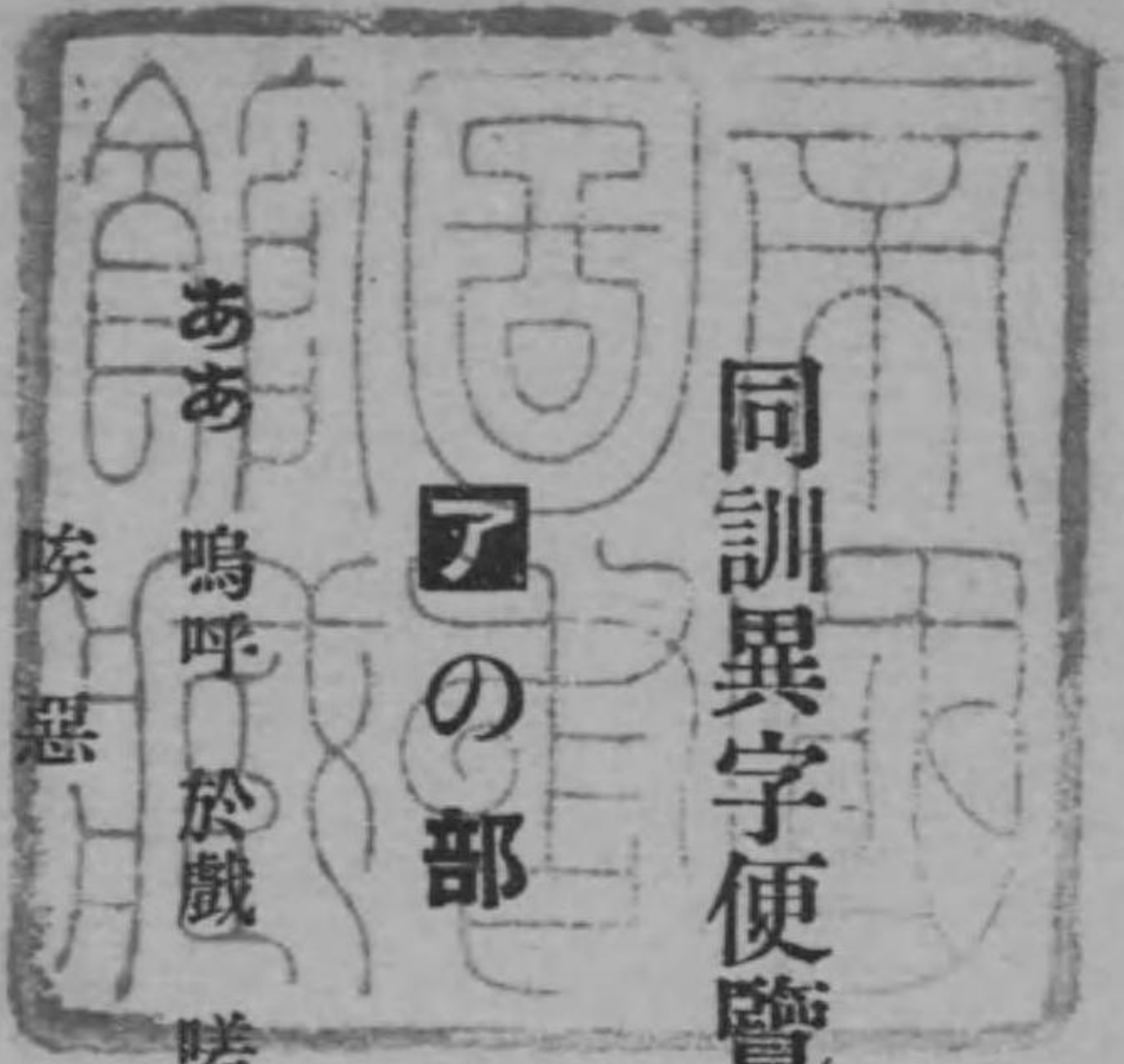
國訓便覽

二畫……………二八五三畫……………二八五
 四畫……………二八五五畫……………二八五
 六畫……………二八六七畫……………二八六
 八畫……………二八七九畫……………二八八
 十畫……………二八八十一畫……………二八九
 十二畫……………二九〇十三畫……………二九一
 十四畫……………二九二十五畫……………二九三
 十六畫……………二九四十七畫……………二九四
 十八畫……………二九五十九畫……………二九五
 廿畫……………二九六廿一畫……………二九六
 廿二畫……………二九七廿三畫……………二九七

目次終

日用文字便覽

同訓異字便覽



ああ 嗚呼 於戲 嗟 吁 噫 嘻
 唉 惡

【嗚呼】 サテモくといふ意の歎辭で、歎賞・歎美・歎息・哀傷・憤恨、すべてに通じて最も汎く用ひられる。

【於戲】 元來嗚呼と同語であるが、後世に

★アの部

は専ら歎美、莊重な場合にのみ用ひられてゐる。大唐中興頌の序に「於戲前代の帝王、盛徳大業ある者は必ず歌頌に見る。」

【嗟】 咨嗟咏歎の辭で、コレハくといふ意。又嗟呼とも書いて、美賞悲歎ともに用ひる。嗚呼と大差はない。「嗟歎」「嗟賞」

50
 60
 60/3.00
 50

100 70

【吁】 疑怪驚歎の辭で、サリトハといふ意。
 【噫】 哀傷痛恨の辭で、ハツアアと急切に歎するのである。論語に「噫、斗筭の人、何ぞ算ふるに足らんや。」
 【嘻】 腹の底からキイと出る聲で、笑ふ時にも悲む時にも用ひるが、多くは悲痛の場合に用ひる。
 【唉】 恨み罵る時に發する歎辭である。史記に「唉、豎子與に謀るに足らず。」
 【惡】 驚歎に聊か怒氣を含んだ辭である。孟子に「惡、是何の言ぞや。」
 あか 赤 紅 丹 朱 緋 赭 殷
 【赤】 あか色の中で、深淺の中位なもの。

【紅】 桃花色。べに色。「紅顔」
 【丹】 丹砂の色。大赤。赤よりも濃い。まごころを「丹心」といふ、非常に赤い顔を詩經に「顔、渥丹の如し。」
 【朱】 赤と略同義である。
 【緋】 燃え立つやうに花々しい赤色、深紅色である。
 【赭】 赤黒色、即ちベニガラ色である。
 【殷】 血が、物に染みて赤黒くなつた色。此の場合、音はアンである。
 あがなふ 購 贖
 【購】 金錢を出して、探し求めること、唯買ふとは、稍異なるが、普通は同義に用ひ

てゐる。「購求」「購買」
 【贖】 物事の代りを立てること。専ら金錢を出して、罪を消すことに用ひる。「贖罪」
 あきらか 明 昭 灼 熙
 【明】 すべて闇いことの反對で、意義廣く、従つて、最も汎く用ひられる。「明鏡」
 「明月」「明德」「著明」「公明」
 【昭】 明よりは意義狭く、多くは道德上に用ひる。「神明昭々」
 【灼】 火の燃え立つやうに明かなること。「光明赫灼」
 【熙】 光明・和樂・廣大等の意味が有つて、多くは政事道德の上に用ひる。音キ。

あく 飽 厭 饜 飫
 【飽】 十分満足する事であつて、いやになる程ではない場合をいふ。「德に飽く」
 「仁義に飽く。」論語に「君子は、食飽くを求むることなく、居安きを求むることなし」
 【厭】 いやになる程あき足る事。孟子に「酒を樂みて厭くことなき、之を亡といふ。」
 【饜】 厭と音義同じ。孟子に「酒肉に饜いて、而して後に反る。」
 【飫】 馳走が過ぎて飽き満つる意。詩經に「飲酒にこれ飫く。」音ヨ。
 あぐ 擧 揚 扛 昂 稱 颺

【擧】措の反對である。措は下に置く、又用ひずに置くの意であるから、擧は下に在るものを上にあげる。又あげて取り行ふの意もある。「人を擧ぐ」「才を擧ぐ」「美學」「盛擧」中庸に「其の人存すれば、則ち其の政擧る。」

【揚】高く飛びあがる意。擧よりも狭いが、勢の有る字である。又抑(おさへる)の反對で、引き上げる意もある。「旗を揚ぐ」「紙鳶を揚ぐ」詩經に「我が武維れ揚る。」【扛】重い物を、力を入れて擔ぎあげること。「鼎を扛ぐ。」音カウ。

【昂】氣の引き立つこと。「意氣昂然」又ある。

「瞞著」

【謾】音義共に瞞と同じ。

【詒】だます事。史記に「田文詒いて曰く、左せよと。乃ち大澤中に陥る。」音ヤ。

【誕】大言を吐いて、人をだます事。「虚誕」

【誑】たぶらかすこと。「誑惑」

あし 惡 凶 醜 慝

【惡】善の反對。又「美惡」とも用ひて、醜いとの意もある。

【凶】吉の反對で、忌はしい事。

【醜】好美の反對で、形貌の見るに好まぬ事。淑の反對で、心の悪い事。心に匿す

ふむくこと。「昂鼻」は獅子鼻のことである。

【稱】言葉で褒めあげる事。禮記に「君子は、人の善を稱ぐ。」

【颺】風に乗じてあがる事。音義ともに揚に同じ。歸去來辭に「舟は、搖々として、以て軽く颺る。」音ヤウ。

あざむく 欺 瞞 謾 詒 誕 誑

【欺】侮つてだます事。論語に「君子は欺くべし、罔ふべからず。」又其の物を凌駕する意。「容貌花を欺く」「勇猛鬼神を欺く。」

【瞞】バツとした事を言うて、だます事。

といふ意の字である。「姦慝」「邪慝」

あした 旦 晨 朝

【旦】夜明のこと。太陽が、地平線に出る様を象つた字である。

【晨】太陽が動き出すことで、旦より早い。

【朝】暮に對する字で、旦より遅い。

あた 仇 讎 寇

【仇】アダカタキで、其の人を指す。「仇敵」

【讎】言語和同せざる所から、相怨んで、腹いせをすること。普通には、仇讎同義に用ひてゐる。「復讎」

【寇】外から押し寄せて來る敵。「外寇」

あたかも 宛 恰

【宛】 サナガラ、マルデの意。事物の非常に似てゐるのを譬へていふ。「落葉宛も雨の如し。」

【恰】 シツクリと物の合ふこと。丁度、適當の意。「恰好」「恰當」

あたたかし 暖 温 暄 煖 煦

【暖】 又煖とも書く。氣候の暑からず、寒からず、程よい温度をいふ。「春暖」「暖風」

【温】 スルマ湯の事で、熱度の高低が、程よいのをいふ。暖よりも用方が廣い。「温泉」「温顔」「温順」

【直】 相當すること。史記に「百金幣を爲し、三千に直る。」

【方】 マサニとも訓み、方今と熟する。丁度其の時にの意。「其の、燕を破るに方つてや、精兵百萬。」

【丁】 丁度そこへ行きあたること。専ら父母の喪にあたるに用ひる。「父の憂に丁り、官を去る。」

【抵】 抵當と熟する字で、當と同義。「罪に抵る。」

あづかる 預 與 干 關

★アの部

【暄】 日のあたゝたかなこと。音ケン。

【煖】 暖と略同じ。又むしあつきこと。「鬱煖」

【煦】 日光であたゝかになること。又あたためること。音ク。

あたる 中 當 直 方 丁 抵

【中】 矢が、的の中心にあたる如く、目的とする物に、正しくあたること。「的中」

【命】 「百發百中」又「毒に中てらる」「暑氣に中てらる」などは、矢が、的を深く射抜く所から來てゐる。

【當】 正面に在つて、少しもゆがまぬこと。ベツタリとあたりあふこと。「南山、戸に」

【預】 わが身も、其の事に立ちまじつて、關係すること。「參預」左傳に「婦人をして、國事に預らしむること母れ。」

【與】 音義ともに預と同じ。論語に「吾、祭に與らざれば、祭らざるが如し。」

【干】 ラカス又はモトムとも訓む字で、我からさし出て其の事にかゝり合ふこと。「干涉」

【關】 その事に心をかけてたづさはること。「關與」

あつし 暑 熱

【暑】 時候のあついこと。

【熱】 熱度の高いことで、有形無形に通じ

て用ひる。「暑熱」「熱心」「熱中」

あつし 厚 篤 敦 惇 渥 腆

【厚】 薄の反対で、有形無形に通じて、廣く用ひる。「地厚」「禮厚」「情厚」

【篤】 心を用ひることが、確で固いこと。

専ら品行道徳上に用ひる。「篤學」「篤行」

【敦】 篤と略同義で、徳行上に用ひる。孟子に「柳下惠の風を聞く者は、鄙夫も寛に、儒夫も敦し。」

【惇】 敦と同義。あつく務めること。

【渥】 うるほひの洽きこと。漢書に「雄、數 渥恩を蒙る。」

【腆】 菲(うすし)の反対で、進物などの念

といふ。

音義相通する。書物を作ることを「編輯」といふ。

【輦】 車の矢が、轂に集る如く、諸方から一所に寄つてくること。湊に作るも同じ。「車馬輦輦」

【萃】 聚と略同義。「楚師方に壯なり。若し我れに萃らば、吾が師必ず盡きん。」

【鍾】 聚と同義であるが、多くは、無形の物に就いていふ。「天地正大の氣、粹然として神州に鍾まる。」「天美を此に鍾む。」

【攢】 聚と同義であるが、多くは細長き物のあつまるに用ひる。「群峰攢る。」「鋒を攢む。」音サン。

の入つて善いこと。自分の進物を謙遜して「不腆」といふ。

あつむ 集 聚 纂 輯 輦 萃

鍾 攢 叢 醜

【集】 衆鳥が木にとまる意味から出來た字で、散らばつてゐるものを、一つ處に寄せる義である。史記に「小都郷邑を集めて縣となす。」

【聚】 散又は分の反対で、一つ處に寄り合ふ義「五星、東井に聚る。」「十年生聚す。」

【纂】 もと糸を組むことである。それから詩文などを綴り聚めるに用ひる。

【輯】 一まとめに寄せ集めることで、集と

【叢】 クサムラと訓む字であつて、轉じて聚の義に用ひる。順序もなく、不規則に聚まる意を含む。

【醜】 大勢で、出し合ふこと。「醜金」

あと 跡 迹 蹟 踪 蹤 趾 墟 轍 軌 痕 後

【跡】 足の踏んだ所に残るあと。「足跡」

【踪】 心欣然として、巨人の跡を踐む。」

【迹】 跡と同字。

【蹟】 跡と同義。

【踪】 行き過ぎたあとで、跡よりも其の意がバツとしてゐる。行方のわからぬことを「失踪」といふ。

【蹤】 踪と同義。古人のやつた通りにすること。「先蹤を追ふ。」といふ。

【址】 事物の過ぎて後に残るしるし。「宮址」「城址」

【墟】 址と同義。「廢墟」

【轍】 車輪の通つたあと。

【軌】 もと車輪と車輪との間の長さをいつたものであるが、今は轍と同義に用ひてゐる。

【痕】 何物によらず、あとがついて、後に残ること。「涙痕」「墨痕」

【後】 事物の過ぎ去つたあと。専ら時間の上にいふ。

あな 穴 孔 坎 坑 竅

【穴】 底のあるあな。書經に「鳥獸穴を同じうす。」

【孔】 底なしに行き抜けたあな。「鼻孔」

【坎】 土地のくぼんだ處。音カン。

【坑】 穴の大なるもの。

【竅】 氣の出入する穴。「孔竅」「九竅」

あなごる 侮 慢 易

【侮】 心の中で、人を輕視すること。孝經に「國を治むる者は、敢て鰥寡を侮らす。」

【慢】 言語動作に現はして、人をあなごる

こと。又しだらなきこと。「暴慢」

【易】 禮儀をヌキにして、人を遇すること。

あはく 發 訐

【發】 上に在る物を取り去つて、下に在る物をむきだしにすること。「惡左府の墓を發く。」

【訐】 他人の祕密をあばき出して、之を公にすること。多く悪い方に用ひる。「訐いて以て直と爲す者を惡む。」音カン。

あはれむ 憐 憫 哀 矜 恤

【憐】 いとしい・かはゆい・羨しい・かはいさうなど、色々の意味がある。「尾を動かして憐みを乞ふは、我が志に非ざるなり。」「花月を憐む。」

【憫】 不便に思ふこと。又慇懃とも書く。

★アの部

【哀】 樂の反對で、かなしく思ふこと。轉じて不便に思ふこと。憫よりも意強し。

【矜】 哀矜と熟して、かなしみいたむこと。憫と同義なれども、あはれむの意深し。

【恤】 目をかけることで、目下の者をあはれに思ふこと。「我が後を恤むに違あらんや。」音ジュツ。

あふ 遇 逢 遭 值 會 合 晤

【遇】 偶と通する字で、偶然期せずして出合ふこと。「千載の一遇。」

【逢】 出合ふことが分つてゐてあふこと。

兩方から出會ふこと。「逢迎」史記に「力田は、年に逢ふに如かず。」

【遭】 めぐりあふ義。多くは、悪い事の方
に用ひる。「火災に遭ふ」「遭難」「君子
亂世に遭ふ。」

【値】 丁度その時節に當るの意。「正に中
秋に値ふ。」音チ。

【會】 集りあふこと。「會集」

【合】 離れた物が一つになること。割符を
合せたやうに、ピッタリとあふこと。詩
經に「妻子好合ひ、琴瑟を鼓するが如
し。」

【晤】 人と人と相見ること。「面晤」

あぶら 脂膏油

【脂】 固まつたあぶら、主として動物性の

【焙】 焙烘と同義。「焙茶」は、茶をほうす
ること。

あへて 敢肯

【敢】 押し切つてすること。遠慮などせず
にすること。「敢爲」「公事畢り、然る後
に敢て私事を治む。」又憚りながらの意。
「敢て天地の神に告ぐ。」

【肯】 がへんすと訓みて、得心し、受けが
ふこと。「肯て河を渉らず」は、河を渉る
ことを得心せぬの意である。

あまねし 周 普 徧 遍 洽 浹

【周】 残す所なく行き届くこと。易に「智
は萬物に周くして、道は天下を濟ふ。」

ものをいふが、又松やにの如きをもいふ。

【膏】 脂の釋けたもの。

【油】 主として植物性のものをいふが、動
物性でも、藥用食用等に供するものは、
「鯨油」「肝油」などいふ。又鐵物性では
「石油」

あぶる 炙 炮 烘焙

【炙】 火にかけて、肉をあぶること。又そ
の肉をいふ。

【炮】 まるやきにすること。包み焼にする
こと。音ハウ。

【烘】 火にかけてあぶること。又暖め、乾
かすこと。音キヨウ。

【普】 一面總體にかゝること。周は一つ一
つ行きわたるので、普は大きく、廣く行
きわたるのである。「普天の下、王土に非
ざるは莫し。」

【徧】 周と略同義だが、やゝ軽い。一通り
行きわたること。史記に「戸を閉ぢて出
でず、其の書を出して、徧く之を觀る。」

【遍】 徧の俗字である。

【洽】 潤ひのあまねく、しみわたる義。「生
を好むの徳、民心に洽し。」

【浹】 洽と同義。音ケフ。

あまる 餘 剩 贏 衍 羨

【餘】 充滿して、其の上にあまること。老

子に「有餘を損して、不足を補ふは、天の道なり。」

【剩】 定額よりも餘分なること。「剩貨」

「剩員」又あまつさへと訓んで、「其の上」の義。

【贏】 商業上の利益をいふ。「贏利」

【衍】 もと水の溢れることで、多くて限界外に出ること、文中不用の文字を「衍文」といひ、意義を説き廣めることを「衍義」といふ。

【羨】 衍と同じ。

あや 文 斐 綯

【文】 もと錯へ畫くことで、種々の形象や、

ば、即ち悔寡し。」

あやまる 過 愆 誤 謬 錯 訛

【過】 悪い心がなく、不注意で悪事をする

こと。論語に「過つては改むるに憚ること勿れ。」

【愆】 心得違ひである。「罪愆」とも熟して

過よりは重い。

【誤】 思ひ違ひ、仕損ひである。「誤字」

「誤寫」

【謬】 又繆とも書いて、もと織物の絲筋の

違つたことをいふ。あやまつた議論を

「謬論」といひ、字畫正しからぬ字を「謬字」といふ。

★アの部

模様をいふ。質に對していふ時は、有形

無形に通じて、かざり有るをいふ。史記

に「周勃重厚にして文少し。」

【斐】 うつくしきあや。

【綯】 色よきあや・きらびやかなこと。「綯爛」

あやふし 危 殆

【危】 高峻の意味で、高いものは、崩れさうで、あぶないからいふ。是を重ねて坐するを「危坐」といふも、それである。

【殆】 「ほとんど」「ちかし」とも訓む字で、あぶない所に違つてゐる意。論語に「多く見て殆きを闕き、愼んで其餘を行へ

【錯】 もと「やすり」の類で、その齒が入り違つてゐる所から、轉用したもので、彼と此と入れ違つてゐること。「錯雜」「錯亂」

【訛】 正しいものが、いつの間にか、知らず／＼「なまる」こと。「訛音」「訛字」

あらし 荒 粗 暴

【荒】 捨て置いて耕さぬ田のあれること。轉じて事物の荒廢するをいふ。「荒廢」は田が荒れて穀物の取れぬ年。「荒肆」は行を修めず、身を持ちくづすこと。

【粗】 精及び密の反對で、くはしからず、こまやかならず、あらくしきこと。

【暴】 つよく、あらくしきこと。「暴風」「暴行」

あらたむ 改革 俊更

【改】 物ごとを仕直すこと、下地を除いて新にすること。「過つては改むるに憚ること勿れ。」

【革】 根本から、さらりとあらためること。「革命」「革新」

【俊】 悪をあらため、過をあらためること、心の上にいふ。音シユン。

【更】 改と略同義。「更衣」「更代」
あらはる(あらはす) 見現 著

顯彰 露表 旌形

こと。「露出」「露營」

【表】 上がはにあらはすこと。世説に「謝の寛容、轉た貌に表る。」「表面」

【旌】 「はた」と訓む字で、もと「はた」を立てて、その功德を人に知らせる意から轉じたものである。「善行を旌表す。」

【形】 隠れたものが出現して、形の上に見えること。「中に誠あれば、外に形る。」

あり 有 在

【有】 無の反對である。「机上に書有り。」「天に星有り。地に花有り。」

【在】 常に「に在り」と訓んで、書物のあり場所に就いていふ。「書は机上に在り」

★イの部

【見】 隠れた物の見えること。いま目の前にあらはれてゐること。「見員」は現在の人員、「見王」は現在の王をいふ。

【現】 見と音義ともに同じ。

【著】 明白に見える義で、「著明」と連用する。事理を明白にするから、書を作ることを著といふ。

【顯】 著と似てゐるが、その上に光るといふ意を含んでゐる。それで高位高官の人を「貴顯」「榮顯」などといふ。

【彰】 あやもやうが有つて、明にあらはれること。書經に「嘉言孔だ彰る。」「彰明」

【露】 被ひを取り去つて、ムキダシにする

「在天の靈。」

1の部

いかる 怒 忿 愠 恚 憤 曠

【怒】 喜の反對で、立腹の外に表れること。「怒髮冠を衝く。」「怒氣面に滿つ。」

【忿】 心中の立腹甚だしきこと。一時にカツと怒ること。「一朝の忿りに其の身を忘る。」「音フン。」

【愠】 心中、怒りを含んで、ムツとすること。怒よりは軽く、外部に表れぬもの。論語に「人知らずして愠らず。」「音ウン。」

【恚】 恨み怒ること、恨みの情が強い。

【憤】内に鬱積して發する怒り。論語に「憤りを發して食を忘れ、楽しんで以て憂を忘る。」

【瞋】怒氣が盛んで、目元に見えること。

「瞋恚」

いく 生活

【生】死の反對、動く動かざるとを問はず、生命のある間が生きてゐるのである。

【活】活動の意で、勢よく、生きて動いてゐること。

いこふ 息 憩 休

【息】安息と熟する字で、氣安くやすむこと。働いた者が勞れをやすめるのは、息

【功】思ひ通りに出來上つた事で、即ち「てがら」である。「軍功」「成功」「功成り、名遂げて、身退く。」

【勳】名譽ある功である。その功が、世人から欣賞尊重されるもの。

【績】善惡に關らず、その成した結果。「三載績を考ふ。」は、三年間、その成した結果を考査すること。「成績」「功績」

いそがし 忙 鬧 忽 宥

【忙】閑の反對で、用事が多くて、隙のないこと。「多忙」「忙殺」「忙裡閑を偷む。」

【鬧】市中の人の込み合つて賑かな所から出來た字で、多用の意味は無い。音トウ。

である。

【憩】小休みすること。遠路を行く人が、途中で一寸休むのは憩である。

【休】仕事が止むことで、日々の課業を一日やすむのは休である。

いさぎよし 潔 屑

【潔】穢の反對で、有形にも、無形にも用ひ、キレイなことである。「潔白」「清潔」

【屑】潔とは全く意味が違つて、これは氣が進むといふことである。「取ることを屑しとせず」とは、取ることに氣が進まない、いやだの意。

いさを 功 勳 績

【忽】せはしく、落ちつかない義。

【宥】繁雜なること。「宥々」

いたく 抱 懷 擁

【抱】手でかゝへること。最も汎く用ひる。「子を抱く。」「不世出の材を抱く。」

【懷】「ふところ」に入れること。又心の中に持つこと。「壁を懷く。」「愁を懷く。」

【擁】物のまはりに、兩手を引きまはすこととで、抱へ持つ意はない。「擁立」「擁護」

いたむ 悼 痛 傷 疼 感

【悼】人の死をかなしむことで、いたみあはれむ意である。「哀悼」「悼惜」

【痛】身に「いたみ」を感ずることとで、轉

じては、何事にも切に感ずることをい

ふ。「痛恨」「痛快」「痛惜」

【傷】「やぶる」といふ字で、心身をいため

やぶる程悲しむことに用ひる。「哀傷」

「傷心」

【疼】肉體が痛みうづくこと。「疼痛」

【戚】喜の反對で、いたみ悲しむこと。「哀

戚の情」

いたたく 戴頂

【戴】上部に物をのせること。「白髪を戴

く。「星を戴いて往く。」

【頂】「いただき」で、頭の上を指す。

「山頂」

いたす 致輸

【致】方先に届ける義、「書を致す。」又返

し置く義。「仕へを致す」は、我が職分

を君に返すこと。又任せ置く義。「命を

致す」は、身命を君に任せること。又招

き寄せる義。「天下の民を致す。」

【輸】舟車で運ぶ意味である。「輸送」「輸

出入」

いたる 至到 詣造 格抵

戻傳

【至】こちらから、あちらに行きつくこと。

「朝より夕に至る。」又至極の義があつて、

「至孝」といへば、此の上もない孝行、「至

難」といへば、此の上もない困難である。

【到】此處より彼處にいたり、彼處より此

處にいたりつくこと。至と同義だが、至

極の意はない。「人間到る處青山あり。」

【詣】此處より彼處に至ること、謹みの

意義が含んでゐる。「公府に詣る。」「孔子

廟に詣る。」

【造】彼處より此處に至る。「四方の賓客

造る。」又詣と熟して「造詣」といひ、學

問に深く進むことをいふ。

【格】略至と同義。今は専ら精神上に用ひ

る。「神格る。」

【抵】至と同義。

★イの部

いたす 致輸

【致】方先に届ける義、「書を致す。」又返

し置く義。「仕へを致す」は、我が職分

を君に返すこと。又任せ置く義。「命を

致す」は、身命を君に任せること。又招

き寄せる義。「天下の民を致す。」

【輸】舟車で運ぶ意味である。「輸送」「輸

出入」

いたる 至到 詣造 格抵

戻傳

【至】こちらから、あちらに行きつくこと。

「朝より夕に至る。」又至極の義があつて、

「至孝」といへば、此の上もない孝行、「至

【戻】自然に至り止まる義。詩經に「鳶飛

んで天に戻る。」

【傳】「つく」といふ字で、極端まで至り

つくこと。「西、海に傳る」は、海の端ま

でのこと。

いと 糸 絲

【糸】蠶の口から出る一本の糸を忽とい

ひ、それを五本合せたものが糸である。

糸よりは細い。

【絲】十忽を絲といふので、糸よりは太い。

いとま 暇 遑

【暇】爲す仕事が無いことである。「休暇」

「間暇」

【違】 一事を爲してゐて、又他の事まで手が届くことである。詩經に「我が躬すら閑れられず、我が後を恤ふるに違あらんや。」音クワウ。

いづくんぞ 焉 安 惡 烏

【焉】 反語であつて、「しかく」の道理が有らうや、無い」との意。「焉んぞ佞を用ひん。」「子、父を戮す、君焉んぞ之を用ひん。」

【安】 「どうして」とがめる意。「安んぞ方六七十、如しくは五六十里にして、邦に非ざる者を見ん。」

【惡】 進んでとがめる意。「惡んぞ其の民

の父母たるに在らん。」

【烏】 惡と音義同じ。

いつはる 偽 詐 佯 陽 譎 詭

【偽】 眞の反對で、天真でないことを、こしらへいつはること。人爲の二字から出來た字である。「虚偽」「偽善」「偽君子」

【詐】 詐欺と連用して、欺きたますこと。誠實の反對である。「詐稱」「巧詐は拙誠に如かず。」

【佯】 内實はさうでもないのに、表面だけでいつはること。眞似て、他のものムフリをすること。狂人の眞似することを「佯狂」といふ。

【陽】 佯と同義、外面だけでいつはること。

【譎】 不正な謀でいつはること。論語に「晉の文公、譎にして正ならず。」

【詭】 譎と略同義で、正しくないことであるが、特に言語状態の上に「てだて」の多いことをいふ。「詭辯」「兵は詭道なり。」

いぬ 犬 狗 尨

【犬】 廣く用ひる字である。又成長した犬。「野犬」「蓄犬」「猛犬」

【狗】 ちひさい犬。いぬころ。又一般の犬をいふ。「狗子」「狗盜」

【尨】 むく犬。多は毛長き象。音バウ。

いのる 祈 禱 禳

【祈】 其の時に臨んで、一時さし當つて祈るのである。「雨を祈る」「祈願」

【禱】 常々いつてゐるのである。論語に「丘の禱るや久し。」

【禳】 祈つて、惡事災難を祓ふこと。左傳に「水旱疾疫有れば之を禳る。」

いはふ 祝 賀

【祝】 行末善くあるやうにと祈るのである。「前途を祝す」は、前途多幸なるやうに、祈る意味である。今は廣く慶賀の意にも用ひてゐる。

【賀】 よろこびを申し入れることで、即ち慶賀することである。「新年を賀す。」

いはんや 況 矧

【況】 滋(ますく)益(ますく)の意味の字で、「まして」と譯してゐる。最も普通に通に用ひられる。

【矧】 況と同義である。韓愈の文に「苟も義を慕び、仁を強むる者、皆愛惜す。矧んや、燕趙の士、その性に出づるものをや。」音イン。

いふ 言 曰 云 謂 道

【言】 人の口から、言語を發すること、心に思ふ所を、口に述べるのである。「言論」「大言」「發言」

【曰】 他人の言つたことを引いて、「某曰

必ず堯舜を稱す。」「唱道」「道破」

いへ 家 宅 舍 屋

【家】 人の住居する建物をいふのだが、轉じては、無形上の家、家柄、家庭等の意にも用ひる。「家の名折れ」「家を興す」等は、皆無形の家である。「三十にして、未だ家を成さず。」とは三十になつても、まだ家庭を作らぬの意である。

【宅】 もと住所の意で、宅地内に在るすべての建物を一括していふ。

【舍】 小屋で、休息する所である。それで、「旅舍」「客舍」などの語もある。

【屋】 もと屋根のことをいふのであるが、

ふ」といふ時に多く用ひる。又事物の名を定めていふ時にも用ひる。「天地の大徳を生と曰ふ。」

【云】 曰と同義であるが、文の終りに置いて、「某氏……と云ふ」の如き場合には、云に限る。

【謂】 人に話しかける時に用ひる。「子、顔淵に謂つて曰く。」「又人の噂をする時に用ひる。「子、子賤を謂ふ。」「又物に名づける時に用ひる。「博愛之を仁と謂ふ。」「天命之を性と謂ふ。」

【道】 言と略同義であるが、少しく、唱へる意を含んでゐる。「孟子性善を道ふ。言

家には必ず屋根があるゆゑ、仕家の義にもなる。「書屋」は書物庫で、「場屋」は試験場である。

いはり 庵 廬

【庵】 草葺の小屋である。又單に小屋の意にも用ひる。「禪庵」は小さな寺のこと。「草庵」

【廬】 もと田の中の假小屋をいふ。すべて粗末な小屋の意に用ひる。「草廬」「蝸廬」

いましむ 戒 誠 警 箴

【戒】 いましむべき目當があつて、その事物に就いて戒めること。論語に「少き時は、血氣未だ定まらず、之を戒むる色に

【誠】

戒と通用するが、必ずしも目當の有無を問はない。たい前もつて用心させるのである。易に「小に懲りて大に誠むるは、これ小人の福なり。」書に「前車の覆るは後車の誠。」

【警】 氣をつけること。目をさますばかり驚かすこと。「夜警」「警告」

【箴】

もと疾を療治する針のことである。人の不善を改めさせ、悪す正をやうに、意見し、諫めることである。「箴言」「箴諫」

いむ 忌諱

ふ。「卑職」「卑下」「幼卑」

【陋】 下等なことである。「形陋し」は風采の下等なこと。「心陋し」は下劣で道理に通じないこと。

【鄙】 都に對する字である。田舎臭く、下品なこと。「野鄙」「鄙夫」

いゆ 癒 愈 瘥 痊

【癒】 だんく直りかゝることである。

【愈】 癒と音義同じ。

【瘥】 少し軽快になることである。

【痊】 サツパリと全快することである。

いよく 愈 彌

【愈】 「よよる」と訓む字であつて、だん

【忌】 畏れ嫌ふことである。いまくしく思つて、排斥することである。「之を忌みて、之を除かんことを謀る。」「禁忌」

【諱】 憚つて避けることである。この字を「いみな」と訓むのも其の意で、君父の名は、臣子たる者が、憚り避けて口にしないからである。

いやし 賤 卑 陋 鄙

【賤】 貴の反對で、身分の低いことである。「貧賤」「賤夫」又價の少いことをいふ。漢書に「糴、甚だ貴ければ民を傷め、甚だ賤しければ農を傷む。」

【卑】 尊の反對で、名譽の低いことをいふ。だんに進みまざる意である。

【彌】 「あまねし」「はびこる」と訓む字であつて、だんく大きく廣がる意である。しかし、多くは愈・彌同義に用ひてゐる。

柳文に「盛徳愈、大にして、謙光益、深し。」漢書に「徳彌、厚き者は、葬彌、薄し。」

いる 入 納 内 容

【入】 「出づる」の反對で、外部から内部にはいることである。論語に「危邦には入らず、亂邦には居らず。」「入京」「入學」「出入」

【納】 「いだす」の反對で、いれること。左

傳に「夏公、齊を伐つて、子糾を齊に納る。小白齊に入る。」「出納」又受け入れること。「納受」

【内】ダフ、ノフと發音して、納と同義である。孟子に「己推して之を溝中に内るが如し。」

【容】器中に物を受け入れ、包み入れること。「衆を容る」は、度量が大きくて、よく衆人を容れること。「相容れず」は、仲のわるいこと。

㊦の部

う 得 獲

【栽】若木をうるること。

【藝】草木の苗をうるること。

うう 餒 饑 饑 飢 餓

【餒】腹がへつて、ひもじくなること。孟子に「妻子凍餒す。」

【饑】凶作で、食物の無いこと。

【饑】饑と同義。「饑饑」

【飢】饑饑と同義。又空腹なこと。「飢渴」

【餓】非常にひだるくなつて、食物を食ふことも出来ないこと。韓非子に「家に常業あれば、飢と雖も餓るす。」「餓死」

うかがふ 伺 視 窺 候

【伺】ひそかに様子を見ること。又問ふの

【得】失の反対で、手に入れること。又「出來る」の意。「得失」「見るを得たり。」「聞くを得ず。」

【獲】禽獸を捕獲することから轉用したもので、主として有形物を首尾よく手に入れることで、得よりも狭いが、意は重い。春秋に「西に狩して、麟を獲たり。」

うう 植 樹 種 栽 藝

【植】草木をうる立てること。「手づから三槐を庭に植う。」

【樹】樹木をうること。孟子に「五畝の宅、之に樹うるに桑を以てす。」

【種】草木の種を蒔くこと。「瓜を種う。」

敬語に用ひる。「伺候」

【視】伺と同義。

【窺】狭い所からのぞいて見ること。「井中天を窺ふ。」

【候】事のなりゆきを待つてゐること。又問ふの敬語。

うがふ 穿 鑿

【穿】突き抜くことで、「穴を穿つ」といへば、見透すやうに穴をあけることである。

【鑿】道具で穴をほることをいふ。

うかぶ 浮 汎 泛

【浮】沈の反対で、廣く用ひる。

【汎】浮と略同義であるが、「たゞよふ」

「ながるる貌」などの意味のある字で、多く船の浮ぶに用ひる。

【泛】汎と同義。音ヘン。

うく 受 享 饗 承 稟

【受】物を受け取ること。「受納」「受授」

【享】尊い物を受ける意。「福を享く」「大名を享け、當世に顯る。」又神靈が供物をうけるといふ場合は、必ず享の字を用ひる。「魂彷彿として來り享けよ。」「祭れば鬼之を享く。」

【饗】音義享に同じ。

【承】下から上の物をうける意。「恩を承く。」「は上の恩をうけ戴くの意で、「恩を

受く。」は唯自分が恩を受けたといふま

でいある。「露を承く。」「教を承く。」

【稟】「天稟」「氣稟」「稟賦」「命を稟く。」などいいつて、皆無形の天命をうける意に用ひる。

うごく 動 搖 撼 蕩 盪

【動】靜の反對で、「うごく」にも「うごかす」にも用ひ、意義甚だ廣い。

【搖】定又は固の反對で、ゆらく動くこと。「ゆるぐ」とも「ゆるがす」とも訓む。歐陽修の文に「若し此の事一たび動かば、則ち天下搖がん。」音エツ。

【撼】これは他動詞で、「ゆるがす」「うご

百里。」

【亡】ほろびなくなること。影も形もなくなつてしまふこと。「死亡」「散亡」「滅亡」史記に「平原君曰く、吾何ぞ敢て事を言はむ。さきに四十萬の衆を外に亡ひ、今又内郡鄆を圍まる。」

うす 臼 確

【臼】手で搗く一般の確である。

【確】「からうす」のことで、機械仕掛で、足や水車で搗く方である。

うすし 薄 淡 菲

【薄】厚の反對で、有形無形に通じて用ひる。「薄氷」「薄志弱行」「薄徳」

かす」と訓んで、「うごく」とはいはな

い。「大風屋を撼かす。」「蚩蚩大樹を撼

かす。」「音カン。」

【蕩】ゆらく動くことで、略搖と同義で

ある。「余が心蕩く。」「舟を蕩かす。」

【盪】蕩と同音同義。

うしなふ 失 喪 亡

【失】得と反對で、取り失ふ義。「損失」

【失望】又聊か不注意から起る意もある。

【遺失】「失錯」「遺失」

【喪】大事な物をなくすること。失つて再び取り返し難き意がある。「親を喪ふ。」「氣を喪ふ。」孟子に「西、地を秦に喪ふ七

【淡】濃の反対で、色や味のうすいこと。

「淡墨」「淡茶」「淡泊」「平淡」

【菲】もと野菜の粗末な物の意で、手輕いことである。論語に「飲食を菲くして、孝を鬼神に致す。」「菲才」

うたふ 歌 謠 謳

【歌】聲を長く引いて、節をつけてうたふこと。「唱歌」「浩歌」

【謠】搖の意であつて、世間一般の流行歌を謠といふ。又獨り歌ふことをいふ。「吟謠」「謠誦」

【謳】多人數同音に歌ふこと。又長い歌の中の一節を歌ふこと。歌と略同義。「謳

うつ 討 伐 擊 打 拍 撲 搏

毆

【討】命を奉じ、罪を咎めて、敵を退治すること。「追討」「征討」孟子に「天子は討ちて伐たず。諸侯は伐ちて討たず。」

【伐】堂々と進んで敵をうつこと。左傳に「凡そ師、鐘鼓あるを伐といひ、無きを侵といふ。」「討伐」「征伐」

【擊】相手を破るやうにうつこと。「攻撃」「擊殺」「劍を抜いて柱を撃つ。」

【打】物でたたくことで、最も廣い意味の字である。「打撃」「打破」「打撲」

【拍】手のひらで打つこと。又手を叩くこ

歌

うち 内 中 裏

【内】外の反対である。區劃の内側全體をいふ。「國內」「屋内」「内憂外患」

【中】内と略同義である。但し中には、中央、真中の意があるが、内には其の意がない。「海中」は海の中で、「海内」は國のうちである。

【裏】表の反対で、もと衣服の肌につく内側をいふのである。「表裏」は、目に見えらる方面と、見えない方面とであるが、内は、唯場所の上からいふので、見える見えぬに關係はない。

木

【撲】小撃といつて、餘り力を入れずに軽くうつこと。「螢を撲つ。」「香氣鼻を撲つ。」「撲滅」「撲殺」

【搏】手に力を入れてうつこと。「虎を搏つ。」「音ハク。」

【毆】杖でうちたたくこと。「毆打」

うつくし 美 麗

【美】醜の反対、惡の反対。有形無形に通じて用ひる。「美德」「美事」「美人」「美貌」「美味」

【麗】形貌色彩の美なることで、「うるは

し」と訓み、はでな事である。「美麗」
「艶麗」

うつす(うつる) 移 遷 徙 映 寫

【移】もと苗を植ゑかへることで、場所をうつすことである。孟子に「河内凶なれば、其の民を河東に移す。」居は氣を移し、養は體を移す。「移轉」

【遷】上下にうつりかはることである。「榮遷」は官位の昇ること。「左遷」は官位の下ることである。詩に「幽谷より出でて喬木に遷る。」ただ遷るといへば、よい方にうつるのである。「孟母の三遷」「遷都」又移に通じて用ひる。論語に「怒を

【訟】言と公から出来た字で、法廷で曲直を争ふことである。「訟獄」

うづむ 埋 瘞 填
【埋】穴を掘つて中に入れ、土をかぶせて見えぬやうにすることである。「埋骨」
「埋没」「埋葬」

【瘞】埋と同義。「埋瘞」「瘞藏」

【填】空處を充たすこと。あてはめること。「填充」「填空」

うばふ 奪 篡 褫

【奪】與の反對で、強ひてひつたくること。「掠奪」「奪還」
【篡】下から上のものをうばふこと。「篡

遷さず。」

【徙】避けて他に遷る意があり、「徙さる」といへば、悪い所へ送られることである。「水草を追うて徙る。」「忠信を主として義に徙る。」音シ。

【映】光が物にうつること。「月光水に映す。」「反映」

【寫】物を書き取ること。「うつる」とは訓まず。「寫字」「書寫」

うつたふ 訴 訟
【訴】冤枉(むじつ)を他にうつたへることで、他の同情を求め、主としていふ。「訴願」「陳訴」

【褫】もと衣服をはぎ取ること、與へてあつた物を取り上げること。「官位を褫ふ。」「音チ。

うまし 甘 旨 美
【甘】味の甘いことからうましといひ、それから心の満足することをいふ。左傳に「管召は讎なり。請ふ、受けて甘心せん。」「甘味」「甘言」

【旨】味の最上なるもの。「旨酒」

【美】旨と同義。「葡萄酒の美酒。」「美味」

うらむ 怨 恨 憾
【怨】恩の反對で、憎み仇とする意がある。

史記に「母家仇怨あり、並に之を阮す。」
論語に「伯夷叔齊は舊惡を念はず、怨み、これを以て稀なり。」

【恨】 怨み怒ること。「怨恨」「憤恨」又残り多く思ふこと。史記に「廣曰く、羌降る者八百餘人、吾詐つて盡く之を殺せり。今に至るまで、大に恨む。」「悔恨」

【憾】 略恨と同義だが、意は稍淺い。孟子に「生を養ひ死を喪して憾なきは王道の始なり。」「遺憾」

うらやむ 羨 艶

【羨】 最も汎く用ひる。「羨望」「仰羨」
【艶】 他を艶として羨むこと。「艶羨」

こと。「火は燥に就き、水は濕に流る。」「濕氣」「濕地」

【潤】 うるほひが有り、つやの有ること。單に水氣が有るといふばかりではない。大學に「富は屋を潤し、徳は身を潤す。」とあるは、そのつやがあるのをいふのである。「河、九里を潤す。」といへば、沿岸の草木が、美しく繁茂してゐるのを指す。「潤澤」

【沾】 水がかかつて、シツボリと濡れること。「汗出でて背を沾す。」「涙、巾を沾す。」

【霑】 沾と同字。

うる 賣 售 沽 賈

【賣】 買の反對で、物品をあきなふこと。汎く用ひる。又この利を謀つて他人を欺くこと。「友を賣る。」「國を賣る」

【售】 うれることである。陸放翁「紙肆、手簡を作りて賣るや、甚だ售る。」「僕妾を賣りて閭巷に售るる者は良僕妾なり。」

【沽】 賈買兩義に用ひる字で、ともに小賈小買である。「酒を沽る。」

【賈】 店で賣ること。行つて賣るのが商で、坐して賣るのが賈である。

うるほす 濕 潤 沾 霑 濡

【濕】 乾又は燥の反對で、しめり氣のあること。「張旭大醉すれば、頭を以て墨に濡して書す。」

うれふ 憂 患 愁 恤 閔 憫 愍
【憂】 さきざきの事を心配苦勞すること。心を主としていふ。論語に「智者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は恐れず。」「憂國」「憂慮」

【患】 病氣災難など、現在の事を苦にすること。事を主にしていふ。孟子に「君子は終身の憂あつて、一時の患なし。」「史記に「臣主心を一にして、海内の患を憂ふ。」「内憂外患」「患者」「患部」

【愁】ものさびしいこと。心の浮かぬこと。
「愁然」「旅愁」「客愁」

【恤】「あはれむ」とも訓む字で、氣にか
け、ふびんに思ふ意である。「田園荒るれ
ども恤へず。」は、田園が荒れても、何と
も思はないの意。

【閔】これも「あはれむ」と訓む字で、略
恤と同義である。

【憫】閔と同義。

【愍】同上。

画の部

系がく 畫繪描

【畫】物の形態をかきうつすことで、彩色
の有無には關係がない。

【繪】「いろどる」と訓む字で、彩色するこ
と。又彩色してある「ゑ」。

【描】うつしゑがくこと。「描寫」「描線」
えらぶ 選擇 簡 譌 撰

【選】多くの中からえりぬくこと。論語に
「衆を選びて臯陶を擧ぐれば、不仁者遠
ざかる。」「選舉」「選擇」「唐詩選」

【擇】よしあしをえり分けること。説苑に
「君子、居は必ず處を擇び、游は必ず士
を擇ぶ。」中庸に「善を擇びて固く之を
執る。」

「撰擇」などと書くのは誤である。

土の部

をか 岡 丘 阜 陵 阜

【岡】地の小高い處。

【丘】地面が段々をなして高くなり、その
上部が平かなものをいふ。「砂丘」「丘岡」

【阜】土山のこと。又丘のやうに段々をな
さず、ただだんだんに高くなつて、上の
平かなをか。「丘阜」「岡阜」又高く厚い
意から、物の豊富なことを阜といふ。「阜
財」「般阜」

【陵】阜の大なるもの。「丘陵」「高陵」又

【簡】悪しきを捨て、善きを取る。選より
は意やや軽い。八家文序に「賈董班馬の
後に於て、獨り此の八大家を簡ぶ。」「簡
拔。」

【譌】善言をえらんで記載すること。作文
著述等に於ては、造るの意である。禮記
に「古の君子は、其の祖先の美を論譌し
て、之を後世に明著にする者なり。」

【撰】譌と同義。唐書に「史館修撰は國
史を修むるを掌る」「撰述」「新撰讀本」
などは、皆「つくる」の意で、書物や碑
文などに「某々撰」とあるのも、固より、
その意である。選と混同して、「撰擧」

次第に衰へ行くことを「**陵夷**」といふのは、**陵**がだんだん麓の方へ低くなり、**夷**かになる所から来たものである。

【**阜**】水邊の小高い處をいふ。音カツ。

をかす 侵 犯 冒 干

【**侵**】いつの間にかだんだんをかし入ること。他人の位置領分にをかし入ること。

「敵國に侵入す。」「他人の權利を侵害す。」

「苔痕、階を侵す。」

【**犯**】獸類が田畑を踏み荒すやうに、無遠慮に他をかすこと。「上を犯す。」「顔をかして諫む。」又法則規律を破ること。

「**犯則**」「**犯罪**」

處に在らせることである。「設置」「常置」

【**措**】手を離して下におくこと。用ひずに捨ておくこと。「感歎措く能はず。」「刑措いて用ひず。」音ソ。

【**舍**】中途でさしおくこと。

【**擱**】多くは、書きやめて筆をおくに用ひる。「擱筆」

おくる 送 贈 餽 遺 貽 賄 賻

【**送**】迎の反對で、人の行くを送ること。

【**送別**】又品物をおくり出すこと。「送附」

【**運送**】「**郵送**」

【**贈**】人に物をやることで、先方の物を増す意味がある。「贈答品」「寄贈」「贈位」

☆オの部

【**冒**】説文に「蒙りて進むなり。」とあつて、頭に物を被つて進む義で、それから爲し難きを敢て爲すことに用ひる。「矢石を冒して進む。」「雪を冒す。」「險を冒す。」又他性を稱すること、春山が秋田へ養子に行けば「秋田の性を冒す。」といふ。

【**干**】「もとむ」とも訓む字で、こちらから出かけて行つて犯し求める意である。「侯伯を干す」は、大名に仕へを求める事である。

おく 置 措 舍 擱

【**餽**】何によらず、人に物をやることで、即ち音物をする事、汎く用ひる。孟子に「兼金一百を餽る。」音キ。

【**遺**】物をおくつて、先方に置いてくる意。蜀志に「司馬懿に巾幗を遺る。」孟子に「湯王、葛伯に牛羊を遺る。」

【**貽**】「のこす」とも訓む字で、物をおくつて先方にのこす意である。書に「厥の子孫に貽る。」又先方の爲になる物をおくる意。韓文に「李蟠年十七、師説を作りて以て之を貽る。」音イ。

【**賄**】死者に物をおくること、即ち香奠である。音ボウ。

【賻】 同上。音フ。

おくる 遅 後

【遅】 一定の時期に、間に合はぬこと。おそくなること。「遅延」「遅刻」

【後】 前や先の反対で、さきにならず、おくれること。あとになること。「長者に後れて出づ。」

おこたる 怠 惰 懈 慢

【怠】 敬の反対で、気がゆるみおこたること。「倦怠」「怠慢」「弛怠」

【惰】 勤の反対で、精を出さず、なまけること。「遊惰」「懶惰」

【懈】 惰と略同義。音カイ。

「天、沛然として雲を作し、沛然として雨を下す。」「邪説暴行作る有り。」

おこる 驕 奢 傲 倨 侈 泰

【驕】 謙の反対で、自分の權威や才學などを鼻にかけて、高ぶること。周官に「位あれば期せずして驕り、祿あれば期せずして侈る。」「驕慢」「驕傲」

【奢】 儉の反対で、衣食住の美麗贅澤を極めること。「奢侈」「驕奢」「豪奢」

【傲】 尊大に構へて、人を輕蔑すること。「傲然」「傲慢」

【倨】 恭の反対で、人と交るに、高ぶつて禮を缺くこと。「倨傲」

【慢】 怠と同義。

おこる(おこす) 起 興 作

【起】 「起伏」「起臥」と連用する字で、伏してゐたものが、高く立ち上ることである。孟子に「王者起るあらば、必ず來りて法を取らん。」

【興】 「興廢」「興亡」と連用する字で、事物の勢ひが増大し、隆盛になることである。孟子に「沛然として雨下れば、即ち苗勃然として之に興る。」史記に「賈生諫めて以爲へらく、患の興るは、これより起らん。」

【作】 事物が出来はじめること。孟子に

【侈】 約の反対で、張大にすること。みえを飾ること。常に「奢侈」と連用するが、奢は美麗を極めることで、侈は小狭で間に合ふことを、張大にするのである。

【泰】 大やうで、ゆたかなこと。聊か奢侈の義はあるが、驕傲の意はない。孟子に「諸侯に傳食す、亦泰らざるや。」

をさむ 修 治 理 收 納 斂 藏 御 馭

【修】 悪い所を手を入れて、追々になほすことである。大學に「その身を修めんと欲する者は、先その心を正しくす。」「修繕」「修學」

【治】 亂の反對で、亂れてゐるものを落ちつかせること。大學に「その國を治めんと欲する者は、先その家を齊ふ。」孟子に「舜をして事を主らしむれば、事治まりて、百姓これに安んず。」

【理】 もと玉ををさめる義で、事物の筋道を立てることである。禮記に「三十にして室あり、始めて男事を理む。」「理髮」

【收】 自分の方へ取り入れること。取り上げるること。孟子に「三年にして反らざれば、然る後にその田里を收む。」「秋收め、冬藏む。」「收入」「收穫」

【納】 先方へをさめること。又大切にしま

「教訓」「教授」

【誨】 言語を以て、をしへさすこと。「訓誨」「教誨」

【訓】 略誨と同義であるが、昔からのをしへ、又常々をしへさすの意がある。詩經に「古訓これ式る。」家庭のをしへを「庭訓」といふ。「訓戒」「校訓」

をしむ 惜 吝 嗇 愛 慳

【惜】 疎末にせぬこと、又は残り多きこと。「名を惜しむ。」「別れを惜しむ。」「光陰を惜しむ。」

【吝】 物惜しみをして「けち」なこと、「しわざ」こと。「吝嗇」「鄙吝」

ひ入れること。「納付」「奉納」

【斂】 かき集めて取り込むこと。「收斂」は租税を集めることである。

【藏】 見えぬやうに、しまひおくこと。「貯藏」「珍藏」「藏書」

【御】 もと馬を使ふことで、轉じて下をひき廻し、治めること。「宇内を御む。」「統御」「駕御」

【馭】 御と同義。「群臣を馭む。」

をしふ 教 誨 訓

【教】 師友長者から、物事の理を説きあかすこと。言語でするにも、方法でするにも、廣く用ひる。「教育」「教導」「教示」

【嗇】 物をむだに費さぬことで、吝ほど惡い意はない。「吝嗇」「慳嗇」

【慳】 吝と同義。「慳吝」「慳貪」

おす 推 壓 擠 捺 押

【推】 力を用ひて、おしやること。「門を推す。」「戸を推す。」此の場合は音タイ。又精神上にも用ふ。「推究」「推量」

【壓】 上からをしつけること。「鎮壓」「壓制」「壓迫」「壓殺」

【擠】 おし落すこと。韓文に「一たびも、手を引き之を救ふをせず、反つて之を擠し、又石を下す。」「排擠」

【捺】 手に力を入れておすこと。「捺印」

【押捺】

【押】 壓と同義であるが、用法や違つてゐる。「押署」は記名調印すること、「押韻」は詩に韻を踏むことである。

おそし 遅 晩 晏

【遅】 速の反対で、ノロノロしてゐること。

【巧遅】 拙速に如かず。

【晩】 日の暮方のことで、それより轉じて老年のことを「晩年」といひ、年とつてから學問するを「晩學」といふ。「大器晩成」

【晏】 朝のおそいこと。おそく起きるを「晏起」といひ、おそくまで眠るを「晏眠」

もない。論語に「勇者は懼れず。」又「孔子曰く「吾れ、必ずや、事に臨みて懼れ、謀を好みて成す者に與せん。」孟子に「公孫衍、張儀は、豈に誠に大丈夫ならずや。一たび怒りて、天下懼る。」音ク。

【畏】 恐の甚だしいので、おそれ憚る意。論語に「後生畏るべし。焉んぞ來者の今に如かざるを知らんや。」又「君子に三畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。」「畏服」「畏友」「畏敬」

【怖】 「おどかさす」の意味の字で、「おそる」と訓んでも、おどかさされて怖れるのである。後漢書に「巫祝鬼神に依託して、恐

といふ。天子の崩御を「晏駕」といふのは、臣子の情として、宮車なほおそく駕して出づるであらうと思ふ意から來た語である。

おそる 恐 懼 畏 怖 怕 惶 怯

【恐】 さきぐの事を心配しておそれること。史記に「鄭公、その弟懐の昭王を殺さんことを恐れ、王とともに隋に走る。」孟子に「齊人、薛に城かんとす。吾れ甚だ之を恐る。」又「恐らくば……ことを」といふ時は、この恐字に限る。

【懼】 おそるべき事物に對してビクビクすること、さきぐを心配する意は少し

民を詐り怖れしむる有り。」韓文に「汝怖る、勿れ、死は命なり。」「驚怖」「畏怖」

【怕】 懼恐と同義に用ふ。音ハク。

【惶】 おそれおのゝくこと。惑うて爲す所を知らない意である。後漢書に「惶惑して、之く所を知らず。」「恐惶」

【怯】 勇の反対で、臆病なこと。後漢書に「小敵を見て怯る。」音ケフ。

おつ 落 墮 墜 零 隕

【落】 上から下へおち下ること、最も廣く用ひる。「落馬」「落第」「落涙」

【墮】 すべりおつる、くづれおつる意であ

る。「地獄に墮つ。」史記に「士卒指を墮す。」「墮落」「墮胎」

【墜】 強く下へおち込む。韓詩外傳に「星墜ちて木鳴る。」「墜落」「失墜」

【零】 降りおつること。詩經に「靈雨既に零つ。」「草木零落す。」

【隕】 高い所から、真直に落下すること。易に「天より隕つるものあり。」左傳に「星隕つること雨の如し。」「隕石」

をどる 踊 跳 躍

【踊】 小をどりである。足をあげて舞ふことである。「舞踊」

【跳】 一とびに飛び上ること。「跳梁」

【畢】 終と同義で、やゝ強い。「畢生の事業。」

【卒】 事物が、終り盡きてしまふこと。又爲し果すこと。「卒業」

【訖】 卒と同義。音キツ。

【竟】 押し通して、つまりまで行くこと。「畢竟」

【了】 サツパリと済んでしまふこと。「校了」「讀了」

おふ 追 逐

【追】 逃げ行くものを、後から追ひかけること。論語に「往者は諫むべからず、來

【躍】 跳よりも意強く、飛び上り、飛び超えること。「飛躍」「躍進」

おどろく 驚 駭 愕

【驚】 ビツクリすること。用法最も廣い。「吃驚」「驚怖」

【駭】 ビツクリして起き上るほどの意で、驚よりは重い。公羊傳に「諸大夫之を見て、皆色然として駭く。」

【愕】 意最も重く、おどろいて、あわてふためくことである。史記に「秦王柱を環つて走る、群臣皆愕く。」「錯愕」「愕然」

をばる 終 畢 卒 訖 竟 了

【終】 初又は始に對する字で、「をばりま

者は猶追ふべし。」「追捕」「追撃」

【逐】 他へおひ拂ふこと。「驅逐」「放逐」

おぶ 帶 佩

【帶】 腰のまはりに物を纏ふこと。

【佩】 身につけて物を持つこと。「印を佩ぶ。」「玉を佩ぶ。」「佩刀」

おほし 多 衆

【多】 少の反對で、數量の多いこと。汎く用ひる。

【衆】 人數の多いこと。「衆人」「會衆」「民衆」「群衆」

おほふ 覆 蔽 蓋 掩 庇

【覆】 上からかぶせること。「天は覆ひ、地

は載す。「覆面」

【蔽】 おほひつゝむこと。論語に「詩三百、一言以て之を蔽ふ、曰く、思ひ邪なし。」
「隠蔽」

【蓋】 ふたをするやうに、一かぶせにする
こと。項羽「力山を抜き、氣、世を蓋ふ。」

【掩】 遮りかくすこと。「林、家を掩ふ。」
「掩蔽」

【庇】 もと家屋のことで、轉じて物を保護
し、かばふに用ひる。「庇護」

おほむね 概 率

【概】 もと「ますかき」の義で、轉じて、
「おしならして」「おほよそ」の意に用ひ

【憶】 覚えてゐること、又思ひ出すこと。

「記憶」「追憶」

【念】 常に忘れずにあること、思よりは輕
い。史記に「伯夷、叔齊は舊惡を念はず。
怨み、これを用て稀なり。」

おもむく 赴 趣

【赴】 先方へかけつけ行くこと。「任に赴
く。」

【趣】 重に「おもむき」と訓んで、「趣旨」
「趣意」「趣味」など、連用する。

おもんばかり 慮 臆

【慮】 いろ／＼と思案工夫すること。論語
に「遠き慮なければ、必ず近き憂あり。」

る。「概算」「概況」「梗概」

【率】 比率の意で、計算を見積ること。

おもふ 思 想 懷 憶 念

【思】 心に考へること、最も廣く用ひる。

「思慮」「思案」「慎思」又おもひ慕ふこ
と。「故人の徳を思ふ。」「遙に人を思ふ。」

【想】 物の形象を心の上に浮べおもふこ
と。歐文に「其の書を読み、尙其の人
を想ふ。」「想像」

【懷】 「ふところ」と訓む字で、心の底にお
もひ込んでゐること。論語に「君子は刑
を懷ひ、小人は惠を懷ふ。」「懷抱」「懷
舊」

「思慮」「短慮」「賢慮」

【臆】 心の中でおしはかること。「臆測」

およぶ 及 逮 迨

【及】 先へ至りとやくこと。書經に「罰は
嗣に及ばず、賞は世に延く。」

【逮】 後より追ひつく意。大學に「菑、必
ずかの身に逮ぶ。」「逮捕」「逮夜」

【迨】 逮と略同義。音タイ。

をる 居 處

【居】 起の反對で、坐つてゐること。又其
處に居ること。「起居」「家居」「屏居」

「居所」

【處】 出又は去の反對で、其處を離れずに

居ることである。「處士」は、出で、仕へざる人。「處女」は、出で、嫁せざる女である。

おろか 愚 癡 魯 癡 騷 癡

【愚】 智の反對で、分別の無いこと。

【癡】 黠の反對で、利口でないこと。北史

に「李集強諫して屈せず。帝笑うて曰く、

天下かくの如き癡漢有り。」「癡頑」「白

癡」

【魯】 穎敏の反對で、才智の働きが遅鈍な

ること。「魯鈍」

【癡】 拙直といつて馬鹿正直など。音タウ。

【騷】 癡愚の二字を兼ねてゐる。音ガイ。

氣の上（ま）に用ひ、又人の名譽（めいよ）の高いことにも用ひる。「芳香」「芳名を竹帛（ちくはく）に垂る。」

【香】 よいかをりのことである。「線香」

【抹香】

【馨】 香氣が、遠くまで匂ひわたることである。書經に「至治の馨香、神明に感ず。」

【馥】 プン／＼匂ふことである。「馥郁」

【芬馥】

【被】 「おほふ」「きる」など、訓む字で、

身體の表面に、著物などをつけることである。「堅を被り、鏡を執る。」は、甲を

著け、武器を執ること。「被服」「被害」

★力の部

（五二）

【癡】 至愚である。禮記に「哀公曰く、寡人癡愚頑冥。」

おろそか 疎 疏 粗

【疎】 親又は密の反對で、間の遠いこと、まばらなことである。「疎遠」「疎濶」

【疏】 疎と同字。

【粗】 精の反對で、あらく／＼しくして、こまやかでないこと。「粗製濫造」「粗略」

【粗笨】

かうばし 芳香 馨 馥

【芳】 もと香草の總名であるが、轉じて香

力の部

（五三）

【蒙】 「つゝむ」「をかす」など、訓む字で、頭から身體全體スツポリつゝむ意がある。宋史に「卒をして氈を蒙り燧を乗りて以て入らしむ。」漢書に「日月光らず、百姓幸を蒙る。」「蒙塵」

【冠】 頭に戴くこと。

かかど 掲 褰 挑

【掲】 高く引き上げること。「國旗を掲ぐ。」

【褰】 衣服や幕などのやうに、下に垂れてゐるものを上げること。詩經に「裳を褰げて水を渉る。」

【挑】 はね起すことである。「燈火を挑ぐ。」

（五三）

かかはる 拘 係 關

【拘】物事になづんで、變通のきかぬこと。「拘泥」「拘束」

【係】物事にかゝりあふこと。

【關】「あづかる」といふ意から轉じて、係と略同義に用ひる。「關係」

かがみ 鏡 鑑

【鏡】「かがみ」と訓んで、名詞にのみ用ひる。

【鑑】鏡と同義。又「かんがみる」と訓んで、動詞としても用ひる。

かき 垣 牆 籬 藩 堵

【垣】低く土を築いて、家屋のまはりを圍

つたもの。

【牆】土塼の一種。瓦を築いて、その間に土を充てたもので、垣よりは高い。

【籬】竹を編んで造つたもので、即ち「ませがき」である。

【藩】丸太で造つた柵。又家の周圍に、竹木などを植ゑて圍つたもの。

【堵】土塼の一種で、垣よりは高いもの。

かく(かかる) 懸 掛 挂 繫 係

系 羅

【懸】物を高い所へ吊しかける。又つなぎかけること。易に「象を懸けて著明なるは、日月より大なるは莫し。」孟子に「な

ほ倒懸を解くが如し。」史記に「百姓の命、皆君に懸る。」

【掛】物に倚りそうて引きかけること。「柱に帽子を掛く。」「床の間に軸を掛く。」

「數、網羅に掛る。」

【挂】掛に同じ。

【繫】つなぎとめること。歐文に「外事喧沸、而して事安危に繫る。」

【係】略繫と同義。但し繫は結縛の意を主とし、係は連屬の意を主とする。

【系】係に同じ。

【罹】「かゝる」と訓んで、病氣や災難にかゝることである。「罹災」

かく 搔 抓 爬

【搔】爪でかくこと。「首を搔く。」「癢を搔く。」

【抓】搔と同義。音サウ。

【爬】かきむしること。物に附着した紙などを、爪で掻き取る場合にいふ。音ハ。

かく 欠 缺 闕 虧

【欠】數量の不足せること。又手落のあること。音ケン。

【缺】完の反對で、物事にかけて損じのあること。「缺點」「缺席」「金甌缺くる無し」

【闕】全の反對である。缺と似てゐるが、缺は一物にかけ損じのあるをいひ、闕は

【隠】 多くの物がチャンと揃つてゐないことをいふ。例へば、赤字といへば、字の點畫の損じたものをいひ、闕字といへば、一の語句文章中で、一二字脱落したのをいふのである。

【虧】 盈の反對で、月のだん／＼かけてゆくこと。音キ。

かくる(かくす) 隠 匿 竄 潛 藏

【隱】 顯現の反對で、物の陰にかくれて見えぬこと。「月、雲に隠る。」「山林に隠遁す。」「隱蔽」中庸に「惡を隠して善を揚ぐ。」

深くかくれる意である。藏と稍似てゐるが、蓄へるの意はない。「山林に韜晦す。」

かげ 景 影 陰 蔭

【景】 日の光 「光景」 「風景」

【影】 景で映し出された物の形。「影響」

「形影」

【陰】 陽の反對で、光のあたらないところ。

「花陰」 「樹陰」 「綠陰」

【蔭】 陰と同義であるが、多くは草木の陰に用ひる。

かご 籠 籃

【籠】 中に入れた物が、外に脱け出さないやうに造つてあるかご。「天下を以て之

★力の部

【匿】 逃げかくれること。又本體をかくすこと。後漢書に「湖陽公主の蒼頭、白日人を殺す、囚つて主家に匿る。」「匿名」

【竄】 逃げ廻つてかくれること。國語に「自ら戎翟の間に竄る。」「遁竄」

【潛】 「ひそむ」と訓んで、魚が水底にひそんでゐるやうに、ひそみ隠れて、じつとしてゐること。「潛匿」 「潛航」

【藏】 收め蓄へること。論語に「之を用ふれば則ち行ひ、之を舍つれば則ち藏る。」史記に「知なるかな、留侯は善くその用を藏す。」

【韜】 「つゝむ」と訓む字で、光をかくして

かごとなさば、雀逃るる所なし。「烏籠」

【籃】 「ざる」のやうに造つてあるかご。

菓物や魚類を入れるのは、皆この籃である。「搖籃」は、小兒を入れ置く「ゆりかご」「魚籃」

かさ、笠 傘

【笠】 頭に戴くかさ。菅笠の類。

【傘】 中心に長い柄があつて、手に持つかさ。「蝙蝠傘」「雨傘」

かさね(かさなる) 重 申 累

【重】 最も汎く用ひる。

【申】 言語を繰り返すこと。「三令五申」は、たびたび繰り返して戒めることであ

【累】 つづき重なること。「累年」「累卵」「累遷」

かざる 飾文

【飾】 綺麗にすること。又整へること。莊子に「強は以て敵を拒ぐに足り、辯は以て非を飾るに足る。」「裝飾」「修飾」

【文】 あや模様をつけ、美麗にすること。論語に「小人の過や、必ず文る。」「文飾」

かす 粕糟滓

【粕】 酒のかす。

【糟】 粕と同義。

【滓】 残留物、沈澱物。音シ。

の知らない趣をいふのである。

【杳】 遠くして判然せぬ程の意。「杳冥」「杳遠」又「はるか」とも訓む。

かすむ 掠略抄

【掠】 他人所有の物品や土地を、力を以て奪ひ取ること。「掠奪」「劫掠」

【略】 他人の物をわが物にすること。多く土地を奪ふことに用ひる。「奪略」「抄略」

【抄】 略と同義。

かぜ 風 颶 颶 嵐

【風】 汎く用ひる。

【颶】 大暴風をいふ。

【颶】 下から上に吹きあがる風。又扶搖と

★力の部

かす 貸 假

【貸】 借の反対で、他人に金品を用立てること。

【假】 容すの意に用ひる。「假すに時日を以てせば、必ず之を完成すべし。」「寛假」「假借」

かすか 微 幽 杳

【微】 物でも音でも、甚だ小くて、耳目にわからぬ程のこと。「微音」「微脈」「微細」「微塵」

【幽】 深い處、暗い處に在つて、ハツキリと見えぬこと。「伐木丁々山更に幽なり。」「深山幽谷」など、皆深くして、人

もいふ。莊子に「扶搖に搏つて、上るもの九萬里。」音ヘツ。

【嵐】 字の本義は山氣である。和訓「あらし」と讀んで、烈しい風のことを用ひてゐる。

【數】 單に數へることである。「國君の富を問へば、地を數へて以て對ふ。」

【算】 算盤に當てて見るの意。「斗筭の人、何ぞ算ふるに足らん。」

【堅】 脆の反対で、物の外面から中心まで同様にかたきこと。「堅石」「堅壘」「堅

かたし 堅固 硬牢 鞏確

【堅】 脆の反対で、物の外面から中心まで同様にかたきこと。「堅石」「堅壘」「堅

【堅】 脆の反対で、物の外面から中心まで同様にかたきこと。「堅石」「堅壘」「堅

【堅】 脆の反対で、物の外面から中心まで同様にかたきこと。「堅石」「堅壘」「堅

(五九)

心鐵石の如し。

【固】「かたむ」「かたまる」とも訓む字で、しつかりして破れず崩れぬこと。孟子に

「國を固うするは山谿の險を以てせず。」

「寵を固うして權を用ふ。」堅固」「固辭」

【硬】軟の反對である。「硬派」「硬論」「硬膏」などといつて、いつでも軟字に對する意味で、絶對的に堅固の意味ではない。

【牢】手がたい意味である。略固と同義である。「堅牢」「牢固」

【鞏】革で巻き固めた意である。「鞏固」

【確】たしかである。しつかりしてゐるの意。「確守」「確論」「確言」

【狀】「ありさま」「ふうつき」の義である。後赤壁賦に「巨口細鱗、狀松江の鱧の如し。」「水を飲むの狀を爲す」

【態】「様子から」の義である。「君子の態」「態度」

【象】あらはれたるかたちの義。「森羅萬象」「天象」「現象」

かたよる 偏 僻

【偏】中正ならず、一方により傾くこと。「偏頗」「偏見」

【僻】かたすみによりつくこと。一方にひかむこと。「僻戻」「僻説」「僻見」「僻地」

かたる 語 談 譚 話

★力の部

かたじけなし 忝 辱

【忝】「はづかしむ」と訓む字である。自分が屈辱すれば、先方が尊くなつて、かたじけないことになる。「不徳、帝位を忝うす。」

【辱】忝と同義。

かたち 形 容貌 状態 象

【形】多くは生命のない物の上に用ひる。

【容】「なりふり」の義で、多くは人の様子をあらはすに用ひる。「禮容」「儀容」

【山容】

【貌】「つらがまへ」の義で、顔面の上に用ひる。「容貌」「美貌」

【語】口から言葉を出すことで、聞く對手の有無に關係はない。「食ふに語らず。」「獨語」

【談】對手とかたり合ふこと。「談論」「快談」

【譚】談と同義。

【話】他人に話し聞かせること。「説話」「講話」「訓話」

かたはら 傍 側

【傍】その物の附近、ほど遠からぬあたり。

【側】その物の片側、ごく接近した處。「家の傍」といへば家の近傍のことで、必ずしも距離の遠近を問はない。「家の側」と

いへば、その左側か右側かの、ごく接近した處をいふ。

かつ 勝 克 捷 贏 戡

【勝】 負の反對である。「まさる」とも訓む

字で、對手よりも力のまさつてゐることである。用法最も廣い。「勝敗」「勝利」

【克】 勝ち難きにかつこと。「克己」又戦

に勝つて敵の將卒を取ることに。又戦の城

邑を攻め落すこと。左傳に「鄭伯、般に

鄆に克つ。」曾鞏の文に「戦へば必ず勝

ち、攻むれば必ず克つ。」

【捷】 軍にかつこと。「戰捷」「捷報」

【贏】 多く物を取ることで、「まようく」とも

である。

かなし(かなしむ) 悲哀

【悲】 喜の反對で、廣く用ひる。「悲歎」

「悲泣」「悲劇」

【哀】 樂の反對で、悲よりも重い。父母の

死をかなしむは哀である。哀は又かなし

みの聲に發したもので、「哭聲甚だ哀し。」

「雁聲哀し。」などともいふ。「哀悼」「哀

惜」「悲哀」

かなふ 適 稱 協 叶 愜 副

【適】 心の思通りになること。「足を忘る

るは屨の適なり」は、屨の穿き心地の好

いこと。「賢愚の分に適す。」「適當」

★力の部

訓む字である。博奕、角觥などの勝負に用ひる。「輸贏」は「まげかち」である。

【戡】 軍に勝つて、亂を平げること。「戡定」

かつて 嘗 曾

かつて 嘗 曾

【嘗】 「なむ」「こころむ」と訓む字で、「ま

へかた」「いづぞや」経験したことに用ひ

る。「未だ嘗て聞かず。」は、またこれま

で聞いたことがないの意。

【曾】 「チヨット」「或時一度」の意。「未だ

曾て有らず」は、まだチヨットでも無い

の意。嘗は事柄の上に於て度数をいひ、

曾は時間の上に於て、チヨット一度の意

【稱】 釣合ふこと。不似合でないこと。日

本外史に「腰圍七尺、長之に稱ふ。」曾鞏

の文に「王安石は、文甚だ古、行その文

に稱ふ。」

【協】 心の相合ふこと。書に「重華、帝に

協ふ。」「協心」「協和」「協同」

【叶】 協の古字。

【愜】 心に満足すること。漢書に「天下の

人民、未だ志に愜ふあらず。」音ケフ。

【副】 「そふ」と訓む字で、略稱と同義で

ある。「名實副ひ難し。」「盛意に副ふ能

はず。」

かぬ 兼 攝 該 包

【兼】 二三の物を一にすること。「力十人を兼ね。」「晝夜兼行」

【攝】 假に兼ねること。「相の事を攝行す。」
「攝政」

【該】 悉くをかね備へること。大學衍義に「洪範九疇は六十有五字のみ。しかも天道、人事、該ねざるはなし。」

【包】 「つゝむ」と訓む字で、大きく引き括める意。

かね 鐘 鉦

【鐘】 つりがね。「梵鐘」「半鐘」

【鉦】 たたきがね。

かは 川 河

【川】 水が地の窪い處を流れてゐるのは、大小長短を問はず、皆川である。「巨川」「名川」

【河】 もと支那の黄河をいつたもので、又黄河に注ぐ川をも河と稱した。今は一般に、小なるを川といひ、大なるを河といつてゐるが、字の本義ではない。又「銀河」は「あまのがは」のことである。

かは 皮 革 韋

【皮】 毛のある皮。「虎皮」「熊皮」

【革】 「つくり皮」で、毛を去つた皮のこと。

【韋】 「なめし皮」で、革を柔かにしたもの。かはる(かふ) 變化 渝 易 更

代替 換

【變】 常の反對である。急にかはること。

「變事」「變心」「天變地異」「機變」「臨機應變」

【化】 かはりきること。物の本質までかはること。「鯉化して龍となる。」「腐草化して螢となる。」「徳化」「教化」

【渝】 元の約束をかへること。左傳に「この盟を渝へば、國を亡すに至らん。」「言を渝ふ。」又、元の色のかはること。隋書に「花落ち、葉の色渝れば、易ふるに新樹木を以てす。」

【易】 物がそのまま變ずることにも用ひて

【換】 こちらの物をやつて、あちらの物を取ること。「交換」

かふ 買 沽 酤 市

【買】 賣に對する字で、汎く用ひる。

【沽】 賣買兩義の字で、「かふ」と訓めば、小買のことである。

【酤】 沽と同義。

【市】 市場で買ふこと。この字も賣買兩義がある。論語に「沽ひたる酒、市ひたる脯は食はず。」

かふ 飼 牧 豢

【飼】 鳥獸に餌を與へて養ふこと。「飼養」

【飼育】

かへりみる 顧 省 眷

【顧】 振り返つて後を見ることである。「恩顧」は、君から御目をかけられること。

【枉顧】「左顧」は、高貴の人が我が方に來訪すること。「回顧」

【省】 自ら氣をつけて見ること。「反省」

【省察】 論語に「吾、日に三たび吾が身を省る。」

【眷】 目上の人が、目下の者を愛すること。

【眷顧】

かへる(かへす) 歸 還 反 返 復

回旋

【歸】 落付くべき處にかへつて落付くこと

【牧】 牛羊馬などを野に放つて、草を食はせて養ふこと。

【豢】 檻の中に獸類を入れ置いて、餌を與へて養ふこと。「豢養」

かへつて 卻 反

【卻】 「しりぞく」と訓む字で、あとじさりする意である。従つて、だんだん反對の方面に向ふをいふ。「生を養はんと欲して、卻つて生を傷ふ。」却是俗字。

【反】 手の裏を返すやうに、まるで反對になること。管輅傳に「義博に就いて易を讀む。未だ一年ならざるに、義博反つて管輅に従つて易を問ふ。」

女は夫の家が落付くべき處であるから、嫁入することを歸といふ。「家に歸る。」

【郷に歸る。】「歸朝」

【還】 往の反對で「行先から戻つて來ること。」「めぐる」と訓む字であるから、途中からかへるなどは、多くこの字を用ひる。

東京の人が、仙臺から青森へ行つたとすると、「青森より仙臺に還り、東京に歸る」である。胡澹菴の高宗に上る封事に「梓宮還るべし。太后復すべし。淵聖歸るべし。中原得べし。」續通鑑綱目に「孟珙は蒙古を破り、虜民二萬を還して歸る。」「還幸」「生還」

【反】「取つてかへす。」の意で、還に似てあるが、言ひ方が強い。

【返】反と同義。

【復】再び元の通をかへること。

【回】グルグルとめぐりかへること。又急に引きかへすこと。

【旋】「めぐる」と訓む字で、回と同義。

かまびすし 喧嘩 聒 聒 聒

【喧】大聲をあげて、われがちに八釜しくいふこと。「喧嘩」「喧鬧」

いふこと。「喧嘩」「喧鬧」

【嘩】口々に八釜しくいふこと。爭論してある時の如きが、それである。一に譁に作る。

作る。

【噉】かみきること、骨でも何でも食ふ場合である。「反噉」

【咬】かじりかむこと。

【齧】咬と略同義、又くひつく。

【咬】齧と略同義。

からし 辛 鹹 辣 苛

【辛】唐辛・山椒・山葵などのやうに、烈しく舌を刺激して辛きこと。轉じて、つらい、苦しい等の意に用ひる。

【鹹】鹽からいこと。

【辣】辛味の甚だしいこと。「辛辣」「惡辣」「辣手段」

【苛】「からし」と訓んでも、舌に感ずる味

★力の部

【苛】「からし」と訓んでも、舌に感ずる味

★力の部

【苛】「からし」と訓んでも、舌に感ずる味

【聒】ガヤガヤして、耳遠くなるほど八釜しいこと。蛙が鳴いたり、蟬が噪いだりするものが、それである。「喧聒」

【聒】大勢の聲で騒がしいこと。音ガウ。

【聒】口やかましくいふこと。史記に「父頑に、母聒に、弟象傲れり。」

かむ 噉 嚼 咀 噉 咬 齧 咬

【噉】かじること。音ガウ。

【嚼】ニチャニチャと音させてかむことで、牛の物を食ふ時などがそれである。

【咀】嚼と同義であるが、口中に含んで味ふことである。「華を咀み、英を含む。」

【咀】嚼と同義であるが、口中に含んで味ふことである。「華を咀み、英を含む。」

【咀】嚼と同義であるが、口中に含んで味ふことである。「華を咀み、英を含む。」

【咀嚼玩味】

ではない。「手きびしい」「苦しい」「わづらはしい。」等の意である。「苛政虎よりも猛し。」「苛法」「苛酷」

かり 獵 狩 田

【獵】鳥獸を捕へることで、かりの總名である。爾雅に「春獵を蒐となし、夏獵を苗となし、秋獵を獮となし、冬獵を狩となす。」とある。

【狩】冬の狩をいふのであるが、わが國では、汎くこの字を用ひてゐる。

【田】獵と同義。田の害を除くといふ所から來てゐる。但し田は意小に獵は大なり。

かる 借 假

【借】 貸の反對で、汎く用ひる。

【假】 一時間に合せること。

かる 刈 芟

【刈】 收穫時に、稲や麥などを刈ること、

「かりをさめる。」「かり集める。」の「か

り」である。「禾を刈る。」「刈穫」

【芟】 雑草などを芟り棄てるの「かる」で

ある。「芟除」「芟鋤」

かる 枯 槁 涸 噎

【枯】 榮の反對で、草木の立ちがれするこ

と。「枯草」「枯死」

【槁】 枯れてカラカラになること。「槁木

死灰」

【涸】 河や井戸などの水のかれること。

【噎】 聲のかれること。音アイ、又はサ。

かわく 乾 燥 渴

【乾】 濕の反對で、しめり氣がなく、かわ

くこと。

【燥】 潤の反對で、かわき切つてハシヤい

でゐること。「火は燥に就く。」「土地高

燥」

【渴】 喉がかわくこと。「飢渴」

かんがふ 考 稽 勘 按

【考】 事物の道理を思ひはかること。「思

考」「熟考」「考察」

【稽】 思ひ較べること。「稽古」といへば、

入ること。きこえることである。「聲天

に聞ゆ。」

【聽】 自分から注意してきくこと。「視聽」

と連用する。中庸に「心此にあらざれば

聽けども聞えず。」「講を聽く。」「政を

聽く。」

きざし 兆 萌

【兆】 事の起らうとする前に見れる「しる

し」である。「前兆」「兆候」

【萌】 草木の芽のもえだすこと。それから

轉じて事の發端をいふ。音パウ。

きざむ 彫 刻

【彫】 細に鏤ること、飾りにほりつける

キの部

き 木 樹

【木】 草に對する字で、木の總名である。

生きてゐる立木にも、柱や板にしたもの

にも通じて用ひる。

【樹】 生きてゐる立木のことである。故に

「木造家屋」「木橋」とはいふが、「樹造

家屋」「樹橋」とはいはない。

きく 聞 聽

【聞】 「見聞」と連用する字で、聲音が耳に

意がある。「玉を以て輿を飾り、之を彫鏤す。」「彫鏤」「彫刻」

【刻】ただきざむだけのこと、飾るの意はない。一條の線を鏤りつけても刻である。時間を時刻といふのも、もと、木に度盛の線を刻みつけて、それで日晷を測つて時を知つたからである。

きし 岸 涯

【岸】水際の高地をいふ。その高い意から轉用して、人の高ぶることを「傲岸」といひ、たけ高きことを「偉岸」といふ。

【涯】水行き止まるところ、水際の意であつて、高い意はない。厓、崖畧同じ。

物たると、木石たるとを問はない。「負傷」「擦過傷」

【疵】痣のやうなきず、又人物、器物等の不完全な點にも用ひる。

【癢】なまきず、又きずあと。「刀癢」「癢痕」

【瑕】もと玉のきずをいふのであるが、この字も亦疵とともに、人の容貌性行や、詩文などの缺點をいふに用ひる。

きぬ 絹 帛

【絹】蠶の繭から、絲を延いて採つたもの。

【帛】絹絲で織つた織物。「布帛」は木綿と絹織物。

きしる 軋 轆

【軋】車と車の輪が、擦れ合ひ、嚙み合ふことで、それから轉用して、人の相争ふことに用ひる。「軋轆」

【轆】車が、他の物の上に廻つて、その輪が當ること、それから轉用して、他と争つて凌ぎつけることに用ひる。軋は、相争ふ者が同等の力があるが、轆は、他を犯し負かせることである。「凌轆」「轆死」

きず 創 傷 疵 癢 瑕

【創】刃物のきりきず。「金創」

【傷】怪我すること、手を負ふことで、刃

きはむ(きはまる) 極 窮 究 谷

【極】物事の「はて」「どんづまり」の義。

「極端」「極點」「至極」「極度」

【窮】物事の最終の處まで行ききはめること。「盛を窮む」「日の力を窮む」「困窮」「窮乏」窮と同字。

【究】物事の根源をたづねきはめること。

「研究」「攻究」

【谷】身動のならぬこと。「進退維谷まる。」

きびし 嚴 緊

【嚴】寛の反對で、威力を以て臨むやうにきびしいこと。「嚴重」「威嚴」「嚴守」

【緊】緩みがなく、引きしまつてゐること。

のびのびする餘裕のないこと。「緊急」

「緊要」「緊張」

きり 桐 梧

【桐】 普通に謂ふ所のきりである。

【梧】 また「梧桐」とも連用して、青ざり

のこと。

きる 切 斬 伐 斫 剪 剪裁

鑽

【切】 刀で切りきざむこと。禮記に「之を

切つて膾となす。」とある。膾は「さし

み」の如きものである。

【斬】 きりはなすこと。もと人の首を斬る

ことである。「斬罪」「斬馬劍」

著の畧字なり。

【被】 身のまはりを包むやうにきること。

墨子に「齧缺衣を被て、行歌して去る。」

ク の 部

くだく 碎 摧

【碎】 細に破ること。「玉を砕く。」「氷を

砕く。」「粉碎」「碎破」

【摧】 竹木・器物・家屋などを碎きひしぐこ

と。「摧破」「摧折」

くだる 下 降

【下】 上に對する字で、上から眞直にくだ

るので、その意が強い。

★ク の 部

【伐】 たたききること。木を伐るに用ひ

る。詩經に「伐木丁々」

【斫】 略斬と同義。きり落すこと。「竹木

を斫る。」「首を斫る。」「音シヤク。

【剪】 鋏できること。「爪を翦る。」「

翦」翦の俗字。

【截】 寸々にたちきること。「截斷」

【鑽】 前の諸字とは違つて、刃物で切る意

は、更にない。錐で採み込むことである。

「鑿を鑽りて、人に火食を教ふ。」

きる 著 被

【著】 身につけること。必ずしも衣服に

限らない。「著衣」「著服」「著袴」着は

【降】 登の反對で、坂路などをくだること。

下に比して意が弱い。

くつがへる 覆 顛

【覆】 上下反對にひつくりかへること。「覆

没」は、船がひつくりかへつて沈むこと。

「反覆」は、まるで心變すること。

【顛】 横に仆れることをいふので、必ず

しも上下ひつくりかへらないでもない。

「汽車顛覆す。」「本末を顛倒す。」「顛墜」

くづる 崩 壞 頽

【崩】 山や崖などのやうな大きいものが、

一時にくづれること。轉じて、天子の死

を「崩御」といふ。「土崩瓦解」「崩壞」

【壞】壁や垣などが、次第にくづれてゆくこと。春秋に「魯の城門壞る。」

【頽】自然に、下地の基礎から、くづれゆくこと。老いぼれる年を「頽齡」といひ、酔うて威儀のくづれるのを「頽然」として酔ふ。」といふ。

くに 邦 國

【邦】大國をいふ。「邦家」「舊邦」

【國】小國大國に通じいふ。「武藏國」「相模國」「帝國」「英國」

くはし 精 詳 委

【精】「しらげ米」のことで、よく搗き抜いた米のことである。それから轉じて、

することを顯はす。

【挹】略酌と同義。音イフ。

くら 藏 倉 陳 府 庫

【藏】總て物を納め置く處。

【倉】禮記の注に「穀藏を倉といふ」とあつて、刈り上げたままの五穀を聚め置く處である。

【廩】禮記の注に「米藏を廩といふ」とあつて、已に穀物になした物を藏め置く處である。

【府】財貨寶物を藏めて置く處、「かねぐら」である。

【庫】兵器、車等の諸道具を入れ置く處で、

吟味の届いた、細に念の入つたことである。詳細の意とは稍相違がある。「精細」「精密」「精確」

【詳】略の反對で、つまびらかなこと。「詳細」

【委】委曲と連用して、流水の曲りくねりのこと。それから轉用して、入り込みたる處まで、残さずにするをいふ。

くむ 汲 酌 斟 挹

【汲】河水や井戸水を汲みあげることを。

【酌】酒を杯に注ぐこと。

【斟】酒をくみ出して、うめあはせすること。轉じて、斟酌と連用して、折衷考慮

府よりは粗末に建てたものである。

くらし 暗 闇 昏 昧 晦 冥

【暗】明の反對で、日月・燭火・道理・心識等に通じて用ひる。「暗夜」「暗愚」「暗室」

【闇】暗に同じ。

【昏】日が全く没して、くらくなつた頃をいふ。暗よりは意が軽い。「昏禮」といふのも、昔は昏時に儀式を擧げたからである。後世には婚字を用ひてゐる。「昏愚」「黄昏」

【昧】うすぐらく、分明ならぬをいふ。「昧爽」は、夜の明けぎはの薄暗い時、「草昧」は、世の始で、諸事物の分明に定ま

らぬ頃をいふ。「愚昧」「暗昧」

【晦】「つごもり」のことで、くらやみの夜

である。多くは「くります」と訓んで、

世間から身を隠す意に用ひる。「韜晦」

「隱晦」「顯晦」

【冥】暗くして測り難い意がある。「青冥」

「蒼冥」は天のことである。死んで行く先

は「冥途」である。「北冥」「玄冥」

くらふ 食 喫 吃 茄 啖 噉 餐

【食】飲食と連用する字で、物をくふこと

には廣く用ひる。又知行を取ることに

用ひて、「禄を食む」「粟を食む」とい

ひ、他の力を此方の用に立てることに

飯」といふ。轉じて其の儘すぐに食ふ意

に用ひる。「秋菊の落英を餐ふ。」

くらぶ 比 競 較

【比】二物を並べて、その差違を見ること。

「色の濃淡を比べ見る」「比例」「比較」

【競】優劣勝負を試みること。「競争」「力

競」

【較】比と競との二義を兼ねてゐる。

くるしむ 苦 困 窘

【苦】「にがし」と訓む字で、なやみ苦しむ

ことに用ひる。「苦辛」「苦痛」

【困】難儀をすることである。「貧困」「困

窮」「困難」苦は局部的身體的であるが、

用ひて、「力を食む」「食邑」などとも

いふ。又「言を食む」は、約束を守らぬ

ことである。

【喫】實際物を口中に入れて食ふこと。「飯

を喫ふ」又「棒を喫ふ」は打たれるこ

とで、「一驚を喫す」は、肝を潰すことで

ある。

【吃】「どもり」が本義であるが、喫と音が

同じいので、それと通用する。「吃驚」

【茄】噛み砕いて、その汁を吸ふこと。

【啖】大に食ふこと。「健啖」

【噉】啖と同義。音タン。

【餐】元來熟食のことで、湯漬飯を「餐

困は全體的精神的である。

【窘】進退自由ならぬこと。「窘窮」「窘迫」

くろし 黒 玄 黔 緇 黢 黝 涅

【黒】白に對する字で、意廣し。

【玄】赤味を帯びた黒色。又深遠にして暗

黒なること。「天地玄黄」「幽玄」

【黔】頭髮の黒き色。「黔首」は人民のこと

で、その頭髮の色からいふのである。

【緇】染色の黒いこと。「緇衣」は「すみぞ

めのころも」で、即ち僧衣である。

【黢】煤のやうに黒いこと。「黢牛」は黒牛

である。

【黝】青黒いこと。音イウ。

【溼】黒い土をいふ。「溼齒」は、齒を黒く染めること。

ケの部

けがる(けがす) 汗 汚 穢 瀆 褻

【汗】もと「どぶ水」のやうな不潔な水のこと、見苦しい、わるい、きたない意に用ひる。「汗俗」「汗世」

【汚】汗に同じ。

【穢】畑に雑草が生じて、荒れることで、むさくきたない意である。「穢徳」「穢行」などと連用して、汗よりは意が重い。

【瀆】「どぶ」「みぞ」と訓む字で、轉じて、

コ子の部

こ子 兒

【子】親に對する字で、老少に關係はない。「親子」「父子」

【兒】「こども」の意である。「兒童」「幼兒」

こけ 苔 蘚

【苔】「こけ」の總名、巖石、屋瓦、樹木等に生ずるもの。

【蘚】陰地の苔。

こころむ 試 嘗 驗

【試】汎く用ひる。「試験」「試作」「考試」

【嘗】「なむ」と訓む字で、少し食つて味を

けがす意になる。「瀆職」は職務の上、不義をなすこと。

【褻】もと膚につける衣服をいふ。なれけがすこと。「褻瀆」「猥褻」

けす 消 銷

【消】物事を減じ盡すこと。「火を消す」「消滅」

【銷】とかし散らすこと。史記に「積毀骨を銷す。」「銷魂」

けづる 削 刪

【削】けづり去ること。「削除」「削滅」

【刪】けづり改めとこと。「刪定」「刪改」

みること。一寸ためすこと。

【驗】試みた上の結果をいふ。「實驗」「經驗」「按驗」

こころよし 快 慳

【快】氣持のよいこと。

【慳】十分に心に満足すること。

こたふ 答 對 應

【答】問の反對で、先方の言ふことを受け、返事をする事。「答案」「返答」

【對】人の問に對して、一々道理を明にして返事すること。目上の人に答へること。孟子に「王曰く、叟千里を遠しとせずして來る。亦以て吾が國を利するあら

んとするか。孟子對へて曰く、王何ぞ必ずしも利を曰はん。亦仁義有るのみ。」

【應】先方の問に對して、簡單に、一言一句にて返事すること。孟子に「沈同、孟子に問うて曰く、燕は伐つべきか。吾、これに應へて曰く、可なりと。」

ことごとく 悉 盡 畢 殫 咸

【悉】一つ一つ數へて、残らずの意。前出師表に「宮中の事、大小となく、悉く以て之に咨ひ、以て然る後に施行す。」

【盡】ありたけを一括して残さぬ意、史記に「乃ち盡く其の禁方を取りて、扁鵲に與ふ。」

このむ 好 喜 樂

【好】惡憎の反對で、心にすくこと。「徳を好む。」「釣を好む。」

【喜】喜んでゐること。「喜みて人を陷害す」は、人を罪惡に陥れて喜んでゐること。

【樂】樂み好むこと。論語に「禮樂を節することを楽しみ、人の善を道ふことを楽しみ、賢友多からんことを樂むは益なり。」樂字「このむ」の時、音は「がう」である。

こひねがふ 冀 希 庶幾

【冀】請ひ願ふの意で、熱心に、その事を願ひ望むのである。「冀望」

★コ の 部

【畢】「あみ」といふ字で、漏れ残すことのない意。史記に「天下の遺文古事、畢く集まらざるなし。」「同軌畢く至る。」

【殫】盡と略同義、單とも書く。

【咸】どれもこれも皆の意。

ことごとく 殊 特 異

【殊】「別段に」の意である。易に「天下歸を同じくして、塗を殊にす。」

【特】「取り分けて」の意で、多くの中からその一つを取り難しといふのである。戰國策に「特に強を以て之に服するのみ。」

【異】同の反對で、事物の相違してゐること。「甲と乙とは、性質を異にす。」

【希】「まれ」とも訓む字で、珍しがつて願ひ望む意。「希望」

【庶幾】「ちかし」とも訓む字で、かくなれば仕合なりとの意である。冀、希よりは意が弱い。詩經に「庶幾はくは、夙夜以て永く譽を終へん。」孟子に「吾が王、庶幾はくは疾病なからんか。」又庶と幾と一字で用ひるも同義である。

こふ 請 乞 丐

【請】眞情を以て願ひ求むること。「どうぞ」と敬していふ意がある。「老を請ふ。」は、退隱を願ふこと。「請暇」は、いとまを願ふことである。

【乞】乞ひ求めることで、先方を敬して、伺ひ問ふ意は無い。

【丐】乞と同義。音カイ。

こぼす(こぼる) 溢 零

【溢】水があふれてこぼれること。音イツ。

【零】露や涙などの、滴をなしてこぼれること。

こぼり 氷 冰 凍

【氷】氷の俗字。

【冰】「こぼり」と訓んで、名詞に用ひる。

【凍】「こぼる」と訓んで、動詞に用ひる。

「風凍る。」「川凍る。」「凍死」

こも 菰 藁

惟 諸 崩

【此】彼に對する字である。孟子に「彼も一時なり、此も一時なり。」従つて、手近にある物や處を指示する。「此の本。」「此の口。」

【是】非に對する字で、ある事柄や道理をよしと定めて指すのである。孟子に「傷ひなきなり、是乃ち仁術なり。」「其の聲を聞いて、其の肉を食ふに忍びず。是を以て、君子は庖厨に遠ざかる。」或事物事を切に指さず、汎く指していふ。孟子に「天の將に大任を是の人に降さんとするや。」論語に「夫子の是の邦に居るや、

【菰】「まこも」水草の名である。

【薦】粗く織つた蓆。菰で作つたのにも、藁で作つたのにもいふ。

こゆ 越 超 踰 逾

【越】ふみ越える意で、物事の限界、山川などを越えるのは、皆この字である。

【超】躍つて、飛びこえること。孟子に「泰山を挾んで、北海を超ゆ。」車に飛び乗ることを「超乗」といふ。「超越」「超然」

【踰】「またぎにこえること。」垣を踰ゆ。「月を踰ゆ。」「踰越」

【逾】踰に同じ。

これ(この) 此 是 之 斯 茲 維

必ず其の政を聞く。」音シ、ゼは誤。

【之】此と是との二義を兼ねて汎く用ひるが、意は浅い。孟子に「此を、之大丈夫と謂ふ。」韓文に「博愛之を仁と謂ふ。」

【斯】深く指す所あつていふ字で、此。是よりも意は重い。論語に「斯の人に於て斯の疾あり。」「予將に斯の道を以て、斯の民を覺さんとす。」

【茲】此と同義で強い。書經に「茲を念へば茲に在り。」又このやうにしての意。「文を學ぶこと茲に十年。」

【維】書經に多く用ひてある字で、今日では専ら儀式的の文に用ひる。

【惟】 維と同義。

【諸】 之於の二字が結合した意を持つてゐる字で、漢文では「之を……に。」といふ時に用ひる。邦文には必要がない。

【旃】 之と略同義。音セン。

ころ 頃 比

【頃】 「そのをり」「その時分」の意で、現在から過去に遡つていふ。

【比】 「ころほひ」と訓んで、連続して、その時まで及ぶ意がある。「三年に及ぶ比ほひ、民をして足らしむべし。」

ころす 殺 誅 戮 弑

【殺】 生物の生命を取ることである。

【誅】 その者の罪惡を數へて殺すこと。

【戮】 その罪を數へ、見せしめの爲に殺すこと。

【弑】 臣子たる者が、君父を殺すこと。

㊦の部

さいはひ 福 幸

【福】 禍の反對で、仕合よく、めでたきこと。書經に「天道は善に福し、淫に禍す。」

【幸】 思ひがけなき仕合。中庸に「小人は儉を行ひ、幸を徵む。」

さかづき 杯 盃 盞 觥 觥 爵

卮

【杯】 もと木を曲げて造つたものであるが、今は磁器のものをも稱する。

【盃】 杯の俗字。

【盞】 小杯で、所謂「猪口」のことである。

【觥】 角製の杯で、小なるもの。音シヤウ。

【觥】 觥の大なるもの。音クワウ。

【爵】 「すすめ」と訓む字で、小鳥の形に造つて、足のある杯。禮式に用ふ。容量一升

【卮】 容量四升を容るる丸き杯。音シ。

さかひ 境 界 疆

【境】 「しきり」の内の場所をいふ。「仙境」

「佳境」「境内」

【界】 「しきり」「さかひす」の意。「境界」と連用する時は、多くは界の意である。

【疆】 國と國との界の土手である。孟子に「疆を出づるに、必ず質あり。又故あつて去らば、君、人をして之を導いて疆を出でしむ。」「封疆」「疆域」

さからふ 忤 逆

【忤】 心にさからふこと。氣にくわぬこと。「至言耳に忤ふ。」音ゴ。

【逆】 順の反對で、真正面から、さからふこと。「叛逆」「逆風」轉じて「むかふ」とも訓む。「逆へ撃つ」

さかり 盛 隆 熾 昌 壯

【盛】 衰の反對で、さかりの最中である。

「盛大」「盛觀」「盛世」

【隆】 汗又は替の反對で、だんだん高くなり、さかりになること。「隆盛」「興隆」

【熾】 火が盛んに燃え上ること、威勢のすさまじきをいふ。「熾烈」

【昌】 次第に明になりゆくこと。「繁昌」「隆昌」

【壯】 氣力のさかなること。「雄壯」「壯健」「壯觀」

【前】 後に對する字で、事物の順序にも、時間の區別にも用ひる。「前軍」「前進」

【先】 前 先 往 曩 嚮 向

【割】 刃物で切りさくこと。「鶏を割く。」

又「地を割いて與ふ。」

【剖】 真中から切り開くこと。「腹を剖く。」

「符を剖きて功臣を封す。」音バウ。

【劈】 斧等で二つに切りさくこと。音ヘキ。

【擘】 手で引きさくこと。音ハク。

【探】 先方の様子の知れぬものを窺ひ求める意。「探檢」「探偵」「探究」

【搜】 見えなくなつたものを探し求める意。「搜索」「搜查」ソウと讀む時は「亂る」の意

【索】 搜と同義。

【裂】 裂く。

【割】 刃物で切りさくこと。「鶏を割く。」

又「地を割いて與ふ。」

【剖】 真中から切り開くこと。「腹を剖く。」

「符を剖きて功臣を封す。」音バウ。

【劈】 斧等で二つに切りさくこと。音ヘキ。

【擘】 手で引きさくこと。音ハク。

【探】 先方の様子の知れぬものを窺ひ求める意。「探檢」「探偵」「探究」

【搜】 見えなくなつたものを探し求める意。「搜索」「搜查」ソウと讀む時は「亂る」の意

【索】 搜と同義。

「前年」

【先】 前と同じ。「先鋒」「先例」「先日」

【往】 時の上で、過去のことのみ用ひる。「往時」「往年」

【曩】 過去の久しいこと。略往と同義。「曩昔」

【嚮】 過去の久しいこと。略往と同義。「曩昔」

【嚮】 「さきほど」の意。往・曩よりは近しく、列子に「侍御なほ嚮者(さき)の人のごとく、坐する所なほ嚮者の處のごとし。」

【裂】 ひきさくこと。晏子に「其の衣を裂き、其の帯を斷つ。」「帛を裂く。」「紙を裂く。」

【割】 刃物で切りさくこと。「鶏を割く。」

又「地を割いて與ふ。」

【剖】 真中から切り開くこと。「腹を剖く。」

「符を剖きて功臣を封す。」音バウ。

【劈】 斧等で二つに切りさくこと。音ヘキ。

【擘】 手で引きさくこと。音ハク。

【探】 先方の様子の知れぬものを窺ひ求める意。「探檢」「探偵」「探究」

【搜】 見えなくなつたものを探し求める意。「搜索」「搜查」ソウと讀む時は「亂る」の意

【索】 搜と同義。

【摸】 手さぐりをする事。「暗中摸索」

【號】 大音に呼ばはる。「號令」「怒號」

【叫】 聲の限りさけぶ。「絶叫」「叫喚」號と大差がない。

【奉】 両手を高くさし上げて、物を受けること。

【捧】 奉と同義、今は専らこの字を用ひる。

【擎】 高くさし上げて持つこと。宋史に「一柱天を擎ぐ。」音ケイ。

【挾】 両方から、はさみ持つこと。又腋の

【挟】 両方から、はさみ持つこと。又腋の

【挿】 両方から、はさみ持つこと。又腋の

【挿】 両方から、はさみ持つこと。又腋の

【挿】 両方から、はさみ持つこと。又腋の

下に抱へること。孟子に「泰山を挟みて、北海を超ゆ。」無形のことにも用ひる。史記に「強秦の強を挟みて、内その主を劫かす。」「貴を挟む。」

【夾】 挟と同義だが、腋ばさむ意はない。「夾撃」

【挿】 さし込むこと。田植を「挿苗」といひ、生花を「插花」といふ。

さす 刺 指 螫

【刺】 とげ、針・劍・槍などにて、つきさすこと。「刺殺」「刺客」シの音もある。

【指】 ゆびさすこと。「指示」

【螫】 蟲がさすのである。音セキ。

【覺】 目が覺めたやうに、知らぬ事が、サッパリと明になること。「了覺」「覺得」

【悟】 迷ひがさめて、心の方から自然と合點するやうになること。「頓悟」「悟入」

【喻】 わが心をよく呑み込むこと。又「さとす」と訓む時は、人に物を合點するやうに諭すこと。論語に「君子は義に諭り、小人は利に諭る。」

【曉】 夜が明けたやうに、明になること。だんだんにさとの意と、隅々まで明な意とがある。「通曉」「曉悟」

【了】 さとり了ること。「了悟」「了解」

さむ 覺 醒 寤 褪 冷

さだむ 定 奠

【定】 物事のきまりをつけること。然るべき位置に安んじ置くこと。「決定」「定住」「論定」

【奠】 定と同義なれども、今は都を定めることの外は用ひない。「奠都」

さとし 聰 敏

【聰】 耳の力のさといことで、何事を聴いても、直にその理を聞きわけること。「聰明」

【敏】 鈍の反對で、心の働きのすばやいこと。「穎敏」「敏才」

さぐる 覺 悟 諭 曉 了

【覺】 目のさめることで、眠から起きること。又迷からさめること。

【醒】 酒の酔からさめること。又眠からさめ、迷からさめることにも用ひる。「覺醒」

【寤】 半ば目がさめること。迷のさめる方には用ひない。「寤寐」

【褪】 色のあせ衰へること。

【冷】 熱が失せて、次第に冷えること。

さらす 晒 曝

【晒】 色を白くする爲に、水で洗つて口に乾かすこと。又むきだしに世間一般に知らせること。「恥を晒す」「業を晒す」

【曝】 戶外こけいに置いて、雨風あめかぜに當あてること。

さらふ 溲 攫

【溲】 川かは・溝みぞ・井戸みどなどの土沙どしを掘ほり上げて

底そこを深ふかくすること。「浚溲しゅんせつ」

【攫】 不意ふいに奪うばひ取とること。音クワク。

さる 去 距 違

【去】 來らいの反對はんたいで、其その場ばを退のきて他たへ行ゆ

くこと 又また其その場ばから取とり除のぞくこと。「郷きやう

國こくを去さる。「妻つまを去さる。」

【距】 里程りてい又は年月ねんげつの相隔あひはたたること。「横よこ

濱はまは、東京とうきやうを距とること七里り。」

【違】 くひ違ちがつて、離はなれ去さること。中庸ちゆうように

「忠恕道ちゆうじゆどうを違ちがふこと遠とほからず。」

の部

しかり 然 爾

【然】 「その通り」と許諾きよたくの意いを示しす字じで、

最もつとも廣ひろく用もちひる。

【爾】 「この通り」と、自じ分ぶんの方ほうに重おもきを置お

いていふ字じである。

しかる 叱 呵

【叱】 聲こゑを勵はげまして言いふこと。「叱咤しつた」「叱しつ

責せき」

【呵】 叱しつに似にて、意いやや輕かろし。「呵止かし」「呵か

罵は」

しきりに 頻 荐 連 切 累

さわぐ 騒 譟 噪 躁

【騒】 ガヤガヤ音おとを立てたてて亂らん雑ざつになるこ

と。「騒亂さうらん」「騒擾さうぜう」「騒動さうどう」

【譟】 人言じんごんの喧かまひしきをいふ。音サツ。

【噪】 鳥とりや蟲むしなどの群ぐらり鳴なぐこと。「鴉鳴あめい

蟬せみ噪さう」「喧けん噪さう」

【躁】 氣きせはしく、落おちつかぬこと。「躁急さうきふ

躁狂さうきやう」

さを 竿 棹 篙

【竿】 竹たけの枝葉しえふを去さつたもの。意い廣ひろし。

【棹】 舟ふねを行やるに用もちひる竿さな。

【篙】 棹さなに同おなじ。「篙師かやし」は船頭せんとうのことで

ある。

【頻】 「おひかけおひかけ」の意い。「警報頻けいほうしん

りに至いたる。」「頻繁びんはん」

【荐】 いやが上に重かさなりつづく意いで、多おほくは

禍災くわさいなどの引續ひきつづき至いたるに用もちひる。左傳さでんに

「不虞荐ふぐしきりに至いたる。」音おんセン。

【連】 引續ひきつづいて、間まの切きれぬ意い。史記しきに「連しん

りに漢かんと戰たたかふ。」「連戰連勝れんせんれんしやう」

【切】 心こころにひしと思おもふこと。「切しきりに故郷こきやう

の母ははを思おもふ。」

【累】 かさねがさね、たたみかけて續つづく意い。

「累しきりに中書監ちゆうしゆかん、錄尚書事ろくしやうしよじに遷うつる。」「累るん

年ねん」「累代るんだい」

しる 布 敷 播 鋪

【布】 地に物をしくこと。轉じて無形の上にも用ひる。「教を布く。」「政を布く。」「公布」「流布」

【敷】 布と同義。「敷告」「敷衍」 書經に「謹んで五教を敷き、寛に在れ。」

【播】 もと種を蒔くこと。轉じて廣く言ひ觸らすこと。楚辭に「名を天下に播かんと欲す。」「播告」

【鋪】 しきつらねること。音ホ。

しげし 繁 蕃 茂 稠 滋

【繁】 簡の反對で、多くして文彩の入り難たる意。又文彩無くても、ゴタゴタと多きをいふ。「繁多」「繁雜」「其の繁に勝

遵 率 遜

【順】 逆の反對で、物事の成行順序に逆はぬこと。「上、天心に順ひ、下、民望に従ふ。」「順風」「孝順」「柔順」

【從】 違の反對で、先方につきしたがつて、違はぬこと。「己を捨てて人に從ふ。」「龍雲に從ふ。」「服從」「盲從」

【隨】 從行の義で、先方の意のままになつて從ふこと。「夫唱へ、婦隨ふ。」「隨意」

【循】 不動の事物に寄り添うてゆく意。「牆に循うて走る。」は、牆の側に傍うて走ることである。近思錄に「この理は天命なり。順つて之に循ふは道なり。之に

へず。」「

【蕃】 草がしげつて多くなる意。故に「蕃殖」と連用す。

【茂】 草木のしげりて盛んなる意。但、蕃は衆草の上にいひ、茂は一木一草の上にいふ。「茂樹」又盛んなる意より、才徳の上にも用ひて、秀才を「茂才」ともいふ。

【稠】 稀の反對で、隙間もなくしげきこと。「人家稠密」

【滋】 蕃と似てゐるが、蕃は數の殖えること。滋は廣がる意である。水の潤が廣がる意より來る。「苔滋し。」

したがふ 順 從 隨 循 徇 殉

循つて之を修め各、その分を得るは教なり。

【徇】 身を顧みないで、その事につき従ふこと。「欲に循ふ。」は、欲の爲に身を盡すことである。論語憲問篇の朱註に「君子は天理に循ふ。故に日に高明に進む。小人は人欲に徇ふ。故に日に汗下に究まる。」

【殉】 徇に同じ。「殉死」

【遵】 その事を法規として、その通りにする意で、略循と同じ。小學に「聖法に遵ひて此の篇を述ぶ。」孟子に「先王の法に遵ひて過つ者は、未だ之れ有らざるな

り。「遵奉」「遵守」又孟子に「海に遵つて、南、琅邪に放る。」とあるは、全く循と同じである。

【率】遵と同意。中庸に「性に率ふ、之を道と謂ふ。」

【遜】謙讓にして、はりあはぬこと。論語に「邦、道有れば、言を危くし行を危くす。邦、道無ければ、行を危くし言遜ふ。」

しづかに 静 閑 徐 謐 寂寞

寥 闕

【静】動の反對で、動かぬこと。又躁の反對で、騒がしからぬこと。「静止」「平静」「静肅」

【閑】忙の反對で、ひまな事。「閑雲野鶴を友とす。」「閑窓」「閑静」

【徐】疾の反對で、言語動作がゆつたりしてゐて、急速ならぬこと。「徐歩」「徐言」

【謐】安らかに静な事。「天下静謐」

【寂】もの静にして、さびしい程のこと。「閑寂」「寂静」

【寞】物音が無く、さびしい事。「寂寞」

【寥】寂寞に同じ。「寂寥」

【闕】寂寞に同じ。「闕寂」

しづむ 沈 湮 湮 鎮

【沈】浮の反對で、有形無形に通じて、沈く用ひる。「沈没」「沈沈」「沈思黙考」

「沈吟」

【湮】水にしづむ、又ふける。「酒色に沈湮す。」

【湮】うもれしづむ。ほろび失せる意あり。「湮散」「湮滅」

【鎮】治め安んずること。「亂を鎮む」「火を鎮む。」「鎮定」「鎮壓」

しぬ 死 崩 殂 薨 卒 沒 歿

夭 歿

【死】生の反對で、動植の別を問はず、一切生物の生命を失ふこと。「草木枯死す。」「鳥獸斃死す。」「病死」「戦死」

【崩】天子の死をいふ。崩はもと山のくづ

れることであつて、天子の死の重大なるに喩へていつたものである。「崩御」

【殂】「ゆゝ」といふ意の字で、これ亦帝王の死をいふ。書經に「帝乃ち殂落す。百姓考妣を喪ふが如し。」

【薨】貴人の死。三位以上。「薨去」

【卒】四位五位の人。又他人の死を尊んでいふ。「卒去」

【沒】物が水中に入り込む意味から、人が死んで世に居ないことをいふ。多少尊敬の意がある。

【歿】沒に同じ。

【夭】若死すること。「夭折」

【歿】 夭に同じ。

しばしば 屢 數 亟

【屢】 每每、その度毎の意。論語に「人に禦るに口給を以てすれば、屢人に憎まる。」又「回や、それ庶からんか。屢空し。」

【數】 煩はしい程度重なること。論語に「朋友に數すれば、斯に疏んせらる。」「煩數」「頻數」

【亟】 急亟と連用して、せはしく迫るやうに度重なること。左傳に「共叔を愛して之を立てんと欲し、亟武公に請ふ。」孟子に「亟問ひ、亟鼎肉を餽る。」音キ。

て酒を飲ます。

【誣】 理非曲直を言ひ曲げること。「誣告」は、無實の訴へである。

【罔】 誣と略同義。こじつけること。論語に「君子は欺くべし。罔ふべからざるなり。」「誣罔」

しほむ 萎 凋

【萎】 生氣が衰へて、皺がより、縮まること。「花が萎む」「萎縮」

【凋】 生氣が無いこと。枯れること。萎のやうに皺み縮まる意は無い。論語に「年寒くして、然る後に、松柏の凋むに後るを知る。」「凋落」「凋稿」

しばらく 暫 姑 且 須臾 頃刻

【暫】 時の上でいふ。「チヨツトの間。」の意。中庸或問に「世を驚かし、俗を駭かすの事は、暫くすべくして、常と爲すことを得ず。」「暫時」

【姑】 事の上でいふ。「マアマアチヨツトその儘に。」の意。孟子に「姑く汝の學ぶ所を舍きて我れに従へ。」

【且】 姑と略同義。

【須臾】 極めて少時間。

【頃刻】 須臾に同じ。

しふ 強 誣 罔

【強】 力で無理に押しつけること。「強ひ

しりぞく 退 斥 屏 卻 黜

【退】 進の反對で、自ら後へ下ること。又他を下らせること。「退卻」「辭退」

【斥】 人を拂ひのけること。唐書に「君子に親み、小人を斥く。」「擯斥」「排斥」

【屏】 その場を去らせること。斥と略同義であるが、やや緩である。「人を屏けて與に語る。」「群小の曲説を屏く。」

【卻】 受けつけないこと。又退と同義。「暑と雨とを卻くる者は蓋なり。」「且戰且却く。」却是卻の俗字である。

【黜】 陟の反對で、官位を下げられること。又その位置からしりぞけること。「柳下

惠、士師となりて、三たび黜けらる。「免黜」「貶黜」

しるし 知識

【知】深く事物の本性、内部までも知るこ
とである。「士は己を知る者の爲に死す。」

【識】「見覺がある。記憶してゐる。」位
所で、知よりは浅い。「某氏を知る。」と

いへば、その人物性行まで、よく知つて
ゐること。「某氏を識る。」といへば、そ

の人を覺えてゐるといふこと。「一面識
あり。」

しるし 證據 徵 驗 兆

【證】證據となる物。

りけのない、むきだしなことをいふ。「素

樸」「質素」

【皓】光澤のある白色で、白よりは意が狭

い。「皓々」と疊用して、月雪の形容に
用ひる。

スの部

すくなし 少 寡 鮮 眇

【少】多の反對で、數量の少いこと。用法

最も廣い。

【寡】衆の反對で、人數の少いこと。孟子

に「寡は、固より以て衆に敵すべからず。」
又轉じて分量の少いことにも用ひる。「寡

【徵】物事の引合せになるもの。證と略同

義。論語に「夏の禮は、吾能く之を言へ
ども、杞は徵するに足らざるなり。」

【驗】「ききめ」である。藥や祈禱などのし
るしをいふ。「效驗」

【兆】事物の起らうとする前じらせ。「兆
候」「前兆」

しるし 白 素 皓

【白】黒に對する字で、しろい色の總稱。

又轉じて明なる意、潔き意にも用ひる。

「白玉」「白雪」「白晝」「潔白」

【素】もと染めない絹のことで、本質のま
ま白いことをいふ。それから轉じて、飾

欲」「寡徳」

【鮮】極めて少いこと。論語に「巧言令色、

鮮いかな、仁。」

【眇】鮮と同義。

すくふ 救 拯 濟 援

【救】助け護つて、安全ならしめること。

「火を救ふ。」「救助」「救護」「救拯」

【拯】引き上げて助ける意。孟子に「民を

水火の中より拯ふ。」「溺るるを拯ふ。」

【濟】「わたす」と訓む字で、助けて渡らせ
る意である。廣く天下を相手にしていふ。

「道は天下を濟ふ。」「救世濟民」

【援】引き寄せて助けること。又力を分け

て助けること。孟子に「嫂溺るれば、之を援ふに手を以てす。」「援助」「後援」

すすぐ 漱 雪 澣

【漱】 口を洗ひ清めること。「盥漱」は、手

水を使ひ、口をすすぐこと。

【雪】 清めること。重に汚名を除くことに

用ひる。「恥を雪ぐ。」「雪辱」「雪冤」

【澣】 衣服を洗濯すること。

すすむ 進 前 漸 晉 薦 羞 勸

奨

【進】 退の反対で、前方へ出ること。又前

方へ差出すこと。「進行」「進歩」

【前】 前方へ出ること。進に似て弱い。史

「奨勵」

すつ 棄 弃 拵 捨 舍 捐 委

釋 遣

【棄】 役に立たぬものとして、うつちやる

こと。孟子に「甲を棄て、兵を曳いて走

る。」「兒を棄つ。」「放棄」

【弃】 棄の古字。

【拵】 同上。

【捨】 構はずに、そのまま捨て置くこと。

「取捨」「用捨」

【舍】 捨と音義同じ。論語に「犁牛の子も、

辭くして且つ角あらば、用ふること勿ら

んと欲すと雖も、山川それ諸を捨てん

記に「夜半に至り、文帝席を前む。」

【漸】 いつの間にか、だんだん進むこと。

詩説約に「諸侯、周の澤を被りて、善に

漸む。」

【晉】 日がジリジリと昇る義で、進と同義

に用ひる。晋は晋の俗字。

【薦】 もと神に物を奉ること。轉じて人に

物を進上し、人物を推舉するにも用ひる。

左傳に「鬼神に薦むべく、王公に羞むべ

し。」「推薦」

【羞】 食物を馳走すること。「膳羞」

【勸】 説きすすめること。「勸誘」「勸告」

【奨】 ほめ上げて、勵ますこと。「推奨」

や。

【捐】 棄と略同義。役に立たぬものとして、

他に片付けて置く意。「金を山に捐つ。」

「義捐金」

【委】 先方に任せ置いて、此方では構はぬ

意。「溝壑に委てて顧みず。」

【釋】 手に持つてゐる物を、手から離すこ

と。「巻を釋つること能はず。」

【遣】 置きざりにする、取り残すの意。「遣

棄」

すでに 既 已 業

【既】 過去の辭である。「軍隊既に河を渡

る。」といへば、軍隊全部が渡りきつてし

まつたこと。

【已】「未だ」の反對で、過去から現在にか
かる辭である。「軍隊已に河を渡る。」と
いへば、軍隊の一部が、もはや渡りかけ
たこと。

【業】「もはや、さうなつた上は」の意。史
記に「張良、業に爲に履を取る。因つて
長跪して之を履かしむ。」とあるのは、張
良が、もはや老人の爲に履を取つてやつ
た以上は、それで手を引いてしまふ譯に
行かず、跪いて履を穿かしてやつた。の
意である。

すなばち 則 卽 乃 便 輒 迺

【便】「そのまゝ、たやすく」と譯して、略
卽と同義である。「便ち之を殺す。」は、
手早く殺してしまふこと。

【輒】「その度毎に」の意。史記に「女孫
五たび嫁して、夫輒ち死す。」

【迺】乃と同義。

すふ 吸 吮

【吸】呼吸の吸で、息をすひ込むこと。口
でも鼻でも構はない。「呼吸」「吸入」

【吮】口を當てて物をすふこと。「膿を吮
ふ。」

すべて 總 凡 都 渾

【總】絲を束ねる意から轉じて、概括の意

【則】俗に「レバ則」といふ字で、漢文中
に在つては、多く「何々すれば。」と訓む
下に来る。國語では「は」「ば」などに當
る字である。論語に「弟子入りては則ち
孝、出でては則ち弟。」とある。「戦へば
則ち必ず勝ち、攻むれば則ち必ず取る。」
【卽】「とりもなほさず」の意。「性は卽ち
理なり。」「人を殺せる者は卽ち彼なり。」
又「ちぎに」「すぐに」の意。「急電に接
するや、卽ち歸國の途に就く。」「卽時」
「卽題」

【乃】「そこで」と譯す。「降雨に逢ひて乃
ち止む。」

に用ひる。

【凡】おしなべて、大概の意。

【都】主府の意から轉じて、皆寄せ合せる
意。全體悉くの意。

【渾】都に似てゐる。「ひとまとめにして」
の意。音コン。

すみやか 速 亟

【速】遅の反對で、グズグズせぬこと、隙
取らぬこと。「兵は拙速を貴ぶ。」「速達
郵便」

【亟】急にすること、速よりも意は強い。
「必ず亟に之を去れ。」「此の場合音キヨク

すむ 住 棲 栖

【住】止まる意で、人の居所を定めること。「住居」「住宅」

【棲】假にすむこと。又禽獸蟲魚などが、その巢穴に居ること。「棲息」

【栖】棲に同じ。

すむ 清 澄 濟

【清】濁の反對で、他物が混合せず、清らかなこと。「清水」「清流」「清酒」

【澄】透明なさまである。清は水の動靜には關しないが、澄は多くは靜かな場合にいふ。「澄潭」「澄空」

【濟】物事がしまひになること。「皆濟」「返濟」

【攻】武器を以てせめること。轉じて人を非難することにも用ひる。論語に「己の悪を攻めて、人の悪を攻むることなかられ。」「城を攻む」「攻撃」

【責】人の罪過を咎めること。又、他を督促すること。「宋、多と賂を鄭に責む」は督促する意である。「叱責」「譴責」

【譴】言葉の上で、嚴しく叱りつけること。「讓」事の仔細を問ひ糺して咎めること。「數」罪過を一々數へ立てて責めること。

【讓】

ㄩの部

そこなふ 傷 殘 害 賊 損

★セーソの部

セの部

せまる 逼 薄 迫

【逼】物事が間近く接近すること。「眞に逼る。」は、晝などが、眞物と殆んど同じやうなるをいふ。「逼迫」

【薄】「うすし」と訓む字で、物薄ければ、透間もなくピツタリとせまるからいふ。逼に似て意や異なる。逼は現にせまつてゐる意で、薄はだんだんせまる意がある。「肉薄して城を攻む。」

【迫】急にせまる意あり。「急迫」「切迫」

【傷】きずつけること。「傷寒」は、寒氣に身體をいためられることである。「傷害」

【殘】人を殺し、又傷つくること。「殘害」「殘賊」

【害】物事の不利をなし、又は破壊すること。「妨害」

【賊】ひそかに害すること。論語に「夫の人の子を賊ふ。」孟子に「義を賊ふ者、之を殘といふ。」

【損】いためやぶること。「毀損」「損害」

刺 毀 誚

【非】心の中で、他を是認せぬこと。「聖

人を非る。」は、おのが意見と相違するの
で、之れを見下げること。

【誹】 非の言語に表れたので、他を非難す
ること。

【謗】 人の陰口を言ふこと。「誹謗」

【訕】 謗と同義。禮記に「人臣たるものは
諫むることあるも訕ることなし。」音サン

【訾】 もと疵といふ字で、強ひて疵を見つ
け出してそしること。禮記に「衣服成器
を瞥ること母れ。」音シ。

【詆】 相手に對抗して、そしり辱めること。

【譏】 他の過失缺點を咎めそしること。蘇
軾の韓文公廟碑に「書を作りて佛を詆り、

瀉

【澆】 トバシリのそそぎかかること。史記

に「五歩の内、相如請ふ、頸血を以て大
王に澆ぐを得ん。」音セン。

【洒】 水を庭などに打つこと。少しづつ撒
き散らすのである。詩經に「洒がす、掃
はず。」とあつて、洒掃と連用する。

【沃】 柄杓などで、ザブリと水を酌みかけ
ること。「湯を雪に沃ぐが如し。」

【澆】 沃と同義。音ゲウ。

【灌】 水を流し込むことで、草木に水をや
ることにもいふ。莊子に「百川海に灌ぐ。」

【溉】 溝を作つて田地などに水を引き入れ

★ソの部

君王を譏る。」

【刺】 美(ほむ)の反對で、先方の心に針で
刺される如く感ずるやうに、あてこすり
、そしること。「譏刺」「諷刺」

【毀】 譽の反對で、相手の名譽を損するや
うに、針小棒大にしてそしること。

【誚】 他の善い事をけなすこと。音セウ。

そそぐ 注 瀉 澆 洒 沃 澆 灌

溉

【注】 水路を通じて一筋に流し入れるこ
と。又酒などをつぎ込むこと。「注入」

【瀉】 一時にドツとそそぐこと、注に似て
一層強く急である。「瀉千里の勢」「吐

ること。史記に「漢水を引いて、鄴に溉
ぐ。」「灌溉」

そなふ 具備 供

【具】 不足の無いやうに整ひ揃ふこと。「完
具」

【備】 未來の事に對して、豫め支度して置
くこと。「萬一に備ふ」「準備」

【供】 用に立てること。又神佛などにそな
へ物をする事。「供給」「供物」

その 其 厥

【其】 物を指す辭で、最も普通に用ひられ
る。

【厥】 其の古字で、古文に多く用ひたが、

今は韻文の外餘り用ひない。音ケツ。

そふ 添 副 沿 傍 貳

【添】益し加へること。「添加」「添付」

【副】一方の足らざるを補ひ助くる意。「副使」「副將」「副産物」

【沿】つき従つてゆく意。「海に沿ふ」「山に沿ふ」「沿岸」「沿線」

【傍】そばに寄りそふこと。「花に傍ひ柳に随つて前川を過ぐ。」

【貳】「かけがへ」のこと。太子を儲貳といふは、君のかけがへの意である。

そむく 叛 畔 背 倍 反 乖 負
【叛】離れそむくこと。史記に「俊傑相立背く。」

夕の部

たかし 高 崇 喬

【高】下・卑・低の反對で、有形にも無形にも廣く用ひられる。「高山」「高貴」「高恩」

【崇】山の嶮しく高いことで、極高の義である。用法は狭い。「崇高」「崇敬」

【隆】中央が高いことである。天の形を「穹隆」といひ、鼻の高きを「隆準」といふ。

【喬】細くして高きこと。「喬木」「喬岳」
たがひに 互 遞 迭

つて侯王となり、秦に叛く。「謀叛」

【畔】叛と同義。史記に「法令刻深、燕に畔かんと欲する者多し。」

【背】向の反對で、振りすてること。「師保の訓に背く。」

【倍】背と同義。「帥死して遂に之に倍く。」

【反】ヒツクリ反つてそむく。「反抗」「違反」

【乖】物にさからひ違ふこと。「乖戾」「乖離」

【負】前に在る物を後にする意味で、恩にそむき、徳を忘れること。李陵の書に「李陵漢室の恩に負くと雖も、漢室も亦徳に

【互】互に入り込み、食ひちがひになつてゐること。「漁歌互に答ふ」「相互」「交互」

【遞】其の次其の次と承けて續くこと。「遞送」「遞下」「傳遞」

【迭】その跡へ出で、その跡へ出で、互に入りかはること。「迭に興り迭に衰ふ。」

【更迭】
たがふ 違 差 爽 升

【違】離れ去る意の字で、大にちがつてゐること。「違約」「相違」

【差】一致せぬことで、少しくちがふこと。「差別」「差額」

【爽】 差に近し。音サウ。

【升】 錯の意で、誤り違ふこと。

たから 寶 財

【寶】 すべて珍重すべき物をいふ。大學に

「惟善以て寶と爲す。」「國寶」

【財】 人の用に供すべきすべての物をい

ふ。珍重の意は無い。「財産」「財貨」

たき 瀑 瀧

【瀑】 高い處から落下する水である。「瀑

布」「懸瀑」

【瀧】 急流のことで、勾配の急な處を斜に

流れ下る水である。

たくはふ 蓄 貯 儲

ことをいふので、細工の上手な意ではな

い。

たけなは 闌 酣

【闌】 事の半ば過ぎたこと。「酒宴闌」は、

客も追々散じかける頃である。

【酣】 酔の十分なさま。物事の最中。「興

酣」は面白味の最中である。「戰酣」

たすく 助 輔 弼 扶 翼 佐 佑

【助】 力を添へてたすけることで、最も廣

く用ひられる。孟子に「道を得る者は助

多く、道を失ふ者は助寡し。」「天助」「援

助」

【蓄】 少しづつ寄せ集めて置くこと。「蓄

積」

【貯】 入用だけ收藏して置くこと。飢饉の

用意に米穀をしまひ置くは貯である。「貯

蓄」

【儲】 代りにたくはへ置くこと。太子を國

儲」「儲君」といふ。

たくみ 巧 工

【巧】 拙の反對で、物の上手なこと。取り

合せの旨いこと。「巧匠」は細工の上手

な大工で「巧笑」は媚びて笑ふのである。

【工】 もと職人のことである。「精工」「工

緻」などいふは、細工に手の込んでゐる

【輔】 車輪(車の矢)がたふれぬやうに、兩

旁にひかへ木をなし置くことで、轉じて

「たすく」と訓む。「輔導」「輔佐」

【弼】 もと弓のゆがみを正す器で、轉じて

己を正しくして、先方の過失なきやうに

法を守らせること。「補弼」「良弼」

【扶】 手を引いてころばぬやうにたすける

こと。「老を扶け幼を携ふ。」「扶養」「扶

助」

【翼】 鳥の翼のやうに身のかこひとなつて

ある意。又鳥がその翼を以て子鳥を蔽ひ

包むもの故、養育する意を含む。「翼贊」

「補翼」

【佐、佑】 左右の手のやうに身をそひて助

けること。「輔佐」「良佐」「天佑」「神佑」

【祐】 佑と音義同じ。

【援】 引き上げて救ひ助けること。「後援」

「援兵」

【贊】 言葉を添へて助けること。孔子家語

に「游夏一家を贊くる能はず。」「贊成」

「贊助」

【裨】 助け補ふこと。歐文に「陛下の聰明

を裨益す。」「裨補」

【資】 此方に無き物を他から取つて助とす

ること。「資本」

ただ 唯 惟 止 但 徒 管 只

第

【唯】 バカリといふ意である。論語に「唯、

天を大なりとす。」

【惟】 唯と音義同じ。

【只】 唯に似て意輕し。

【止】 只と同じ。ただそればかりの意。

【但】 「ただし」と訓んで、ある條件をいふ

時に用ひ、又「いたづらに」の意にも用

ひられる。

【徒】 「むだに」の意である。「徒勞」「徒費」

【管】 「ただに」と訓んで、その物のみでな

いといふ場合に用ひる。「豈に管にこれ

のみならん。」「兄弟も管ならず。」

董 訂

【正】 邪の反對で、ゆがめる物を眞直にた

だすこと。論語に「有道に就いて正す。」

「正誤」

【規】 「ブンマハシ」のことで、法則を以て

人を正すこと。小學に「徳業相勸め、過

失相規す。」

【繩】 墨繩にあてて正すこと。書經に「愆

を繩し、謬を糾し、其の非心を格す。」

【糾】 あやまちを擧げて、厳しくただすこ

と。又糾とも書く。

【匡】 救ひ正すこと。孝經に「君子君に事

へて、其の惡を匡救す。」「匡正」

【第】 何かなしにただの意。「君第重射せ

よ。臣能く君をして勝たしめん。」

たたかふ 戰 鬪 格

【戰】 陣を取つて兩方から打合ふこと。「戰

争」「決戦」

【鬪】 勝を争ふこと。「争鬪」「奮鬪」

【格】 兩方から衝き合ふこと。「格鬪」

たたく。叩 敲

【叩】 うちたたくこと。「門を叩く。」「叩

頭」

【敲】 たたいて、音を出すこと。「金を敲

く。」「門を敲く。」

ただす 正 規 繩 糾 匡 格 質

【格】 法度格式に合ふやうに正すこと。

【質】 問ひただすこと。「質問」「質疑」

【董】 大勢の上に立つて、下を勵ましたらすこと。「工事董す」。

【訂】 文字の誤をただし定めること。「訂正」「校訂」

たちまち 忽 乍 倏

【忽】 意外に急なこと。「風雨忽ち至る」。

「忽然」

【乍】 定まりなく變り易きこと。「燈將に滅せんとして乍ち明かなり」。「乍ち見れ乍ち失ふ」。

【倏】 忽に似て、その速力の疾きこと。「倏

忽」

たつ 起 立 建 豎 植 樹

【起】 坐の反對で、坐つてゐた者が、身を起してたつこと。「起立」「興起」

【立】 たつてゐること。たち上ることではない。「身を立つ」。「直立」「獨立」

【建】 基礎の上に組み立てること。始めるの意を含む。「家を建つ」。「國を建つ」。「建築」

【豎】 「タテ」と訓む字で、横なる物をたてにすること。「天下爲に寒心して毛を豎つ」。「正しく「豎」と書く」。

【植】 木を植ゑたてるより轉用す。「杖を

たづぬ 尋 訪 討 原

【尋】 たづね求めること。「尋求」

【訪】 人を音づれること。「訪問」

【討】 さぐりたづねること。吟味すること。「討究」「探討」

【原】 事の根原をたづねること。漢書に「心を原ねて罪を定む」。易に「始を原ね終に反る」。

たて 豎 縦

【豎】 横なる物に對して、直立する物をいふ。「豎立」豎は俗字。

【縦】 横、即ち左右の幅に對して、上下の長さをいふので、直立の意はない。

植つ」

【樹】 植と同義。「徳を樹つ」。「黨を樹つ」。

「樹立」

たつ 斷 絶 截 裁

【斷】 物を二つにたち切ること。又切り離すこと。「首を斷つ」。「肢を斷つ」。「門を閉ぢて客を斷つ」。「斷交」「斷橋」

【絶】 物の切れてあとの無きこと。又並ぶ物の無きこと。「絶命」「絶筆」「絶倫」

【截】 切りたつこと。略絶に同じ。「截句」

「截斷」

【裁】 衣服をたつことで、轉じて事柄をきりもりすること。「裁縫」「裁判」「裁決」

たとひ 縦 縦令 假令 假使

【縦】「よしんばさうして見た所で」の意。通鑑に「縦ひ彼言はずとも、籍獨り心に愧ぢざらんや。」

【縦令】「よしんばさうさせて見た所で」の意。

【假令】 假設の辭で、「實際は無い事だが、假りにさうさせて見る。」の意。

【假使】 假令と同義。

たとへ 譬 喩 例

【譬】 類似の物を舉げて、たとへさせること。「富士山の形は、譬へば挿鉢を伏せたるが如し。」「吉凶禍福は譬へば糾へる繩の

如し。」

【喩】 「たとへ」とも訓む字で、譬の中に諭す意を含んでゐる。

【例】 例を擧げること。

たに 谷 谿 溪 澗 壑

【谷】 山と山との間の低き處「幽谷」「深谷」

【谿】 水の流れてゐるたに。「谷川」「谿流」「谿水」

【溪】 谿と同じ。壑亦同じ。

【澗】 谷川。谿の大なるもの。

たのしむ 樂 娛 嬉

【樂】 苦の反對で、心が面白いこと。

【恃】 手に物を持てるやうに、心のたよりにすること。詩經に「母無くば何をか恃まん。」

たふ 堪 耐 任 勝

【堪】 物事をこらへ忍びて成し遂げること。左傳に「君の欲已に甚だし。其れ何を以て之れに堪へん。」

【耐】 持ちこたへること。「草木の性、寒に耐へず。」

【任】 身の力のつづくこと。史記に「病みて行くに任へず。」「能く其の事に任ふ。」

【勝】 物に打勝つ意。孟子に「魚鼈食ふに勝ふべからず。」

【娛】 自ら慰むこと。憂さ晴らしをすること。「琴書を以て娛となす。」「娛樂」

【嬉】 遊び戯れること。韓文に「業は勤むるに精しく、嬉しむに荒む。」「嬉戲」

たのむ 頼 負 憑 怙 恃

【頼】 たよりにすること。力にすること。「依頼」「信頼」

【負】 或力を後たてにしてたのむ意。「貴を負み、權を好む。」「自負」

【憑】 先方へもたれかかる意。「朝廷憑む無きが如し。」「憑依」

【怙】 我が身の要害の如くたよりにすること。詩經に「父無くば何をか怙まん。」

たふとぶ 貴 尊 上 尙

【貴】 賤に對する字で、身分の高いこと。轉じて上品なものとて重んずる意。「王を貴び民を賤しむ。」「玉を貴ぶ。」「高貴」

【尊】 卑に對する字で、たつとび敬ふこと。身分のみに限らず、學徳、年齢などの上に就いてもいふ。「徳性を尊ぶ。」「尊敬」

【上】 たつとい物として上に置く意。史記に「かの秦は禮儀を棄てて首功を上ぶ國なり。」

【尙】 上と音義同じ。

たふる(たふす) 仆 倒 顛 僵 踣

斃 殞

【仆】 立つてゐたものが横にたふれること。「佯り仆れて地に臥す。」「排して之を仆す。」

【倒】 のけざまにたふれること。「君素これを射れば、絃に應じて倒る。」

【顛】 まつ逆さまにたふれること。左傳に「子都下より之を射て顛す。」「顛覆」

【僵】 ふんぞりかへること。「深窟に僵れ臥す。」音キヤウ。

【踣】 つまづき倒れること。左傳に「晉人これ角し、諸戎之れを拵し、晉之れを踣す。」音ホク、ハイ又はフ。

たまふ 賜 錫 給

【賜】 褒賞してたまふこと。又拜領すること。「賜金」「恩賜」

【錫】 賜と同義。詩經に「永く爾の類を錫ふ。」音セキ。

【給】 間に合せて不足のないやうにすること。「供給」「給與」邦文では、他の動作に敬意を添へる助動詞として用ひる。「行給ふ。」「召し給ふ。」

たもつ 保有

【保】 永く持ちこらへること。孟子に「天を畏る者は其の國を保つ。」「保存」

【有】 わが物として所持してゐること。論

【斃】 死にたふれること。「射て一人を斃す。」「吾れ正を得て斃る。」「斃亦同じ。」

たま 珠 玉 璧 球

【珠】 水中から出るもので、眞珠の類。

【玉】 山から出る美しい石。

【璧】 圓い玉。又琢磨した玉。

【球】 圓い物の總稱。「地球」

たまたま 適 遇 會

【適】 ちやうどそこに行き合ふこと。史記に「高祖適旁舍より來る。」「歲適凶。」「

【遇】 フト、思ひがけなくの意。「偶然」

【會】 二つの事柄が、一時に出で合ふこと。

「我れ魯に往く、會彼來る。」

語に「國を有ち、家を保つ者は、寡きを患へずして、均しからざるを患ふ。」「所有」

たる 垂 低 妥

【垂】 上から下へブラリとたれること。轉じて未永く續くこと。「垂柳」

【低】 高の反對で、ひくくなること。「頭を低る。」

【妥】 ベツタリとさがること。「耳を妥る。」
「花妥る。」

たれ 誰 孰

【誰】 その人のたれなるか判らぬ時にいふ。「誰れか之れを知らん。」

【誓】 言葉で違はぬやうに約束すること。

「誓書」「誓言」

【盟】 犠牲を供へ、神祇に祈つてちかふこと。「會盟」「同盟」

【矢】 矢が直行するやうに、心に決して變更せざる意。

ちまた 街 巷 衢

【街】 直なる道路。又大道。

【巷】 曲つてる道路。又小路。

【衢】 路が四方に通じてゐる處。

ちり 塵 埃

【塵】 土の粉末になつて乾いたもの。又總て細かで飛び散るもの。

【孰】 「いづれ」と訓むので、事物の上にいふ。「孰れか焉れより大ならん。」

チの部

ちかし 近 邇 庶

【近】 遠の反對で、餘り隔つてゐないこと。「接近」「近傍」

【邇】 邇の反對で、最も接近してゐること。近に比して用法が狭い。孟子に「道は邇きに在り。反つて之を遠きに求む。」

【庶】 事柄の上に用ふる字で、殆どそれに近い、まづまづさうであらうといふ意。

ちかひ 誓 盟 矢

【埃】 空中に飛び揚つた塵。

ツの部

つかさざる 掌 主 司

【掌】 事務を取扱ふこと。「職掌」「分掌」

【主】 頭役になつて取扱ふこと。「主宰」

【司】 支配すること。「有司」「國司」

つかふ 仕 事 使

【仕】 主人を取つて奉公すること。「幕府に仕ふ」「諸侯に仕ふ」「仕官」

【事】 目上の人の用向をよくつとめること。論語に「父母に事へて能く其の力を竭し、君に事へて能く其の身を致す。」

【君に事ふ。】は忠實に君につくすこと。君に仕ふ。】は單に奉公する意である。従つて「父母に仕ふ。」「師に仕ふ。』とは書かぬのである。

【使】指圖して用事をさせること。「使役」「驅使」

つく 著 就 付 附 即 粘

【著】ピツタリとつくこと。「面に著く。」「土著の人。」「執著」

【就】そこへ行くこと。従ひ近づくこと。「寢に就く。」「害を去りて利に就く。」「去就」「就職」

【付】授け渡す意。韓文に「石洪に史筆を

付すべし。」「交付」「付託」

【附】他物に添ひつくこと。つき隨ふこと。史記に「顔淵篤學と雖も、驥尾に附して行 益顯る。」「附隨」「附屬」

【即】直にそれにつく。「刑に即く。」「位に即く。」

【粘】ねばりつく。又糊でつける。

つく 衝 突 撞 擣 搗 春

【衝】つきあたること。「紅焰天を衝く。」「敵の虚を衝く。」「折衝」

【突】急につきあたること。「突入」「突出」「突貫」「衝突」

【撞】手でつきあてること。「鐘を撞く。」

らなりつづく意。「千載不傳の統を續ぐ。」「續編」

【繼】斷えた跡をつぐこと。「繼母」「繼續」

【嗣】親の後を承けつぐこと。書經に「舜は德に譲りて嗣がず。」「嗣子」

【接】物と物とをつぎ合はせること。「木を接ぐ。」「紙を接ぐ。」「接續」

【襲】下地からある物を、重ねて受けつぐこと。「位を襲ぐ。」「祿を襲ぐ。」「襲爵」「世襲財産」

【尋】後から追ひつぐ意。左傳に「公、宋公と會をなし、將に宿の盟を尋がんとす。」「于戈日に尋ぐ。」

【續】斷の反對で、斷えた所をつぎ、又つ

つぐ 續 繼 嗣 接 襲 尋 紹

【擣】臼でつくこと。「藥を擣く」

【搗】擣と同義で。穀類などを臼でつくこと。音タツ。

【春】うすづくこと。音シヨウ。

つぐ 次 亞

【次】物事の順序次第の上から、續いて來るをいふ。「長官次官」「長男次男」

【亞】物の品質の上で、最上の次なるをいふ。顔回や孟子を「亞聖」といふは、その學德、聖人孔子の次に位するの意。「亞流」

【紹】 續ついでと略りやく同義。鹽鐵論に「子孫位を紹しやうぎ、百代絶えず。」「紹述」

つゞ 告 誥 訊 詔 諭

【告】 廣く用ひられる字で、他につげ知らせること。但し、上から下につげる時には音コウである。「廣告」「告知」

【誥】 告をコウと發音する時と同義で、多く天子から、群臣群民に對して、莊嚴に告げ知らせるに用ひる。

【訊】 告と同義。

【詔】 明にいひきかせる義で、今は専ら天子が臣民につぐるに用ひる。「詔敕」

【諭】 忘れぬやうにつげること。

つくす 盡 竭 殫 悉 殲 罄

【盡】 皆みなサツバリと無くなること。「讀み盡くす。」「滅盡」

【竭】 盡と同義。「産を竭くす。」「智を竭くす。」

【殫】 もと獸を皆ころしつくすことで、轉じてある限りつき果てることをいふ。韓文に「財粟殫き亡ぶ。」

【悉】 「ことごとく」とも訓む字で、残らずの意。「悉皆」「知悉」

【殲】 残らず殺しつくすこと。「殲滅」

【罄】 物を空にすることで、盡よりも用法が狭い。音ケイ。

つくる 作 造 製 爲

【作】 考へて作り出すこと。心を主としていふ。「易を作る者は、それ盗を知るか。」「はじめて八卦を作る。」「作文」「作詩」

【造】 物を拵へ建てること。「船艦を造る。」「貨幣を造る。」「造酒」「造兵」

【製】 工夫して仕上げること。「製薬」「製紙」

【爲】 作に似て意輕し。孟子に「この詩を爲る者は、それ道を知るか。」「作爲」

つち 土地 壤

【土】 草木の根の生ずる處で、轉じて地面の意にも用ひる。「沃土」「國土」

【地】 萬物を載せる處で、天に對していふ。土は物の名、地は位置の名である。「土を運ぶ。」とは言はれるが、「地を運ぶ。」とは言はれない。

【壤】 土と同義。「土壤」「沃壤」

つつしむ 謹 慎 恭 敬 肅

【謹】 言をつつしむこと。轉じて、言行を疎にせぬことを廣くいふ。「謹直」「謹嚴」

【慎】 心を主としていふ字で、注意用心すること。「獨を慎む。」「後を慎む。」「戒慎」

【恭】 行儀を正しくすることで、形の上に就いていふ。「恭順」「恭儉」

【敬】物事を大事にかけて、畏れ尊ぶこと。

心の上に就いていふ。「敬禮」「敬虔」

【肅】つつしみの厳しくして、ひきしまる

意。「肅然として襟を正す。」「嚴肅」

つつみ 堤 防 塘

【堤】土を築いて水を遏めるもの。

【防】河流などの縁に土を築いて、水を防

いだもの。「堤防」

【塘】池の周圍に築いた堤。「池塘」

つつむ 包 裹 韜 蘊

【包】まとひおほふことで、風呂敷で物を

包むやうな場合をいふ。「包含」「包括」

【裹】袋の中に入れること。孟子に「ここ

に餼糧を裹む、裹に裹に。」音クワ。

【韜】外に顯さぬこと。「光を韜む。」「山

林に韜晦す。」

【蘊】深く藏めて洩らさぬこと。「蘊奥」は

物事の秘訣奥義である。

つとむ 務 勤 勉 勵 力 努 孜

懋

【務】精神を一途に用ひ、従事すること。

論語に「君子は本を務む。本立つて道生

ず。」又「つとめ」と訓んで、不斷の仕事

の義に用ひる。「家務」「政務」

【勤】惰の反對で、精を出してつとめるこ

と。「勤苦」「勤學」「精勤」

【勉】しひてつとめること。「勉強」「勉勵」

【勗】勉と同義だが、主に他を勵まし勉め

させることにいふ。「自ら勗む。」は自分

で勵ますこと。音キヨク。

【力】力を盡し、精を出してつとめること。

勤に近い。中庸に「學を好むは知に近く、

力め行ふは仁に近し。」「力學」「力行」

【努】一息に力を入れて勵むこと。「努力」

【孜】倦まずにつとめること。「孜々とし

て勵む。」

【懋】勉と同義。音ボウ。

つねに 常 恆 每

【常】變の反對で、「常法」「常格」は、定

【遂】「とげる」とも訓む字で、此の事から

して、彼の事を成し遂げる意。左傳に「莊

公寤生して姜氏を驚かす。故に名づけて

寤生と曰ひ、遂に之を惡む。」「地を掘り

【恆】常と略同義であるが、別に永久不變

の意がある。「恆久」

【每】「毎度」「たびごと」にの意。

つひに 遂 竟 卒 訖 畢 終

【遂】「とげる」とも訓む字で、此の事から

して、彼の事を成し遂げる意。左傳に「莊

公寤生して姜氏を驚かす。故に名づけて

寤生と曰ひ、遂に之を惡む。」「地を掘り

【恆】常と略同義であるが、別に永久不變

の意がある。「恆久」

【每】「毎度」「たびごと」にの意。

つひに 遂 竟 卒 訖 畢 終

【遂】「とげる」とも訓む字で、此の事から

して、彼の事を成し遂げる意。左傳に「莊

公寤生して姜氏を驚かす。故に名づけて

寤生と曰ひ、遂に之を惡む。」「地を掘り

【恆】常と略同義であるが、別に永久不變

の意がある。「恆久」

【每】「毎度」「たびごと」にの意。

つひに 遂 竟 卒 訖 畢 終

【遂】「とげる」とも訓む字で、此の事から

して、彼の事を成し遂げる意。左傳に「莊

公寤生して姜氏を驚かす。故に名づけて

寤生と曰ひ、遂に之を惡む。」「地を掘り

て遂に水を得たり。」

【竟】「つまり」「あげく」の意。史記に「驪戎を破るに及び、驪姫を獲て之れを愛し、竟に以て晉を亂る。」又「遂に北藍田に至り、再戦して秦兵竟に敗る。」「究竟」

【卒】終盡の意で、「はては」と譯する。「卒にその國を亡ぼす。」

【訖】盡の意で、事の終つてしまつたこと。後漢書に「孔融、志難を靖んするに在り。しかも才疏に意廣く、訖に成功なし。」

【畢】十が十皆すみ盡くしたる意。

【終】始の反對で、終まで到頭の意で、事

【備】具と同義。左傳に「險阻艱難、備に之を嘗む。」

つまびらか 詳 審

【詳】略の反對で、明細なこと。孟子に「博く學んで、詳に之れを説く。」「詳細」

「詳解」

【審】篤と念を入れて、確にすること。詳のやうに細密の意は無い。論語の註に「夫子平日の一動一靜、門人皆審に之れを視て、詳に之れを記す。」「局に當る者は迷ひ、旁觀する者は審なり。」

つよし 強 勁 毅

【強】弱の反對で、力の大なること。「強

の全體にかかる。「終に行かず。」は最後まで行かずにしまつたの意。史記に「武安君終に辭し、行くを肯んせず、遂に病と稱す。」

つひゆ 潰 費 弊

【潰】「つぶれる」「やぶれる」の意である。「堤防崩潰す。」「敵軍潰走す。」

【費】減つて行くこと。「力費ゆ。」「費用」

【弊】「悪くなる」「よわる」「やぶれる」の意。「風俗弊ゆ。」「弊政」「弊害」

つぶさに 具 備

【具】事細に、漏れなくの意。書經に「具に蒙士に訓ふ。」

大「強敵」

【勁】他に抵抗して、容易に屈しないやう、なつよさ。「疾風に勁草を識る。」「筆力勁し。」

【毅】性質の上にいふ語で、物事に怵へ堪へる意。「剛毅」

つらなる 連 聯 羅 列 陳 綿

【連】一つづつある事物を接続させること。「珠を連ぬ。」「連山」「連年」

【聯】大抵連と通用するが、連は一筋に連ること、聯は幾筋にもつらなり、相關係して離れぬ意がある。「聯句」「聯合」

【羅】「あみ」とも訓む字で、網の目のやう

に順序正しく列ること。大寶箴に「八珍を前に羅ぬるも、食する所は口に適するに過ぎず。」「羅列」「羅布」

【列】並びつらなること。「行列」「列坐」「排列」

【陳】順序を立てて並び列ること。列に似てゐる。「陳列」「陳情」「戰陣」陣同字。

【綿】ながく續くこと。「連綿」「綿々」

つゑ 杖 策 策 鞭

【杖】歩行を扶ける棒の總名。

【策】もと、杖とするに適する一種の竹の名。轉じて竹の杖をいふ。音キヨウ。

【策】馬の「ムチ」又「ツエ」。「馬策」「散策」

急存亡の秋なり。

【辰】もと日月相會するをいふのだが、轉じて「良辰」「佳辰」などと天の時をいふに用ひる。

とく 解釋

【解】結ばれたものを解きほぐすこと、轉じて悟り知ること。「理解」「誤解」

【釋】物事の理由を解きあかすこと。「釋義」「解釋」

とど 砥 研 磨 漸

【砥】砥石にあてて砥ぎみがくこと。「砥礪」

【研】薬研で薬などを細末にすること、

【鞭】馬策である。「鞭聲肅々」

下の部

とがむ 咎 尤

【咎】道理、法度、約束などに違ふをとがめること。論語に「既往は咎めず。」

【尤】思はず爲した失錯。又それをとがめること。「言、尤め寡し。」

とき 時 秋 辰

【時】一日の時間、一年の四時、又は廣く時節といふ意に用ひる。

【秋】四季の中で、秋は收納の時であるから、轉じて肝要な時節の意に用ひる。「危

すりみがくこと、砥は性行の方をいひ、研は學藝の方をいふ。「研究」「研鑽」

【磨】石臼で挽くことで、これも「みがく」と訓む學である。「研磨」

【漸】米を洗ふこと。音セキ。

ところ 處 所 攸

【處】住所居所の意で、定まつた場所を指す。「萬物其の處を得。」は、萬物皆各その居所を得て、安堵してゐる意である。

【所】方角と場所との二義を兼ねてゐる。

「公の所に獻ず。」は場所、「火を聞いて、乃ち火の所に至る。」は方角である。又助辭として用ひる。「食ひし所の處を知ら

す。「は、所が、食ふを指し、處は場所を指す。

【攸】 所に同じ。古文に多く用ひた。

とし 歳 年 稔

【歳】 星が天を一周する上からいふ。

【年】 諸種の作物が一回づつ成熟する上からいふ。又作物の實入そのものをいふ。

【稔】 年に年有り」は豊年の意である。

とし 疾 銳 敏 利

【疾】 すばやいこと。「疾きこと風の如し。」

【銳】 刃物の切先が、するどいこと。「銳鋒」「疾走」

【銳利】

【敏】 學藝才德の上で、進歩の早いこと。

【明敏】

【利】 刃物の切れ味の好いこと。「利刃」「銳利」

とし(とぎす) 閉 鎖 杜 絨

【閉】 開の反對で、門を閉ぢること。「閉門」「閉校」

【鎖】 「とぎす」と訓む字で、錠をおろすこと。「鎖港」「閉鎖」

【杜】 とち塞ぐ意。「門を杜づ。」「杜絶」

【絨】 とち合せること。「口を絨づ。」「封絨」

とどのふ 調 整 齊

【調】 程よく和合すること。「陰陽調ふ」

【調和】「調理」

【整】 物事を秩序正しくそろへること。「整理」「整頓」「秩序整然」

【齊】 物事に偏頗なく、平等に正しくすること。「一齊」「整齊」

とどむ 止 留 駐 停 遏 逗

【止】 動の反對で、動かぬこと。又やめること。「静止」「中止」

【留】 去の反對で、その場に緩りととどまること。「意を留む。」「客を留む。」「留連」「逗留」

【駐】 馬をとどめる意。何でも疾く過ぎ去るを引きとどめること。「兵を駐む。」「舟を駐む。」

【停】 その場に暫く止まること。「停車」「停止」

【遏】 押し止めて、向うにやらぬこと。「雲を遏む。」「音アツ。」

【逗】 なほ向うに行くべきを。途中に滯留すること。「逗留」

となふ 唱 徇 稱

★トの部

【稱】名づけて呼ぶこと。「名を何と稱ふ。」

とふ 問 詢 訪 訊

【問】答の反對で、總て物事を尋ね聞くこと。「質問」「尋問」又「おとづれ」の意にも用ひる。「口出づる處の天子、日没する處の天子に問ふ、恙なきや。」

【詢】問ひ謀る意で、相談すること。「諮詢」

【訪】廣く相談する義。こちらから往つて謀ること。又人を音づれること。「訪問」

【訊】問ひただすこと。「訊問」

とほる 通 透 徹 融

【通】塞の反對で、行き通つて問へぬこと。

りも總て燈といふ。

【燭】蠟燭に火を點じたものだけをいふ。

ともに 俱 偕 共

【俱】「一緒に」の意。「玉石俱に焚く」「兩虎俱に鬪ふ。」

【偕】「一緒に、打揃うて」の意。俱に似て意強し。「偕樂」「偕老」

【共】多くの者が集つて、事を共にすること。「衆と之を共にす」「公共」「共同」

とらふ 捕 捉 囚

【捕】逃亡した者を、後から追つかけてとらへること。「追捕」「逮捕」

【捉】手どりにすること。「捕捉」

★トの部

「通達」

【透】突き抜けること。「透明」

【徹】通に似て、底までとほりぬけること。

「徹頭徹尾」「透徹」「徹底」

【融】とけ合ふこと。「融合」「融和」

とも 友 朋

【友】志を同じくして、親しく交るもの。「益友」「良友」「僚友」

【朋】同一の先生に就いて學べるもの。但し朋友と熟して、單に友達の意に用ひてゐる。

ともしび 燈 燭

【燈】蠟燭の火も、油に燈心を浸したあか

【囚】とらへて牢に入れること。

とりこ 俘 虜 擒

【俘】軍で、とりこにした人。「俘囚」

【虜】いけどり。「捕虜」「俘虜」

【擒】戦場で手込めにする事。「生擒」

とる 取 執 秉 操 把 採 撮

資

【取】我が物にすること。孟子に「楊子は我が爲に取る。」「取捨」

【執】固く手に持つこと。随つて心に固く守ることにいふ。「筆を執る。」「權を執る。」「固執」「執心」

【秉】執に似て軽い。とり守ること。「燭

を乗つて夜遊ぶ。「矛を乗る。」音へイ。

【操】正しくとり守ること。「斧を操る。」

「刀を操る。」

【把】握り持つこと。「杯を把る。」「把握」

【採】擇んで摘みとること。「採取」「採用」

【撮】指でつまみとること。

【資】取つて資本にすること。易經に「萬

物資りて以て始まる。」

十の部

ながし 長 永 脩

【長】短の反對で、物體の上にも時間の上にも用ひる。「長久」「長方形」

泣なみ 悲かなんで聲こゑを高くして泣なくのである。「啼な泣な」

【泣】聲を立てず、涙を流して泣くこと。

「泣血」

【哭】涙を流し、聲を揚げて泣くこと。深く悲しむのである。「慟哭」「痛哭」

【轉】鳥がさへづり鳴くこと。

なげうつ 抛 擲

【抛】投げすてる意。「抛棄」

【擲】投げつける意。「試に地に擲たば、常に金石の聲を作すべし。」音テキ。

なげく 嘆 歎 慨

【嘆】心に深く感じて、溜息をつくこと。

★ナ の 部

【永】時間の上にいふ。「永久」「永遠」

【脩】スラリと長いこと。「脩竹」「脩尾」

なかだち 媒介

【媒】縁組の取持をすること。「媒妁」

【介】雙方の中間に立つて、引合をすること。「紹介」「媒介」

なく 鳴 啼 泣 哭

【鳴】鳥獸の鳴くこと。「悲鳴」「和鳴」又

「なる」と訓んで、萬物の音を出すこと。

「鐘が鳴る。」又名聲の世上に聞え渡るこ

と。「天下に鳴る。」

【啼】聲を立ててなくこと。鳥獸に用ひる時は悲喜の別が無いが、人に用ひる時は、

「嘆息」「嘆願」

【歎】嘆に同じ。

【慨】くやしがつてなげく。公の爲になげ

く。「慷慨」「慨嘆」

なし 無 无 莫 亡 罔 蔑 靡

微

【無】有の反對で、其處に物の無いこと。

廣く用ひられる。

【无】無の古文。

【莫】確と決定して無いといふ義。孟子に「不祥、これより大なるは莫し。」

【亡】存の反對で、今まで有つたものの無くなつた時にいふ。論語に「顔回といふ

者あり、學を好む。不幸短命にして死し、
今や則ち亡し。」

【罔】實際は有つても、自分が強ひて無し
とすること。「昊天極り罔し。」

【蔑】「なみす」と訓んで、實際有るものを
無いやうに取扱ふこと。罔に似てゐる
が、侮る意がある。「蔑視」「輕蔑」

【靡】「あるまじ」と譯して、兎角無いやう
に思はれるの意。

【微】「なかりせば」と訓んで、假定の場合
にいふ。論語に「管仲微かりせば、吾れ
それ髪を被り、衽を左にせん。」
なす(なる) 爲 作 成 就 做 濟

【做】 作の俗字。

【濟】「わたる」と訓んで、彼岸に達する意
の字で、困難障礙を歴て、事物を仕遂げ
ること。左傳に「世その美を濟して、そ
の名を隕さす。」

なほ 猶 尚 由 仍

【猶】「舊に依る辭」と註して、「まだやは
り」の意である。「春猶淺し。」

【尚】「それでもやはり」の意である。詩經
に「老成人無しと雖も、尙典刑あり。」

「尙餘命あり。」

【由】 猶と音義同じ。

【仍】「相も變らさず」の意。「大變仍至る。」

【爲】 事をなすこと。「善事を爲す。」「行
爲」「なる」と訓めば、甲が乙になり變る
こと。莊子に「北冥に魚あり、その名を
鯤となす、化して鳥と爲る、その名を鵬と
なす。」氷解けて水と爲る。」

【作】 なし始めること。「興作」「作事」又
「しわざ」といふ名詞の場合は、音が「さ」
である。「所作」「作業」

【成】 なし遂げること。「なる」と訓めば、
出來上ること。「成功」「成就」「成績」
「落成」

【就】 成と同義で、なし終ること。出來上
ること。

「今年寄宿仍淹留す。」

なみ 波 浪 濤 漣 瀾

【波】 風の爲に生ずる水のうねりで、大小
共に廣く用ひる。「細波」「風波」

【浪】 高くはげしいなみ。「激浪」

【濤】 大波である。「風濤險惡」「怒濤」

【漣】 さざなみ。微風起つて波紋をなすこ
と。「漣波」

【瀾】 緩く大きい波。「波瀾」

なやむ 惱 懊 艱

【惱】 精神上に苦しみなやむこと。「苦惱」
「煩惱」

【懊】 うらみなやむこと。「懊惱」

【艱】 物事の障の多いこと。「艱難」

ならふ 習 效 倣 倣

【習】 同じ事を幾度も繰り返して、習ひ熟

すること。論語に「學んで時に之を習ふ、

亦説はしからずや。」「習字」「復習」

【效】 先例にまねること。左傳に「順を去

つて逆に效ふは、禍を招く所以なり。」

【倣】 效と同義。「模倣」

【倣】 效と音義同じ。

ならぶ 竝 並 併 駢 比 雙 排

【竝】 多少に拘らず、横に立ちならぶこと。

「竝行」「竝驅」

【並】 竝の俗字。

【併】 一所に一緒にすること。「兼併」「併

合」併は俗字。

【駢】 數多くつらなり並ぶこと。水經の注

に「民居駢比す。」「駢死」駢は俗字。

【比】 間のすかないやうに、ひつ付き合う

て並ぶこと。「比隣」「櫛比」「比年」

【雙】 同じやうな物が二つ並ぶこと。「一

雙」「雙眼」双は俗字。

【排】 列を正しくならべること。「排列」

「排比」「按排」

なる 馴 狎 慣 變

【馴】 鳥獸が、人になれること。「猛虎馴伏

す。」「馴致」「馴養」

【狎】 なれなれしくなじむこと。禮記に

「狎れて、しかも之れを敬す。」「狎侮」

【慣】 常々やつて、なれてしまふこと。「習

慣」

【變】 なじんで、心安くすること。「變臣」

は親しい家來。「變玩」は、なれてもてあ

そぶこと。

三の部

にぎはす 賑 瞻 馴

【賑】 貧しき者を救ひ恵むこと。振と通じ

て、零落した者を引き興しやる意。「賑

恤」

【瞻】 不自由のないやうに給しやること。

「たらず」とも訓む。「倉の見殺を出して、

以て貧乏の者を瞻はす。」「音セン。

【馴】 周くゆきわたるやうに給すること。

「窳を馴はし、匱を馴む。」「音シウ。

にぐ 逃 遁 亡 脱 北

【逃】 にげ出すこと。「逃走」

【遁】 にげかくれること。「遁世」「遁竄」

【亡】 にげ失せること。「逃亡」

【脱】 ぬけ出ること。「脱出」「脱走」

【北】 敵にうしろを見せること。「三たび戦

ひて三たび北ぐ。」「敗北」

にくむ 惡 憎 疾

【悪】 好の反対で、非常に嫌がること。左傳に「莊公寤生して姜氏を驚かす、遂に之れを惡む。」大學に「好みてその惡を知り、惡みてその美を知る。」

【憎】 愛の反対で、面にくく思ふこと。「蒼蠅を憎む。」

【疾】 嫉と通じて、他人をねたましく思ふこと。史記に「龐涓、孫臏の己より賢なるを恐れて之れを疾む。」

にじ 虹 霓 蜺

【虹】 雄にじ。色の鮮明なるもの。「白虹」

【霓】 雌にじ。色の鮮明ならざるもの。「大早の雲霓を望むが如し。」

す。上、遽に出でて高きの上る。俄にして、水滸殿に入る。「急遽」

【暴】 思ひがけもなく、非常に急なこと。

【暴に卒す】 は不意に死ぬこと。「風雨暴に至る。」

【卒】 フト、又不用意で粗忽なこと。「卒に敵人に遇へば、亂れて行を失ふ。」「卒然として問うて曰く。」

にらむ 睨 睚 盼 睨

【睨】 斜に視ること、恨み見るの意はない。「睨睨」は見下すことである。

【睚】 目を張つて、眞向に見ること、憎んでにらむのである。「睚眦の怨」

【蜺】 霓に同じ。

になふ 荷 擔

【荷】 天秤でかつぐが本義。「負荷に堪へず。」

【擔】 肩に掛けて、かつぐこと。「負擔」

「分擔」

にはか 俄 驟 遽 暴 卒

【俄】 直に、程なくの意。「俄にして其の疾自ら瘳ゆ。」「俄然」

【驟】 急に、あわただしいこと。夏にはか雨を「驟雨」といふ。

【遽】 あわてることで、驚く意を含んでゐる。唐書に「高宗萬年宮に在り、夜大水

【盼】 目を張つて恨み見ること。魏志に「目を瞋らして之れを盼む。」晋ケイ。

【睨】 目を見張つて、瞬きもせずに見詰めること。「睨垂」

にる 似 肖

【似】 異類の物でも、相類することをいふ。「彼れは鼠に似たり、晝伏して夜動く。」は、人を鼠に比したるもの。

【肖】 同類又は類似すべき者が互に相類すること。父に類せざる子を「不肖」といふは、元來父子は同類だからである。又特に似せてうつすことにもいふ。「肖像」

にる 煎 煮 烹

【煎】 汁の乾くまで煮つめること。「煎藥」
 【煮】 調味せず、ただ煮わかすこと。「茶を煮る。」
 【烹】 調味して煮ること。「魚肉を烹る。」

又の部

ぬく 抜 抽 挺 擢 脱

【抜】 ぬき出すこと。又多くの物の中から、ぬけ出ること。「刀を抜く。」
 【選抜】 自らぬけ出ること。「刀室を挺出す。」
 【抽】 引き出すこと。「抽斗」「抽匣」は引出のこと。「抽出」「抽籤」
 【挺】 自らぬけ出ること。「刀室を挺出す。」

は、刀が自然と鞘から出たこと。又他の者よりぬけ出ること。「挺身」

【擢】 同じものの中からぬき出すこと。「選擢」「擢擧」「拔擢」
 【脱】 その中から、ぬけて外に出ること。「脱會」「脱走」又「ぬぐ」と訓んで、身に被つた物を取り去ること。「衣を脱ぐ。」
 「脱帽」

ぬすむ 盜 偷 竊

【盜】 人の物を断りなしに取つて、わが物となすこと。又その人をもいふ。
 【偷】 人目をはずすこと。「閑を偷む。」は、閑が無いのに、少しの時間があれば、そ

と。「軍を竊ふ。」音カウ。

【勞】 骨折をいたはり慰めること。「慰勞」

ねたむ 妬 妬 嫉 媚

【妬】 婦が、夫に對して倍氣すること。轉じて男にも用ひ、又一般の場合にも用ふ。
 【妬】 妬に同じ。「嫉妬」

【嫉】 己よりも優るものを憎むこと。「賢を嫉む。」
 【嫉視】

【媚】 夫が婦に對して倍氣すること。轉じて妬と通用す。音バツ。

ねむる(ぬる) 眠 睡 瞑 寢 寐

【眠】 目を合せて、トロトロとねつくこと。

「安眠」「睡眠」

れをかすめて他の事をする事。「生を偷む。」は、無益に生きてゐること。

【竊】 人目を忍んで、コツソリとすること。「竊み讀む。」は、所有主の居らぬ間に、コツソリ讀むこと。「竊盜」「剽竊」

ぬる 塗 槩

【塗】 もと泥のこと。轉じて壁などをベツタリとぬること。「塗抹」
 【槩】 漆をぬること。髹亦同じ。

ネの部

ねざらふ 犒 勞

【犒】 物を與へて、他人の骨折に酬ゆるこ

【睡】 眠と略同義で、おねむりする事。史記に「孝公、時々睡りて、鞅の言を聴かず。」「假睡」

【瞑】 ただ目を閉づること、心まで眠るのではない。「瞑目沈思」

【寢】 臥床に就くことで、眠るのではない。論語に「宰予晝寢ぬ。」「食ふに語らず、寢ぬるに言はず。」

【寐】 ねいり込むこと。よく眠つてゐること。剪燈新話に「獨り中堂に坐し、寢ぬれども寐ねられず。」「寤寐」「夢寐」

ノの部

轉じて心に欲求することにも、又人に仰がれることにも用ふ。「眺望」「瞻望」「希望」「人望」「德望」

【臨】 高い處より下を見下すこと。又尊が卑にゆきのぞむこと。「深淵に臨む」「君臨」「降臨」「照臨」

【泣】 臨に似て、用法狭し。其の場に顔を出すの意。「朝に泣む」「事に泣む」

【莅】 泣に同じ。「紙に莅む」

【蒞】 同上。

のぞ 咽 喉

【咽】 食道の上部、飲食の通ずる處。

【喉】 氣管の上部、息の通ずる處。「咽喉」

のがる(にぐヲ見ヨ)

のこる(のこす) 殘 遺 貽 剩

【殘】 もと禽獸の食ひ餘した肉のことで、荒れのこる意。轉じて廣く「のこる」「あまる」の意に用ひる。

【遺】 形見にのこすこと。又形見としてのこつてゐること。「遺産」「遺言」「遺跡」

【貽】 後々までのこすこと。「範を萬世に貽す」「殃を貽す」

【剩】 満ちてなほ殘ること。餘りである。「剩餘」

のぞむ 望 臨 泣 莅 蒞

【望】 遠きを眺め、又は高きを見ること。

と熟して用ひ、轉じて要處の地の意に用ひられる。

ののしる 罵 詈

【罵】 正面から人の惡口をいふこと。「罵倒」「嘲罵」

【詈】 傍で惡口をいふこと。罵よりは輕い。「罵詈」

のぶ 伸 延 舒 展 申 信 暢

紆

【伸】 屈の反對で、屈曲してゐるものをのべること。「欠伸」は、あくびして身體をのばすこと。「伸張」「伸縮」

【延】 物事を長く引きのばすこと。「延引」

「延長」 「延壽」

【舒】 卷の反對で、卷いてある物をのばしひろげること。「柳葉舒ぶ」 「眉舒ぶ」

【展】 略舒と同義で、廣げる意あり。「扇を展ぶ」 「發展」 「展開」

【申】 伸と同じ。

【信】 伸と同義。

【暢】 心のノビノビとしてゐること。「通暢」 「暢達」

【紆】 緩めること。「災を紆ぶ」 「旦夕を紆ぶ」 「音シヨ」

のぶ 述 宣 陳 演

【述】 すでにある事を受けついで、一層弘

めていふこと。又自分の意志を述べあらはすこと。中庸に「父、之れを作つて、子、之れを述ぶ」 「述作」 「祖述」

【宣】 あまねくあらはしひろげること。「宣言」 「宣傳」

【陳】 「つらぬ」とも訓む字で、ならべ立て、敷へ立てること。「陳述」

【演】 ひろげのべること。「演義」 「講演」 のぼる 升 昇 陞 登 上 騰 躋

【升】 降の反對で、すすみのぼること。「天に升る」 「堂に升る」 「升進」

【昇】 日ののぼること。古は升を用ひたが、

後に日を加へたのである。「旭日昇天の勢」

【陞】 升と略同義で、階をのぼり、官にのぼること。「陞進」

【登】 斜なるをのぼること。又だんだんとのぼること。「山に登る」 「樓に登る」

【上】 下の反對で、下から上にのぼること。上下真直にのぼり、又速にのぼるにいふ。「天に上る」 「車に上る」 「堂に上る」 は、皆その上にあがるをいふ。

【騰】 跳りあがることで、物の上へのぼる意はない。「物價騰貴」 「奔騰」 「飛騰」

【躋】 精出してのぼること、又のぼせるこ

と。王吉「一世の民を馭りて、之れを仁壽の域に躋す」 「躋攀」

【陟】 降の反對で、登と略同義。又黜（しりぞく）の反對で、官位をのぼせること。

のむ 吞 飲 咽 嚥

【吞】 嚙まずに物を丸吞にすること。「八荒を并吞する心」 「刀を吞む」 「吞舟の魚」

【飲】 湯水などの液体をのむこと。「飲酒」 「飲料」

【咽】 一口づつ咽へのみ込むこと。「咽下」

【嚥】 咽と同義。「嚥下」 のり 則 法 範

【則】 一定のきまり。「法則」「規則」

【法】 一國の制度禮法。「國法」「刑法」

【範】 物事の「かた」手本のこと。「模範」

のる 乗 騎 駕

【乘】 車にのること。轉じて物の上につてゐること。「雲に乗る」「勢に乗る」

「時に乗る。」

【騎】 馬にのること。

【駕】 馬車を仕立てること。轉じて車に上り、馬車で他にゆくにも用ひる。又物の上に立ち優ることにもいふ。「凌駕」

はか 墓 墳 塋 冢 塚

【墓】 死者を埋めた丘のこと。「墓地」「展墓」

【墳】 死者を埋めた上に、高く土を盛りあげたもの。「古墳」「墳墓」

【塋】 墓地の領分内をいふ。「塋域」

【冢】 死者を埋めた上に土を盛り上げ、目標の樹木を植ゑつけたもの。

【塚】 冢に同じ。

はかる 計 謀 圖 量 度 權 測
揣 村 商 揆 略 策 籌
算 料 校 議 畫 程 鉉
衡 詞

ハの部

【計】 數をかぞへること。轉じて見積るること。「計算」「總計」「計畫」「計略」

【謀】 心に思ひはかること。又人に相談すること。「事を爲すに始を謀る」「兩親に謀る」「謀計」

【圖】 重大な事に就いて計畫を立てること。計謀よりも重し。「諸侯朝して天子の事を圖る」「雄圖」「後圖」「大圖」

【量】 升目の義から轉じて、一般に事物の大小輕重を見積ること。「力を量りて之れを行ふ」「測量」

【度】 物指ではかること。轉じて事物の長短大小を見積ること。量は強弱の如き

動的方面に、度は大小長短の如き靜的方面に用ふる傾きがある。左傳に「徳を度らず、力を量らず。」名詞で「ものさし」の時は音ド、動詞で「はかる」の時は音タク。

【權】 「はかり」の「おもり」のことである。轉じて輕重をかけて見るやうに見はからふこと。「權謀」「權變」

【測】 水の深さをはかること。轉じて事物の奥底や距離などをはかるに用ふ。「禍測られず」「測量」

【揣】 手で探りはかる義で、先方の様子を推量すること。「揣摩」

【付】 他人の心を推量すること。「他人心有り、我れ之を付度す。」

【商】 彼此をつもりはかること。「商量」「商略」「商議」

【揆】 「かた」に合ふか合はぬかをはかること。「揆度」

【略】 もと田地の境を計畫する義で、キリモリすること。「軍略」「霸王の略」

【策】 算木、算盤等にかけて、よしあしをはかり、勘定をつけて、見る義。「計策」「策略」

【籌】 「かずとり」のこと。轉じてはかりごとの意。「籌策」「籌度」

【程】 これ程と限量を立てること。禮記に「重鼎を引くに、其の力を程らず。」「程度」

【銓】 「はかり」で物をかけるやうに、品位高下を精しく品計して分つこと。「品銓」「銓評」

【衡】 「はかり」の棒をいふので、左右を見合せ、公平にはかること。「銓衡」

【詢】 問ひはかること。「諮詢」
はく 吐 噴 嘔 略

【吐】 呑の反對で、口中の物をはき出すこと。「吐哺」「吐瀉」
【噴】 勢よくはくこと。莊子に「噴けば、

【算】 算木のこと。轉じて謀略の義に用ふ。「勝算」「廟算」

【料】 升数を數へる義で、轉じて推しはかる義にも用ふ。史記に「外は其の敵の強弱を料り、内は其の士卒の賢不肖を度る。」「民を料る。」「兵を料る。」

【校】 比較してはかること。「校量」「功を校る。」

【議】 寄り合つて、口にかけて評定すること。禮記に「公事は私に議らず。」「會議」

【畫】 略圖と同義。線を引いて、此の通りが宜からうと差圖すること。史記に「秦の爲に長平の事を畫る。」「計畫」「企畫」

【嘔】 幾度も續けて、胃から吐き出すこと。「嘔吐」

【咯】 咽喉がつまるやうになつて、すぐ吐き出すこと。「咯血」「咯痰」

はこ 箱 匣

【箱】 もと大車の中の物を容れる處の名である。竹を用ひたから、竹冠がつく。底があり、蓋があつて、物を藏めるものは皆箱である。葛籠行李の類は箱である。

【匣】 底があり、四面を圍めるもので、物を容れるはこ、硯バコ、紙バコの如きは、

匣字を用ひてよい。

はじめ 始 初 創 首 甫 翹 肇

【始】 未又は終の反對で、主に事の上にいふ。「はじめ」「はじめて」「はじめむ」皆用ひる。孟子に「是王道の始なり。」「始めて俑を作るものは、それ後なからんか。」「始業」

【初】

主に時間の上にいふ。「はじめ」「はじめて」と用ひるが、「はじめむ」とは用ひない。左傳に「初めて六羽を獻じ、始めて六佾を用ふ。」「初春」

【創】 新に事をはじめること。始よりも意強し。「創業」「創立」

に道に遣へば、趨つて進む。論語に「鯉趨つて庭を過ぐ。」「參趨」

はす 馳 騫 驅 騁 騶

【馳】 一散に、又眞直に馬を走らせること。「奔馳」

【騫】

亂馳を騫といふとあつて、戰爭などに彼方此方に馬を走らせること。「馳騫」

【驅】 馬を鞭うつて、疾くかけさすこと。「馳驅」

【騁】 「驅逐」 駟は同字。

【騶】 一散にはすること。略馳と同義。「馳騶」

【驟】 馬を疾足に歩ませること。「馳驟」

はた 旗 旌 旆 幟 纛

★ハの部

【市】 大きくなることのはじめ。「武市のて五歳。」「

【首】 頭首の義で、第一番。「首唱」「首席」

【翹】 創に同じ。翹は俗字。音シヤウ。

【肇】 だんだんと開けはじめること。「國を肇む。」「音テウ。

はしる 走 奔 趨

【走】 かけてゆくこと。又逃げ出すこと。

【甲を棄て、兵を曳いて走る。」「敗走」

【奔走】

【奔】 勢よく走ること。又駈落すること。「奔馬」「出奔」

【趨】 小足で早く歩むこと。禮記に「先生

【旗】 龍や虎などの模様を描いた「のぼり」のこと。又「はた」の總名。

【旌】 羽を竿頭につけたもので、「はた」とは訓めど、房のやうなものである。

【旆】 又旌とも書く。細長く、翻々として風に翻ること。「吹流し」の如き旗で、將帥の建てたもの。

【幟】 軍陣の標旗で、たけの長いもの。漢書に「趙幟を抜いて、漢の赤幟を樹つ。」の注に「長さ一丈五尺、幅は之に半ばす。」とある。

【纛】 釐牛の尾で作つて、龍の頭のついた竿に懸けたもので、もと葬式に用ひたが、

後には天子の旗となつた。「大纛を進む。」

はだ 肌 膚

【肌】身の皮をいふ。「肌肉玉雪の如し。」

【膚】肌の外面で、従つて薄い意味があるので、「膚淺」「膚薄」と熟する。「皮膚」

はづ 恥 羞 慙 慚 愧 忤 辱

忤 報 忤 泥

【恥】「はぢ」「はづ」と訓んで、自ら心に咎めること。「恥を知るは勇に近し。」「君子は、其の言の、其の行に過ぐるを恥づ。」

【羞】「はぢらふ」こと、きまりわるがること。史記に「鮑叔は、能く我が小節に羞ぢずして、功名の天下に顯れざるを恥づ

るを知れり。」

るを知れり。」

【慙】他に對して面目なく思ふこと。孟子に「燕人齊に畔く。宣王曰く、吾れ甚だ孟子に慙づ。」

【慚】慙と同字。

【愧】慙に似て意強し。他に對して、己の行を深くはづること。「慙愧」

【忤】

【忤】はぢて心が動き、顔色を變へること。孟子に「仰いで天に愧ぢず、俯して人に忤ぢず。」禮記に「容忤づること勿れ。」

【辱】「はづかしめ」「はづかしむ」と訓む。榮の反對で、外聞悪い、不面目の義。「屈辱」「侮辱」

【辱】「はづかしめ」「はづかしむ」と訓む。榮の反對で、外聞悪い、不面目の義。「屈辱」「侮辱」

【忤】辱と同義。詩經に「爾が所生を忤しむること亡れ。」

【報】恥ぢて赤面すること。忤に似てゐる。「慙報」

【忤】

【忤】忤愧と連用して、恥ぢてモチモチするさまをいふ。音テク。

はな 花 華

【花】草木の花のこと。「梅花」「菊花」

【華】花と同義にも用ゐるが、多くは物の盛美にして、はなやかなことをいふ。「華美」「華奢」「文華」

はなつ 放 縱 發

【放】手に持つてゐる物をはなすこと。「鳥

★ハの部

【放】手に持つてゐる物をはなすこと。「鳥

★ハの部

【縱】繩で束縛してある者を解いてやる意で、ゆるして自由にさせること。「囚人を縱つ。」

【發】矢、彈丸などを放射すること。「矢を發つ。」「發砲」

はなはだ 甚 酷 太 絶 孔 痛

【甚】用法最も廣い。他よりも目立つこと。

【酷】甚よりも狭くして強い。「酷似」「酷暑」

【太】太極 太上の意で、此の上なし、第一番のこと。宋玉の賦に「粉を著くれば太だ白く、朱を施せば太だ赤し。」「太古」

【太】

【太】

【太】

【太】

【太】

【太】

【太】

【絶】 飛び離れて、殊に甚だしいこと。史記に「平王自ら秦女を取りて、絶た之を愛幸す。」「風景絶佳。」「絶妙」

【孔】 甚の古字で、今普通には用ひない。
【痛】 度を過ぎて、堪へかねる程のこと。
「痛恨」「痛快」

はばかる 憚 難

【憚】 忌み嫌つて避けること。「過つて改むるに憚ること勿れ。」

【難】 難儀なり、面倒なりとして、はばかること。

はやし 早 蚤 夙 疾 速

【早】 晩の反對で、日出のこと。又常の時

「攘夷」

【祓】 災を除き、福を求めること。「祓除」

「祓禊」

はり 針 鍼 砭

【針】 裁縫用のもの。

【鍼】 針と同義だが、今は専ら治療上用ふるものをいふ。

【砭】 石ばり。病を刺す鍼。「砭灸」

はる 張 貼 脹 腫

【張】 勢があつて引き張ること。「翹を張る。」

【貼】 糊などで、はりつけること。「貼付」

【脹】 全體が、はれふくれること。

★ヒの部

節よりも早いこと。「早行」「寒到ること早し。」

【蚤】 早と音義通ず。「蚤起」

【夙】 未明の義で、早よりもはやい。「夙に起き夜に寝ぬ。」

【疾】 徐の反對で、足ばやに行くこと。「疾走」

【速】 遅の反對で、廣く用ひられる。

はらふ 掃 拂 攘 祓

【掃】 帚ではくこと。「雪を掃ふ」「掃除」

【拂】 バツバツと少しづつはらふこと。「塵を拂ふ」「拂拭」

【攘】 推しのけ、遂ひ拂ふこと。「撃攘」

【腫】 一部分が、はれること。

はるか 遙 遐 杳 夐

【遙】 距離が遠く隔つてゐること、廣く用ひる。

【遐】 邇の反對で、都府から離れた僻遠の處をいふ。遙よりは更にはるかである。

「遐邇一體」は、帝都の附近も、僻遠の地も、一體であるの意。

【杳】 遠くて、かすかな意。「杳冥」「杳渺」

【夐】 遠くまで見渡す意。茫漠たる廣野などをいふ。「夐に人を見ず。」音ケイ。

の部